
I wish ~ 背神と名の信仰 ~

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I wish ～背神と名の信仰～

【Nコード】

N6205M

【作者名】

まあ

【あらすじ】

神を嫌悪する少年クロス、神を崇拝する少女セフィ。2人は多くの人と出会い……

自サイト『光と影』でも連載しています。

prologue

prologue

少年の前で彼の父親が教会の旗を掲げた兵士達に暴行を受けている。

少年は1人の兵士の足にしがみつき父親への暴行を止めさせようするが、

「止めて、お父さんをいじめないで」

少年の力で止められる訳が無く、

「五月蠅い!!」

兵士は少年を振り払うとまるで少年を見下すような瞳で見ながらいやらしい笑みを浮かべ、

「ガキ、いいか？ ダークエルフは邪悪なんだよ。このまま生かしておくとお前みたいな邪神に洗脳されたガキが増えるんだよ」

少年の父親を『邪悪』だと決めつけ自分の正当性を主張する。

「お父さんは優しいよ。悪い事なんてしてない!!」

その兵士の言葉に少年は納得できるはずもなく声を荒げた時、

「このガキは手遅れだな。いくら教会で愛と正義を教えてやっても信じないだろうし…殺すか？」

少年と兵士のやりとりを笑いながら眺めていたもう1人の兵士が楽しそうな笑みを浮かべて言う。

「そうだな。ダークエルフと邪教徒、2つの首で俺達の株も上がるだろ」

兵士はその言葉に同意すると、

「良かったな。大好きな父親と一緒に神様のところへ送ってやるよ」

兵士達が少年ににじり寄り少年の腕を掴んだ時、

「その子を離せ」

多くの兵士に囲まれて傷だらけの少年の父親が最後の力を振り絞り兵士に体当たりを喰らわせる。

「お父さん!？」

少年は父親の抵抗で兵士の手から解放されるが、攻撃を受けた兵士は面白いわけもなく、

「こいつ、何しやがる!!! ガキは後だ!!! 先にこの邪悪なダークエルフを始末するぞ!!!」

攻撃の対象は少年の父親に向けられる。

「止め……」

少年はその様子にまたも兵士の足にすがりつき兵士を止めようとするが、

「クロス、逃げなさい。お父さんは大丈夫だから」

父親が少年を制止する。

「……でも」

涙を目に浮かべ、父親を助けようとする少年に、

「いいから行くんだ」

父親は微笑み諭すように言う。

少年はその言葉を聞いて、幼い瞳いっぱい涙を浮かべながら父親を背に走り出す。

（それでいい。もう私はあの子を見守る事は出来ないが……我らが慈悲深き神よ。優しいあの子が道に迷わないように見守って下さい）

父親は最愛の息子の背中を兵士達が信仰する神とは異なる神に祈る。

「さすが邪教徒だ。あのガキ、父親を見捨てやがったぜ」

兵士達はその様子を見て、少年には興味もなくなったのか笑いながら父親を痛めつけている。

（……お父さん、ごめんなさい。ごめんなさい）

耳に入る兵士達の笑い声を聞きながら少年は暗い獣道を走る。

どれだけの距離を走ったかは少年にはわからない。
暗い獣道を抜け、町の光に気づくと、

（灯りだ。誰か助けを……）

町の光を見つけ、父親を助けて貰おうとするが少年の体力はそこで力尽きたようで、急に力が抜け倒れ込む。

「おい！？ 坊主。どうした？ そんなに怪我して。おい、目を開ける。誰か治癒魔法を使える奴はいないか？」

少年が倒れ込む様子を見かけたのが冒険者風の男が駆け寄って少年を支えて、助けを呼ぶなか、「…あ、おと」

少年は父親を助けて欲しいと言おうとするが体力が底をついているせいか言葉が上手く出てこない。

「坊主、しゃべるな。治癒魔法を使える奴はいないか？ いないか？」

男は少年を抱きかかえると治癒魔法を使える人間を探して走りだす。

しばらくして、冒険者風の女が男に声をかけ、少年に治癒魔法をかけるが、

「どうして！？ この子には治癒魔法が効かないの？」

少年に治癒魔法は効果がなく、驚きの声をあげる。

「知るか！！ それなら医者だ。この子を助けるぞ」

「ええ」

2人の冒険者は医者を探しに駆け出し、少年は男の腕に抱きかかえられ、薄れゆく意識の中、

(……………どうして神様はお父さんを助けてくれないの？ あんなに毎日、お祈りしたのに……………そうだ。神様なんてい・な・い・ん・だ……………)

この日、少年はたった1人の『家族』と信じていた『神』を失った。

story・1

少年と小さなドラゴンが道を歩いている。

(……久しぶりだな)

少年は久しぶりにこの小さな町に帰ってきたようで、宿泊施設を兼任している冒険者達が集まる店のドアを開ける。

「カリーン」

ドアを開けるとかきいれ時には少し早いようであまり混んではないなように見える。

(……)

少年は他の客には目もくれず、カウンターに座ると、

「坊主、久しぶりじゃねえか？ どこまで行ってた？」

店主は少年を見て懐かしい顔をみたようで声をかけるが、

「……王都まで」

少年は店主の言葉に笑顔を見せる事もなく愛想もなく答える。

「王都か？ どんな仕事だったんだ？」

そんな少年の様子に店主はなれているようで特に気にした様子もな

く少年に向かい聞くと、

「……護衛と使えない新人のお守り」

少年はメニューを広げながら、仕事があまり上手くいかなかったのか不機嫌そうに言い、

「まあ、お前と対等に仕事を出来る人間はこの辺だと数人しかいないだろ」

店主は他の冒険者が少年に足を引っ張られていたと感じたようで苦笑いを浮かべ、

「だけど、依頼は成功したんだろ？」

依頼の正否を聞くと、

「……まあな」

少年は当たり前の事を聞くなと言った様子で不機嫌そうに答える。

少年の名前はクロス「ブラッド」と言い、冒険者を始めてもう7年になる。

この辺りのモンスターは大人しく滅多に人間を襲う事は無く、この町での冒険者の仕事は近辺の町までの護衛といった簡単な仕事ばかりで少年の実力にあった仕事はなかなかない。

「飯にはまだ早いが何か食うか？」

店主はクロスの様子に苦笑いを浮かべて言うと、

「……量のあるものとフィルにはいつもの」

クロスは自分の飯と一緒に店に入ってきた小さなドラゴンの飯を頼む。

「ミルクは飲むか？」

「飲む」

店主はクロスをからかうように言うが、クロスはその質問にたいしてはあまり反応する事なく答えると、クロスの様子に店主は苦笑いを浮かべ、

「相変わらず酒はダメか？」

クロスに聞き返すが、

「飲む必要が無い。名前も売れてくると名を上げようとバカが来るから潰れる訳にもいかないからな」

自分が酒に弱い事と周りの相手からの自分の評価を理解しているようにでそう言い、

「違うない」

バカが来るから潰れる訳にもいかないか店主は豪快に笑いながら料理を作り始める。

（……仕事見てくるか？）

クロスは店主の調理している姿を見ているのが暇だったようで、新しい仕事の情報を探しに掲示板に向かう。

story・2

（この町じゃたいした仕事は無いか……護衛が数件と新しい遺跡の調査……微妙だな）

クロスは掲示板を見ながら次の仕事をどうするか考えているが、

（……別にこの町で探す必要もないか）

自分の力量に見合う依頼もないようで他の町で仕事を探そうと決めた時、

「坊主、飯が出来たぞ」

店主がクロスの飯が出来上がったとクロスを呼ぶ。

「ああ」

クロスはカウンターに戻り料理を受け取り、食べ始めると、

「良い依頼は見つかったか？」

店主はクロスに向かい聞くが、

「……ない」

クロスは表情を変える事なく答え、

「まあ、こんな片田舎じゃ、お前の力量に合う依頼はねえな」

店主は苦笑いを浮かべていると、

「カラン」

店のドアが開き1組のパーティーが入って来る。

「お、クロスじゃないか。久しぶりだな。親父、酒と食いもんは…
…クロスと一緒にのくれ」

入ってきたパーティーのリーダーらしき男がクロスを見つけると自分のパーティーメンバーに断りをいれクロスの隣に座る。

「……久しぶりだな。ホック」

クロスは久しぶりの再会だと言うのに笑顔を見せるわけでもなく面倒そうに挨拶をすると、ホックと呼ばれた男は相変わらずのクロスの様子に店主と顔を見合わせて苦笑いを浮かべた後、

「帰って来た事を……」

クロスにこの町に帰ってきた事を知らせないといけない相手に会いに行ったかと聞こうとするが、

「言って無い」

クロスはホックの言葉を遮り答え、

「挨拶に……」

「考えておく」

ホックが続けて話をしようとする言葉にはクロスは触れて欲しくないのか話を切る。

「……ガキ」

クロスの様子にホックは呆れたようなため息を吐くと、

「悪かったな」

クロスは機嫌が悪そうに答え、

「まあ、それがお前らしいがな」

そんなクロスの反応を見てホックはクロスの頭を撫でながら豪快に笑う。

「頭撫でるんじゃないねえ」

クロスはホックの手を払おうとするが、

「嫌だね」

ホックはクロスの言葉を聞き入れる事なく続ける。

「おい。そろそろ止めてやれ」

親父は2人の様子に呆れたようにため息を吐いた後、仲裁するとホックに飯を渡し、ホックは飯を食い始める。

「そういえば、次の仕事って決まったのか？」

ホックはクロスに仕事を取ったかと聞くと、

「良い仕事もないし、しばらくゆっくりしたら、他の町で探す」

クロスはこの町では仕事を受ける必要はないと答えるが、

「それなら、護衛の仕事を受けるんだけど一緒にやらないか？」

ホックは何かを思いついたようで、クロスを自分達と一緒に依頼を受けないかと誘う。

「……断る。今、言っただろ？ この町で俺が受ける仕事はない」

クロスはホックの誘いを断るが、

「そういうな。今のメンバーは駆け出しが多くてな。一緒に間に鍛えて欲しいんだ」

ホックは後輩の冒険者の育成を手伝って欲しいと言う。

「……お守りはゴメンだ」

クロスは使えないヤツらの相手はしたくないと言うが、

「そういうな。昔馴染みからの頼みだろ？」

ホックは諦める事なく、もう1度クロスを誘うと、

「……考えておく」

クロスは受ける気はなさそうだが、話を切るために当たり障りのない答えを出す。

「良い答えを待ってるぞ」

ホツクはクロスの考えがわかっているようで苦笑いを浮かべて言った後、最近の状況を話しながら飯を食べる。

story・3

「何でこんな所にお子様がいるんだ？ ミルクなんて飲んでるなら、家に帰ってママにでも甘えてるよ」

クロスとホックが話を続けているとクロスが飲んでいるミルクを見て、バカにした様子で男が絡んでくる。

「すみません」

男がクロスとホックに絡んでいるのを見て、男と同じパーティーらしき少女が2人に謝り、仲間らしき男2人が男を連れて行こうとすると、

「……気にするな。酔っ払いが人に絡むのは常識だ」

クロスは男の事など齒牙にもかけていないのかどうでも良さそうに答えると、

「誰が酔っ払いだ。お子様が俺に喧嘩売ってんのか!!」

クロスの答えが男には気に触ったらしく仲間の男2人を払いのけ、クロスの胸倉を掴もうとするが、

「……」

クロスはうつうつしそうに軽く払う。

「ガキが調子にのるんじゃないねえ!!」

しかし、男はクロスの行動がよほど頭にきたようで大声をあげると、その様子に周りが一気に騒ぎ出し賭が始まり出す。

「坊主、外でやれよ」

その様子に店主は苦笑いを浮かべると店の中で騒ぎは止めて欲しいらしくクロスに向かい言うつと、

「……………わかってる。親父、これ」

クロスは面倒くさそうに立ち上がると親父に金を渡す。

「これだといぞ」

店主はクロスから受け取った金を見て、料理の代金以上だと言うつと、

「……………俺の勝ちに」

「そう言う事な」

クロスは自分の勝利に賭けると店主は納得したようで頷き、

「まあ、頑張れ」

クロスの勝ちを確信しているようで苦笑いを浮かべて、クロスの背中を見送る。

（……………暇なヤツらだ）

クロスが店の外に出るとすでに他の冒険者達は盛り上がっているように周りでヤジを飛ばしている。

（……やれやれ）

クロスは面倒くさそうに男を見ると、男は準備が出来ているようにで、剣を抜き構えている。

「クロス、剣は？」

ホックが男の様子を見て、酒を片手にクロスをからかうように言う
と、

「これ相手に必要ないだろ」

クロスは男をバカにするようにため息を吐き、

「確かに」

クロスの言葉にホックはおかしな事を言ったと豪快に笑う。

「ふざけるな！！」

クロスとホックの様子に男はよほど頭にきたようで男は開始の合図を待たずにクロスの肩先に切りかかってくるが、

（……遅いな）

クロスはため息を吐きながら、剣を交わすと、

「おわっ!？」

男は酔っ払っているせいもあるのか自分の勢いに倒れ込みそうになり、

クロスはバランスを崩しかけている男の足を軽く蹴り飛ばすと、男は手から剣を放り投げて、前のめりに倒れる。

「続けるか？」

クロスは男が放り投げ宙を舞っている剣をつかむと男の首筋にあてる。

「ぐっ」

男は悔しそうな表情をするが、クロスが気に入らないようでクロスを睨みつけている。

「……答える」

クロスがもう1度、男に向かい聞くと、

「……降参だ」

男は『こんなガキに自分が負けたのは酒が入っているからだ。実力ではない』と思っているようでクロスを軽く見下したように言う。

「……ずいぶんと偉そうだな？」

男の態度にクロスは自分の相手の実力を計る事もできなくせに偉そうにしている男にいらだっているようで、そう言つと剣で男の首筋に軽く傷をつける。

story・4

「何をするんですか！？ 降参したはずです」

クロスの行動に先ほど、男の非礼を詫びにきた少女がクロスを怒鳴りつけるが、

「……黙れ」

クロスはその少女に部外者は出てくるなと言った意味を込めて冷たく言つと、

「……いいか。教えておいてやる」

男の剣を男が倒れているすぐ隣にさし、

「冒険者で食つていこうと思うなら覚えておけ……敗北は死だ。自分だけならそれで良いが、仲間や依頼人の命にも関わる。自分と相手の力量の差すらわからないなら冒険者など辞めろ」

男に向かい先ほどまでは出す事のなかった殺気を言葉に込めて言う
と、そこで男は自分とクロスとの実力差を理解したようで恐怖に顔をひきつらせながら頷き、

周りでヤジを飛ばしていた人間達は少年のはずのクロスが出す殺気に気圧されているようで、クロスの言葉に言葉を失い呆然としている。

クロスはその様子をつまらなそうな顔で見た後、店の中に戻り、

「……親父、勝ち分は迷惑料だ」

今の賭けの勝ち金を店主に譲ると、

「おうよ」

店主はクロスの心使いをありがたく受け取る。

「フィル、行くぞ」

クロスは店主の返事を最後まで聞かずに、クロスとともに店に入ってきた小さなドラゴンの名を呼ぶと、フィルと呼ばれたドラゴンは荷物をくわえクロスの元に寄り、

「クー」

クロスに荷物を渡し、クロスはフィルから荷物を受け取るとまだ店の前で茫然としている人間達に目もくれずに夜の暗闇を歩いて行く。

「何なんだ？ アイツは」

クロスの背中が見えなくなったあたりで野次馬の1人が声をあげると、

「あの男だつてそこそこ強い筈だろ？ 酔っていたとはいえあんな簡単に」

クロスが相手をした男もこの町ではなかなかの実力者だったようで野次馬達は男を簡単に倒したクロスの事を話し出し、騒ぎ立てる。

「相手が悪すぎだ……アイツ、クロス＝ブラッドだ」

その中の1人がクロスの事を思い出したようでクロスの名を呼ぶと、
「どうしてわかる？」

他の男達もクロスの名を聞いた事はあるようで、クロスの名を出した男につかみかかるように聞く。

「……さつき、竜精が一緒だった」

男はクロスが連れていた小さなドラゴンとクロスにまつわる噂を思い出しているように言つと、

「クロスってハンターの？」

クロスの話あまり深く知らない男が思い出したように質問をする。

「ハンター？」

その声にクロスを怒鳴りつけた少女はクロス話を全く知らなかったようで首を傾げながら聞くと、

「嬢ちゃん、知らないのか!？」

周りの男達は驚きの声をあげ、

「ハンターってのは賞金首を捕まえるのを得意とする冒険者だ」

「その中でも……クロスは若手のなかでは最強って噂である」

「こんな片田舎でかなう奴なんかいねえよ」

少女へ向かいクロスの話をする、

「何でこんなところに居るんですか？」

少女は誰もが思っていた言葉を口にするが、

「さあな」

その答えを知ってるであろうホックと店主は噂話に入るわけもないため、憶測でするクロスの話題で店の中は騒がしくなっている。

（あの人は間違ってます。降参した相手に剣を向けるなんて……絶対に許せん）

そんな中、クロスの噂を聞くわけでもなく、1人の少女はクロスの行いに怒りを覚えていたようで、クロスが歩いて行った方向に1人で駆け出す。

story・5

店を出たクロスは町を出て森の中にある自分の家へ続く獣道を歩く。

家と言っても住める状態では無い。

昔、たった1人の家族を失った場所。

クロスが今まで生きていて……

幸せだった記憶が眠る場所。

「……ただいま。とうさん」

クロスはそう言うのと朽ち果てた家に手をあわし、目をつぶる。

クロスの父親はダークエルフだった。

父親と言っても血のつながりは無く、森に捨てられていたクロスを

拾い育ててくれた義理の父親。

一般にダークエルフと言うと邪神を信仰し、人間に危害を加える者であったがクロスの父親である『クオ』はそんな事は無く、クロスに対して愛情を持って育ててくれた。

彼も邪神と言われる神を信仰してはいたが、現教会が一方的に邪神としている神だった。

一般的に邪神を信仰している者達は生贄や暴力と言った血を好むものであったが、クロスの父親が信仰していた神は『やりたい事をやり、知りたい事を知る』無邪気な子供の幼神であり、『知識と好奇心の神』として信仰されていたが、昔の信者が差別され、貧困に苦しみ、暴力や略奪といったものに走ってしまい。教えを歪ませ、邪神と扱われるようになった……

悲しい神である。

(……カッコつけて出てきちまったし)

クロスは父親への挨拶を済ませると朽ち果てた家を見てため息を吐き、

(今日は野宿だな)

今日の宿泊方法を決めると、クロスは荷物を下ろし、野宿の準備を始める。

(……たまに、戻ってくるんだから、家を直すか?)

クロスは集めた薪に火を着け、座り込むと朽ち果てた家をもう1度見ると、

(……このまま、残しておきたい気もするし、簡単な小屋ぐらい建てるか？ 金は……足りないよな。あいつには借りたく無いし、依頼が1日で変わっているとは思えないけど、明日、もう1度、仕事見てから考えるか？)

クロスは町に帰ってきた時は必ず、ここに戻ってきているようで、自分とフィルが眠るための小屋を建てるか考えている。

「ガサッ」

その時、クロスから少し離れた場所の茂みから何かが動いた音がする。

(……ん!?)

クロスはその音に気づいたようなそぶりは見せずに、

(……こっちを見てる奴が居るな)

茂みの中の様子をつかがう。

story・6

（1人か？ 気配を隠す事もしないなんて大物か？ バカか？
…まあ、関係ないか）

クロスは茂みの中からこちらの様子をつかがっている人間を見極めると、焚き火の中から火のついた薪を取り、茂みに投げつけると、

「キャッ」

クロスが気づいているとは思っていなかったようで茂みの中の人間は驚き声をあげる。

（……女か？）

クロスはその声にこちらの様子をつかがっている人間に、

「……何のようだ？」

声をかけると、

「何をするんですか！？ いきなり薪を投げつけるなんて」

クロスからの攻撃にほぼ驚いたのか少女が茂みから飛び出し、クロスに文句を言う。

（こいつ……さっきのバカと一緒にいた女？）

少女の剣幕を気にする事なく、クロスは少女を眺めた後、クロスは

少女に見覚えがあったようで、

「こっちのセリフだ。人の事を観察するなんて……ずいぶんと良い趣味してるよな？」

クロスはこちらには非はないと言い切ると、

「それは謝ります……だからといって物を投げつけなくても」

少女も自分が悪い事をしていたと自覚していたのか、声を小さくしてクロスに謝る。

「……それで、さっきのバカ男の仇でも取りにきたのか？」

謝る少女の姿を気にするわけでもなくクロスが少女にこの場所にきた理由を聞くと、

「私はセフィリア ユノスって言います。セフィって呼んで下さい」
少女は自分の事をセフィと名乗り頭を下げる。

「……クロス ヌブラッドだ。それで女、何のようだ？」

クロスはセフィの挨拶に興味を示すわけでもなく、鬱陶しそうに再度、ここにきた理由を聞くと、

「あのですね……」

セフィと名乗る少女は言葉を止め何かを考えている様子を見せる。

「考えてなかったのか？」

その姿を見たクロスは、何しにここに現れたかわからないセフィを見てため息を吐くと、

「い、いえ、そういう訳ではないです」

セフィは1度、大きく深呼吸をして、

「良いですか。あなたの行動は間違っています!!」

クロスに向かい言うが、

「はあ？」

そう言われたクロスはセフィが何を言いたいかわかるわけもなく首を傾げると、

「降参した相手に剣を向けるなんて教会の教えに反しています!!」

セフィは自分が信仰している教えにクロスの行動は反しており、クロスへ説教をしにきたようだが、

「……教会の教えだ？」

教会と言う言葉を聞きクロスから静かに殺気が放たれるが、

「そうです。教会の教えは絶対です。良いですか。なぜならそこに愛があるからです」

セフィは気づく事なくクロスに向かい説教を続ける。

(……この女。間違いなくバカだ)

クロスは相手をするのも面倒になったようで、セフィの言葉を見捨てるが、

「って聞いていますか？」

クロスの態度にセフィはクロスに確認をする。

「……聞く必要は無いな。俺は教会も神様って奴も信じ無い」

クロスはセフィの言葉を鼻で笑うと、

「どうしてですか？ 神様はいつも私達を見守ってくれているのですよ」

セフィはクロスに自分の意見を押し付けようとするが、

「見守るだけなら、そこら辺の奴でも出来る。信じて裏切られるなら信じるだけ無駄だ」

クロスはセフィの言葉を聞き入れるわけではない。

「そんな事ありません！！ 良いですか？」

しかし、セフィはクロスの態度を改めようとしているようで、クロスに向かい長々と神と教会についての話しを続ける。

story・7

(……いい加減にしてくれないかな)

クロスはセフィの一方的な話を聞き流しながら焚き火に薪をくべていると、

(……今日はずいぶん来客が多い日だな)

こちらの様子をつかっている気配を感じる。

(気配は4人……1人氣配を消したな。多少は出来る奴が居るようだな)

クロスは気配の確認を終えると、

「おい。バカ女」

セフィを呼ぶ。

「バカ女って何ですか？ 私には……」

セフィはクロスの言葉使いにクロスに文句を言おうとするが、

「お前も冒険者なら、自分の命くらい自分で守れよ」

クロスはセフィの言葉を遮るように言う。

「ふえっ？」

セフィはクロスの言葉の意味がわからずに首を傾げるが、来訪者達はその言葉で自分達の存在を気づかれたと理解したようで、3人が一斉にクロスに襲いかかるが、

(……遅いな)

クロスは流れるように攻撃を交わしていく。

(……もう1人は様子見のようだな)

襲撃者達の攻撃を避けながら、クロスは気配を消した人間の様子をつかがうが、もう1人は日和見を決め込んでいるのか、動く気配はない。

「なんだ！？ こいつは、あたらねえ！！」

襲撃者達はクロスに剣が当たらないせいか頭に血がのぼってきたように攻撃は単調になり始める。

(……そろそろだな)

クロスはそう思うと自分のスピードを少し抑えると、

「これでも喰らえ！！」

チャンスと思ったのか襲撃者の1人から大振りの攻撃が放たれ、クロスを引き裂いたが……

それはクロスが残した残像でしか無く、

虚しく剣は地面に刺さる。

「!？」

何があったかわからないといった表情をする襲撃者のうちの1人の背後にクロスは現れ、

「トン」と襲撃者の首の後ろを叩くと叩かれた1人は崩れ落ちる。

(……早いとこ片付けるか。ここを荒らされたく無いしな)

クロスは徐々に殺気を放ち始めると、

「ああああ!？」

その殺気にあてられたのか襲撃者は動く事が出来なくなり、襲撃者は自分達が襲った相手との差を理解し、後悔をはじめたその時、

「あなた方は何をしていますのですか!! 3対1なんて卑怯です。教会の教えに反しています!!」

鈍いのか、大物なのかセフィにはクロスの殺気が効いてなくセフィは襲撃者を怒鳴りつける。

story・8

(……こいつ、まだいたのか)

セフィを無視してクロスは殺気を受け動けない襲撃者に問いかける。

「一応、聞いておく。何のようだ？」

「こ、答える義理は無い」

襲撃者は声を震わせながらもクロスの質問をはねのける。

「……そうか」

襲撃者の言葉にクロスは頷くと、

「……よくその程度で俺に向かってきたな」

先程の比ではない殺気を放ち襲撃者との距離を縮めて行く。

その空気は重々しく、

殺気を受ける側は首もとにナイフを突き立てられるように

徐々に心臓が握りつぶされていくように

自分の命が他者に完全に握られているような感覚。

……精神が弱い者では直ぐに発狂するくらいの殺気。

「……雑魚だと話にならないな」

襲撃者はクロスの殺気に当てられ話す事すらできなくなっているように、クロスはそう言うので、

「そこで隠れてる奴、出てこいよ。こっちの質問に素直に答えるなら、命くらいは助けてやるよ」

気配を消していたもう1人に向かい言う。

「クロスさん、流石ですね」

クロスの殺気など関係ないといった感じで、1人の男が近づいてく

る。

「……………何のようだ？」

クロスはその男を睨みつけて、ここにきた理由を聞くと、

「降参ですから、その殺気をしまって貰えますか？」

男は笑いながらそう答え、

「それに早くしないと貴方のつれが壊れてしまいますよ」

セフィをクロスの仲間だと思っているのか、クロスに向かい言う。

「……………」

その言葉にクロスは男への警戒を解くことなく、セフィの顔を見ると彼女の顔色は青白く恐怖に歪んでいる。

「……………別に、つれでも無いがな」

クロスは殺気をしまうと、セフィは殺気から解放された安堵感からか地面に座り込み、

「それで、人の実力を試してどうするつもりだ？」

クロスはセフィの様子など気にするようすも見せずに男に聞く。

story・9

「剣の腕だけではなく洞察力もある。噂以上ですね」

男が笑いながらクロスを誉めると、

「……人の能力を試そうとした割にはずいぶんとお粗末な奴らを連れてきたみたいだな」

クロスは男の思惑を探ろうとしているようで男を睨みつけたまま答える。

「なかなか評判と威勢は良かったんですけど、口先だけでしたね。アナタの能力を測るには役不足でした」

クロスの様子に男は苦笑いを浮かべながら言っと、

「何？ てめえは隠れてたくせに言っじゃねえか」

襲撃の実行犯達は面白いわけがなく、襲撃を依頼した者と受けた者の間に緊張感が走るが、

「仲間割れなら余所でやってくれ」

その様子にクロスは付き合っていたくないようであめ息を吐くが、不意に真剣な表情になり、

「……それとお前らが束になったところでかなうとは思わないがな」

男と襲撃者達の実力差を感じているようでそう言つと、

「……ちっ」

その言葉を聞き、襲撃者達は捨て台詞を吐きながら帰って行く。

「ずいぶんとお優しいですね」

男はクロスが襲撃者達をかばった事に驚いたような表情をすると、

「それでもこの場所は親父の墓だからな。バカな奴らの血で汚したくない。それで、何のようだ？」

クロスは父親との思い出の場所をこれ以上汚したくないと言った後、男に向かい聞き返すが、

「少々頼みたい事が有ったのですが、そんな気分では無くなってしまいましたので、今日は失礼します」

クロスの言葉が期待外れだったようで、男はため息を吐くと男は姿を消した。

（……あいつは何者だ？ あの動きはアサシンの類か？ ……底も見えなかったし、あいつが本気できたらまずかったか？）

クロスは男の実力をはかり損ねたようで首を傾げていると、

「消えましたよ！？ どういう事ですか？ クロスさん」

セフィが驚きの声をあげる。

（……まだ居たのかよ）

クロスはため息を吐き、

「どうでも良いだろ。それよりいつまで居るつもりだ？ さっさと帰れよ」

セフィが邪魔なように帰ると言うと、

「どうしてそんな事を言うんですか？」

セフィはクロスの言葉に不満げな声をあげるが、

「邪魔だからだ」

クロスはきっぱりとセフィを拒絶する。

「わかりました。これで失礼します！！」

セフィは立ち上がり町へ帰ろうとするが薄暗い森を目にして、立ち止まる。

（まさか、そんなわけないよな？）

クロスの頭はそんなセフィの様子にある答えを導き出したようで、

「……まさか、帰れないなんて言わないよな？」

帰り道がわかるか確認をすると、

「……はい。帰れないです」

セフィは小さな声で、返事をする。

(……こいつ、やっぱりバカだ)

クロスはセフィを見て呆れたように深いため息を吐くと、

「仕方ないじゃないですか。来る時はこんなに暗くなかったですし、道もわかりましたけど」

セフィは反論を始める。

「……バカ女」

「だから、私にはセ……ふえっ!？」

反論するセフィをクロスが呼ぶとセフィはクロスに文句を言おうとするが、クロスはセフィに予備の毛布を投げつける。

「クロスさん、これ？」

セフィは驚いた様子でクロスの顔を見るが、

「……朝になったら消える」

クロスはそう言うのと、もう関わり合いたくないと思っているようで、自分の毛布を被る。

「……ありがとうございます」

セフィはクロスに向かいお礼を言うが、

「……」

クロスからの返事はない。

story・10

朝になり町まで行く途中で、

(……あれは?)

先に出たはずのセフィが道から外れた所で見つける。

(……まさか迷って無いかな?)

クロスはセフィに見つかりと面倒なので先を急ごうとするがフィルがセフィに飛びつくと、

「あっ!? フィルちゃんにクロスさん」

セフィはフィルを抱き締め、嬉しそうな表情をする。

「……お前はこんなところで何をしてる?」

クロスはフィルの行動にため息を吐きながら、セフィに聞くと、

「いや、ちょっと寄り道を……」

完全に迷っているようでセフィが気まずそうに視線を逸らす。

「……そうか。フィル、行くぞ」

「クー」

クロスは名残惜しそうなファイルをセフィから引き離し町に向かおうとすると、

「ま、待って下さい。わたしも行きます」

セフィは慌てたようにクロスについて行くと言う。

「用があるんだろ？」

クロスはセフィの様子に冷たく言うと、

「……………迷ってました」

セフィは恥ずかしそうに答える。

「……………はあ、こんなところで迷うのにどうやって俺のここまできたんだよ」

クロスはセフィの答えを予想はしていたが、考えられないセフィの間抜けさに疲れたようなため息を吐くと、

「……………わからないです」

セフィが泣きそうな表情で答えるとファイルがクロスを非難するような目をする。

「……………泣きそうな顔するなよ。俺が虐めてるみたいじゃないか」

「……………すみません」

小さくなり謝るセフィを見て、クロスはもう1度ため息を付き、

「はぁ、キリがないな。ほら、昨日の店までなら一緒に行つてやるから行くぞ」

「ありがとうございます」

クロスが案内すると言うとセフィは余程嬉しかったのか。クロスに抱きつくとするが、クロスはセフィを交わす。

「どうして避けるんですか!？」

「何となくだ。それより行くぞ」

セフィを連れて町まで歩く中、セフィはクロスの事を聞いてくるがクロスは一切答えず重い空気のまま店に向かう。

冒険者の店

「カラーン」

店は昼も近いせいか混み始めている。

「親父、日替わりと」

クロスは店に入るなり、カウンターに座り言うと、

「クー」

「フィルにはいつものだな」

店主は苦笑いを浮かべながらフィルのメニューを決める。

「ああ」

クロスは頷くと、

「そっちの嬢ちゃんは？」

店主はセフィに向かい聞く。

「同じものを」

セフィは店主の言葉に慌てながら答えると、店主は頷き、飯を作り始め、

「で、坊主。どうやって嬢ちゃんをたらし込んだ？」

店主はクロスとセフィを見てニヤニヤと笑いながら言うと、セフィは顔を赤くして慌てているが、

「たらし込んでない。この女、昨日の事が気に入らなくて、わざわざ文句を良いにきた上にご丁寧に道にまで迷いやがったんだ」

クロスはため息を吐きながら答える。

「それで泊める代わりに、無理矢理か？……鬼畜だな」

店主はクロスをからかうように言うと、

「そんな事無いです！！ クロスさんは優しかったです」

セフィはクロスをかばうように言うが、

(……こいつ、やっぱりバカだ)

セフィのズレた発言により店の中に歓声があがる。

「……おい。お前は少し考えてものを言え」

その歓声にクロスはため息を吐きながらセフィに言うと、

「何がですか？」

セフィはクロスの言葉に何かを考えついたようで、

「……あっ！？ すいません。変な意味じゃないです」

真っ赤になりうつむいてしまう。

story・11

「……たく、親父も何が楽しいんだよ」

クロスはセフィの様子を見て、ため息を吐きながら店主に聞くと、

「坊主が同年代といるのが珍しいからな。少しからかいたくなつた」

店主はクロスが同年代と一緒にいる姿が珍しいのでからかったと言う。

「……くだらねえ事をするなよ」

店主の言葉にクロスはもう1度、ため息を吐くと、

「それでどうしたんだ？ 坊主が請け負うような依頼はこの町にはねえ」

店主はクロスが請けるような依頼はないと言うが、何かを考え、

「……事も無いな」

クロスの力量に合う仕事に心当たりがあったようでそう言う。

「どついう依頼だ？」

クロスは依頼があることに驚いたように聞き返すと、

「請けるのか？」

店主はクロスに確認するように聞き返すが、

「内容次第だな」

クロスは依頼にすぐに飛びつく事はせず、内容の確認を行う。

「まあ、そうだな……やっぱり止めだ」

店主はクロスに依頼内容を話そうとし、依頼のメモに目を通すがクロスには任せられないと判断したのか話を止める。

「どうしてだ？」

店主の態度にクロスが聞き返すと、

「坊主、今は1人で動いてるだろ？」

店主はクロスのパーティーを組もうとしない事を確認し、

「……足手まといはいらないからな」

クロスはパーティーを組む利点はないと言い切る。

「俺が言う事でも無いが……少しは人を信じたらどうだ？ あいつらが冒険者を辞めてからお前はここじゃホックくらいとしか仕事をしないだろ」

店主はため息を吐きながら、クロスをいさめるように言うが、

「俺の近くにいたって良い事なんてないだろ」

クロスは今の状況を改める気はないようで関係なさそうに言う。

「……お前はうちにくる奴らじゃトップクラスなんだから後輩の指導もして欲しいんだよ」

クロスの様子に店主は店の事を考え、後輩の指導をして欲しいと言うが、

「それはホックに当たれ……俺は人にものを教えるように出来てない」

クロスは自分には向かないと答える。

「そんな事はないだろ。それならあいつが昨日の仕事に誘う訳がねえ」

店主はクロスの答えに引き下がらずに言うが、

「……あいつは物好きなだけだ。それで、内容は？」

クロスは話を戻そうと依頼内容を聞く。

「1人じゃさせられねえよ」

しかし、店主はクロスにはこの依頼は任せられないと言うが、

「なら聞くが、俺以外でその依頼を任せれる奴がここにいるのか？」

クロスは納得がいかないのか店主に聞き返すと、

「……………」

店主はクロスの言葉に何も答える事が出来ず、その沈黙はクロスの言葉を肯定している事がわかる。

story・12

「フィルもいるし、どうにかなるだろ」

黙り込んでいる店主にクロスが言うと、

「……」

店主は少し考えるような素振りをするが、

「……ダメだ」

考えは変わらないようである。

「……俺程度では請け負えない仕事なのか？」

クロスは長年、冒険者に仕事を斡旋している店主がクロスには任せられないと言うので、自分の力量が不足しているのかと訪ねると、

「そう言う訳じゃねえ……」

店主はクロスの力量を認めているようで齒切れが悪い返事を返す。

「長年、この仕事をしてきたあんたが『俺には任せられない』と言うなら諦めるが……」

店主の態度にクロスは訳を聞かせると言うと、

「……仕方ない」

店主は諦めたようなため息を吐き、

「一応は、依頼者の希望でな。『口の堅い冒険者で腕の立つ奴を2人以上』って条件があつてな」

1人で仕事をするクロスに任せられない条件があると答える。

「……どんな条件だよ」

その条件を聞き、疑問の声をあげるクロスを見て店主は苦笑いを浮かべ、

「それだけ、重要な仕事なんだろ。うちに来るヤツらで考えるとお前とホックに任せたいが、ホックは後輩の指導に忙しいし、お前は他の人間とは組めないと言うしな」

自分なりの意見をクロスに伝える。

「……フィルが相棒ではダメと言う事か？」

クロスは自分の相棒のフィルの名を出すか、

「ああ、フィルを連れて行って依頼人の機嫌を損ねるよりは、うちの店にはそんな仕事を請け負える人間はいねえの方がうちの看板には傷がつかねえ」

店主はフィルではダメだと言い切ると、

「……その答えもどうなんだよ？」

クロスは疲れたようなため息を吐き、呆れたように言う。

「仕方ねえだろ。ここら辺は割と安全な地域何だから、お前やホツクがいる事が異常なんだよ」

店主はクロスの機嫌をとろうとしてるのか笑いながら言うのを見て、

「……仕方ない」

クロスは店主と話をしながら、依頼に対して納得できない部分もあるようだが、店と依頼者の条件を考え納得したように頷いた時、

「あのー、それ、私じゃダメですか？」

クロスの隣で食事をしていたセフィが不意に声をあげる。

story・13

「嬢ちゃんがか？」

店主はセフィの言葉に少し考えると、

「……坊主と組むなら、請けても良いぜ」

苦笑いを浮かべながら、クロスと一緒になら、セフィに任せても良い
と言うと、セフィは間髪も入れずに、

「クロスさん、請けましょう!!」

セフィは何故かクロスとともに依頼を請ける気で、クロスに向かい
言うが、

「……何で、お前と組まないといけない？」

クロスは当然、呆れたような表情でため息を吐く。

「クロスさんは人として、色々気づかないといけない事が多すぎ
ます。それを教えるのが、私の役目です。そもそも……」

セフィは熱く拳を握りしめ、クロスに向かい説法を始めるが、

「……おい。昨日のザコ」

クロスはセフィの説法を聞く気はなく、頭を押さえながら、昨日、
クロスに向かってきた男を呼びつけるとセフィを指差し、

「これ、持ってけ。話の邪魔だから」

男にセフィを連れていけと言うと男はクロスに逆らえるわけもなく、黙って頷きと、セフィを引きずって行く。

「良いのか？」

その姿を見た店主は苦笑しながらそう言うと、

「腕がたつのが条件だろ……あいつを連れてってもダメだろ」

クロスは疲れたようなため息を吐く。

「確かにな」

店主はクロスの言葉に苦笑いを浮かべながら頷くと、

「なら、他に手頃なものはないか？」

クロスは他に依頼がないかを店主に確認するが、

「お前のレベルに出せるのは無いな。護衛と遺跡調査くらいだな」

店主は数枚の依頼書をクロスに渡す。

「……やっぱり、こんなもんだよな」

クロスは依頼書を見て考え始めると、

「別にこんなところで探さなくても良いだろ。お前なら、よそでいくらでも仕事があるだろ」

店主はクロスがこの町で仕事を探しているのを疑問に思い聞く。

「……まあな」

クロスは依頼書に目を通しながら頷くと、

「何か入り用か？」

店主はクロスに何かあったのか気になったようで、聞き返す。

「親父の墓の前に小屋を建てようと思ったただけだ。それで、前に聞いた費用だと手持ちが足りない」

クロスは店主に隠す必要などないと思っているようで素直に話すと、

「あいつに借りれば良いだろ？」

店主はクロスの知り合いに心当たりがあるようでクロスに言うが、

「……足を洗った人間に迷惑はかけられない」

クロスははっきりとした口調で言い切る。

「あいつは気にしないだろ」

店主は引かずに返す。

story・14

「……それでもな。色々あるんだよ」

表情を曇らせるクロスに、

「色々ってのはなんだ？」

ホックが頭を押さえながら食堂におりてくるとそう言いクロスの隣に座る。

「親父、水くれ」

ホックは酒が抜けきって無いのか店主に水を頼むと、

「おうよ」

店主は苦笑いを浮かべて、ホックの前に水を置くとホックは一気に水を飲み干すし、

「あいつは気にしないだろ。子のないあいつにとって、お前は息子のようなもんだ」

クロスに言い聞かせるように言うが、

（……だからだろ）

クロスはホックと店主の言う人物に頼る事はしたくないように見える。

「お前を拾い1人前の冒険者にしてくれたヤツだろ。少なくとも……」

ホックはクロスの表情に気づく事なく話を続けていると、

「クー」

クロスの心情を感じ取ったのかフィルがホックの背をつつく。

「……すまないな」

ホックはフィルに止められ、クロスに向かい謝ると、

「……別に」

クロスは何も言いたくないようで不機嫌そうに言う。

「あいつに頼れないなら、俺の仕事を手伝え、隣町までの護衛だけどな。俺はこの町に戻ってくるし、不足分が貯まったら小屋の依頼くらいしてやる」

ホックはクロスに仕事を手伝えと提案すると、

「……仕方ないか」

クロスはため息を吐きながらホックの提案を請ける。

「決まりだな。よろしく頼むぜ。相棒」

ホックはクロスの頭を豪快に撫で回す。

「……………止める」

2人のやりとりを見て、店主は苦笑いを浮かべながら、

「そういえば、小屋はどれくらいの値段って言ってた？」

クロスに小屋の値段を聞く。

「前に聞いた話だと……………」

クロスが以前に聞いた金額を2人に話すと、

「……………それはぼったくりだ」

「だな」

ホックと店主はため息を吐く。

「そうなのか？」

クロスが聞き返すと、

「坊主とフィルが寝に帰るだけだろ？」

店主はクロスに小屋の用途を確認し、

「ああ」

クロスは頷く。

「小屋の手続きは俺が知り合いに頼んでやる。こんなぼったくりほつとくわけにいかねえ」

店主は商売の道から外れた行いに腹を立てているようで、小屋の事を任せると自分の胸を叩くと、

「……そうか。頼む」

クロスが頷くのを見て、

「それなら、手持ちで足りそうなのか？」

ホックがクロスに所持金の確認をすると、クロスは頷き、親父に必要分の金を渡す。

「確かに受け取った。それで、小屋を建てる金があるなら、仕事はどうするんだ？」

店主はクロスが手伝うと言ったホックの仕事について確認をすると、

「やると言っただけからは手伝うさ」

クロスは彼なりの流儀なのか仕事を投げだしはしないと云う。

「そうか。出発は明日の朝だけど大丈夫か？」

ホックはクロスの言葉に安心したように頷くと、クロスに仕事の時間を伝えると、クロスは頷く。

「それなら、よろしく頼むぜ」

ホックは改めてクロスに言うと、

「わかってる。親父、今日はここに泊まるから、部屋空いてるか？」

クロスは野宿では疲れが抜けなかったのか部屋を借りると言うと店主は部屋の鍵を渡し、

「フィル、行くぞ」

「クー」

クロスはフィルを連れて部屋に上がる。

story・15

「おっ、きたな」

クロスとフィルが集合場所に行くとホツクのパーティーはすでに集まっていてホツクはクロスに駆け寄る。

「……遅れたか？」

すでに集まっているメンバーを見て、クロスはホツクにたずねると、

「いや、まだ時間がある」

ホツクは苦笑いを浮かべながら答えると、クロスはその答えに何かあると思ったようで、

「なら、どうして、こんなに早く集まっているんだ？」

ホツクに聞き返すと聞くが、その疑問にホツクは苦笑いを浮かべたまま、

「この町から離れるのが初めてだから、よく眠れなかったらしい」

パーティーが早く集まった理由を言つと、

「……ガキかよ」

ホツクの答えにクロスは呆れたようなため息を吐く。

「そう言っなよ」

そんなクロスを見て、ホックは苦笑いを浮かべたまま言っが、

「それで依頼人は？」

クロスはあまりにくだらない理由だったため、話を仕事の方に変える。

「まだ、集合時間には早いからな。もう少ししたら着くだろ」

ホックは依頼人はまた着いてないと言っと、

「……そうか」

クロスが頷くのを見て、

「今のうちにメンバーを紹介しとくか？」

ホックは自分が所属しているパーティーを紹介しようとするが、

「遠慮する。別になれ合っつもりはにいいしな」

クロスは興味がないようでそう答える。

「まったく」

クロスの反応にホックはため息を吐くと、

「一応はこれからしばらくは寝食を共にするんだ。少しくらいは興

味を持てよ。お前の好みの娘もいるかもしれないぞ」

クロスをからかうように言うが、

「……興味ない」

クロスは表情を変えずに答える。

「何だ？ セフィって娘以外に興味はないって事か？」

そんなクロスを見て、ホックはイタズラな笑みを浮かべると、

「……何で、あのバカが出てくるんだ？」

クロスはため息を吐く。

「親父から、お前に近づいた命知らずの娘がいるって聞いてな」

ホックが笑うのを見て、

「……はあ」

クロスはため息を吐いた後、

「一応、依頼の確認くらいしておくか」

依頼内容をホックに聞く。

story・16

「……………ああ」

その言葉にホックは頷き、

「依頼内容としては武器商人の護衛。隣町までの簡単な仕事だけだな。この辺は割と安全だけど……………」

ホックが言葉を濁すのを見て、

「……………最近は野盗が出るか？」

クロスはホックの言葉の意味を理解したようでそう聞き返す。

「ああ。聞いているのか？」

ホックはクロスの言葉に少し驚いたような表情をすると、

「噂程度にな。飢饉にやられた村の生き残りだとか、他の場所を荒らしまわった野盗が討伐対象になり、この辺に身を隠しているんじゃないかとかな」

クロスは当たり前のように答える。

「流石に情報には敏感だな」

ホックはしばらく、この町にいなかったはずなのに自分と同様の情報を持っているクロスに感心したように言う。

「……俺は1人だからな。きちんとした情報を手に入れなければ死ぬだけだ」

クロスがそう答えるのを見て、

「そう思うなら、周りを頼れよ」

ホックは苦笑いを浮かべるが、

「……俺に深入りすると、そいつに危険が及ぶだろ」

クロスは自分から人との距離をとりたいようですう答える。

「1人でいようとするのは、『父親を殺した奴への復讐のため』か？」

ホックは真剣な表情でそう言つと、

「お前の父親はそれを喜ぶのかな？」

クロスに向かい疑問を投げかける。

「……そんな事はお前に言われるまでもなくわかっている……」

クロスはその言葉に顔を少し歪めるがすぐにいつもの表情に戻るが、

「……それでも俺には復讐^{それ}しかないから」

クロスはホックに聞こえないように呟く。

「ホックさん、そろそろ行きましょう」

クロス的心情など知るよしもなく、ホックのパーティーのメンバーがホックに向かい声をかけると、

「依頼者もきたみたいだし、行くか？」

ホックはクロスに出発しても良いか聞き、

「依頼者と顔合わせは良いのか？」

クロスはパーティーのリーダーであるホックが依頼主に挨拶をしないのを疑問に思い聞き返すが、

「俺はそっちは不得意だしな。出来る奴に任せるさ」

ホックは苦笑いを浮かべて答えると、

「……まあ、そうだな」

クロスはホックとは付き合いが長いせいか納得がいく事があるよう
で頷き、

「フィル」

フィルの名を呼び、仕事につく。

story・17

クロスとホックのパーティーが依頼につき、2日ほど過ぎた時、

(……囲まれてるな)

クロスは自分を囲むように一定の距離を保っている気配を感じ、

(……10人か？……血の臭いもするし、簡単には通してくれなさそうだな)

囲んでいる人数の気配を探り終えると、

「……ホック」

ホックの名を呼ぶ。

「流石はクロスだな」

ホックはクロスの言いたい事がわかったようで苦笑いを浮かべながら、クロスを誉めると、

「……他の奴らは気づいてないようだな」

クロスは他の人間が気づいてないと判断したのかホックに聞き返す。

「襲撃されるような依頼につくのは初めてだしな」

ホックは苦笑いを浮かべたまま言うと、

「大丈夫なのか？」

クロスはため息を吐いた時、ホックは真面目な表情をし、

「微かに血の臭いもするし、もしかしたら、先に進んでいた旅人が襲われている可能性もあるな」

「……ああ。相手は10人。こちらはけつの青い新人ばかり、戦力的には分が悪そうだな。あいつらがどれだけ役に立つかもわからないし、正面からの総力戦は止めた方が良いな」

クロスは冷静に戦力を分析したのか足手まといが多すぎると言い切ると、

「そう言うな」

ホックはため息を吐いているが、

「一先ずは先手必勝か？」

クロスはホックの様子など関係なさそうに話を進めようとする。

「麻痺とか催眠系の魔法はかかると辛いからな」

ホックはクロスの言葉に苦笑いを浮かべながら同意すると、

「それじゃあ、どうする？」

クロスはホックに戦術を確認する。

「一先ずは1番固そうなところにお前が突っ込む」

ホックは笑顔でクロス無茶な事を言い、

「無難な策だな」

クロスは表情を変える事なく頷くと、

「1番固そうなところは魔法使い系とその壁役がいるはずだから、お前が行くのが妥当だろ？」

ホックはクロスに危険なところに突っ込めと言い、

「まあな」

クロスはホックと同意見のようで頷く。

「一先ずは囲んでる奴らにバレないように……」

クロスとホックが打ち合わせを始めていると、

「ホックさん、依頼者が馬車に酔ったって」

パーティーの1人がクロスとホックの心配を余所に依頼主が馬車に酔ったと伝える。

story・18

「一先ず、休憩のふり？」

ホックは苦笑いを浮かべてクロスに向かい言っと、

「それで、行くのか？」

クロスは反対する気はなさそうな様子で、作戦を煮詰めていこうとする。

「この状態じゃ、馬車を急がせられないだろ？」

ホックはクロスが反対意見をださないせいか、苦笑いを浮かべたまま、作戦を決定し、

「それじゃあ、一先ず休憩だ」

困んでいる襲撃者にも聞こえるように言った後、馬車を止めて休憩の準備を始める。

「……行くぞ。フィル」

「クー」

ホック達が休憩の準備を始めている中、クロスは囲みの隙を突き、馬車から離れると、

（……精霊使いはあそこか？）

クロスは囲んでいる襲撃者を確認し、相手の動きを封じる魔法を使う精霊使いを探して行く。

（あそこだな）

クロスは魔法の詠唱を始めている男を見つけると、

（……依頼者はホックが守るだろうから大丈夫だろ。後は……）

2日間、一緒にいたメンバーの顔を思い浮かべながら、

（あいつらが死なないためにはタイミングは大事だな）

不意打ちを行うタイミングを計っていき、

（……あっちの指示はホックに任せれば問題ないからな）

クロスはニヤリと笑うと、

「フィル、頼むぞ」

「クー」

フィルの名を呼ぶ。

フィルはクロスの考えが理解出来ているのか返事をする、囲みの一番薄いところの後ろに回り込み。

「クー」

炎を吐く。

それが開戦の合図となる。

「うわああ!？」

フィルに炎を吐かれた相手は突如起こった事にわけがわからないように、自分に燃え移っている炎を消そうと悲鳴をあげ、地面に転がっている。

その状況に驚いたのは襲撃者の方である。

こんな人気のないところで休憩を取ろうとするバカな旅人と警戒もしない護衛らしき人間達。

囲みは完璧に思えた。

そのはずなのに、仲間が燃えている。

それに驚いている中、

獲物はホックの指示で完璧な防御に徹し始めている。

その上を更なる恐怖が襲う。

「……」

クロスは音もなく、襲撃者の背後に回り込むと、

「何!？」

精霊使いらしき男を一振りで斬り捨て、

「……次」

流れるようにそこにいた襲撃者を斬り伏せて行く。

story・19

「こ、こいつ、どこから!?!」

「そんな事は良い。そいつから殺れ!」

クロスの姿を確認して、襲撃者は声を上げ、クロスに斬りかかってはくるが、

「……」

その剣はクロスを捕らえる事は出来ない。

「ちっ」

襲撃者のリーダーらしき男はクロスの動きをとらえきることが出来ずに舌打ちをする。

(……こいつは少しレベルが上みたいだな)

舌打ちをした男の様子を見て、クロスは改めて剣を構え、攻撃に移ると男はクロスの素早い攻撃をなんとか受け止めて行くが、

「チェックメイトかな?」

しばらく、剣の打ち合いの音が響いた後、クロスの剣の切っ先は男の喉元に向けられている。

「……みたいだな」

男は諦めたようにそう言つと、

「……殺せ」

何かを決意したように言うと、クロスは男の喉元に剣を突き刺そうとするが、

「クロス、待て。そいつには聞きたい事がある」

ホックは男に話があるようでクロスを止めると、

「お前達から、血の臭いがした。俺達の前にも人を襲ったのか？」

男に向かい他にも同じように人を襲ったかと聞く。

「……そんな事を答えると思うのか？」

男は答える気は無いようでそう言つが、

「クロス、どうする？」

「……お前がリーダーなんだから。俺はお前の指示に従う」

クロスとホックは男の答えで、少し前に人が襲われている事を確信する。

「……まあ、見捨てるのは寝覚めが悪いよな」

ホックは苦笑いを浮かべ言つと、

「安全だと言って、警戒もしないバカが悪いんだろ」

クロスは冷たく言い放つ。

「まあ、それは納得だけだな」

ホツクは真面目な表情をすると、

「だからと言って、見捨てるわけにもいかないからな」

「……ああ」

ホツクの言葉にクロスは頷き、

「フィル」

「クー」

フィルを呼び寄せる。

story・20

「それじゃあ、俺達は少し人助けをしてくるから、お前らはここで大人しくしてるんだぞ」

ホツクは残りのメンバーに留守番をしろと言うと、

「何を言ってるんですか？ 俺達も一緒に行きます」

メンバーはついてくると言うが、

「……足手まといになる」

クロスはその言葉を冷たく切り捨てる。

「まあ、そう言う事だな」

ホツクは苦笑いを浮かべ、クロスに同意と、

「依頼者の護衛とこいつらの見張りを頼む」

メンバーに指示を出すが、

「お前も足手まといだ」

クロスは冷たくホツクに向かい言う。

「……どう言う意味だ？」

クロスの言葉が癪に障ったようで、ホックは言葉に怒気が含めて言うが、

「そのままだ。ぬるま湯に浸かっている間に、腕が錆びたみたいだからな」

クロスがホックに謝る事はなく、ホックの技量が下がっていると言いつ切り、

「パーティーの軸になり、先頭で戦う事を忘れたお前に背中を預ける気にはならない」

ホックに向かい足手まといだと言う。

「……クロス」

ホックはクロスの言葉に何か他の意味を感じとったようで、クロスの名を呼ぶと、

「お前の仕事は依頼者の護衛だ。これは依頼外だ」

クロスはそう言い、ホック達に背を向け、

「フィル、行くぞ」

「クー」

フィルを連れて歩き出す。

「……あのバカ」

ホックはクロスの背中を見てそう言つと、

「……先に行く。この仕事が終わるまで、お前は俺のパーティーだ。必ず、追いついてこい」

背を向けるクロスに向かいそう言い、

「休憩は終わりだ。まだ、野盗が隠れている可能性も充分に考えられる。警戒を怠るな」

パーティーに指示を出し先に進む。

story・21

クロスとフィルはホックと別れ、襲撃者達の本拠地を探していると
(……しかし、何も考えない奴らのようだな)

街道沿いの茂みの中に先に襲ったであろう壊れた馬車を見つけてた
め息を吐き、

「フィル、俺は何か手がかりがないか、この周辺を探すから、もう
少し奥を見てきてくれ」

フィルに向かい言つと、

「クー」

フィルは返事をして奥に進む。

(さっきの奴らのリーダー格の男はそこその実力だとは思ってたが
……)

クロスは壊れた馬車を調べながら、先ほどの襲撃者達を思い浮かべ
ると、

(……他はカスだった。バランスが悪すぎるな)

襲撃者の状況を分析しはじめる。

(『飢饉にやられた村の生き残り』、『他の場所を荒らしまわった

野盗』か……何かの都合でその2つが手を組んだか？ だとしても野盗だとするとリーダー格の男の実力が浮いている。後はあのレベルの人間がいるなら、本拠地にはあいつと同等、もしくはそれ以上の実力者がいるはずだ）

クロスがそう考えていると、

「クー」

フィルは何かを見つけたようでクロスに報告に現れたように見える。

「見つけたのか？」

クロスの言葉にフィルは大きく頷くと、

「クー」

クロスを道案内するように先に進み出す。

（……なんで、あのバカがいるんだ？）

クロスはフィルの案内で襲撃者達の本拠地らしきところに着くと襲撃者達に捕まっているのか縄で縛られているセフィの姿を見つける。

（他に捕まっている人間は……）

クロスはセフィを見て見ぬ振りをする他に捕まっている人間がいないか探そうとするが、

「クー」

フィルはセフィの事が気に入っているようで、セフィを無視しようとするクロスを非難するような目で見える。

「……あいつは仮にも冒険者だ。自分の身くらい、自分で守らせろ」
クロスはため息を吐き言うつと、一般人が捕まっていないことを確認して行く。

story・22

「こんな事をして、あなた達は何を考えているんですか？」

セフィは自分を縛り付けている男達に向かい言っが、

「お嬢ちゃん、黙ってな。酷い目には合いたく無いだろ？」

男達の1人がセフィの首を持ち上げて何かを考えているようであり、らしい笑みを浮かべて言う。

「こんな事をしてどうするつもりですか？ あなた達が反省するなら、神はあなた達の罪を許してくれるはずです」

セフィはクロスにした時と同様に神の愛について語り始めるが、

「悪いな。お嬢ちゃん、俺達は神様なんて信じてねえんだよ」

男達の多くは信仰心など持ち合わせないようで、セフィをバカにするように笑つと、

「お嬢ちゃんは神様ってヤツを信じているなら、ここで祈ってみたらどうだ？ 神様ってヤツが本当にいるなら、これからお嬢ちゃんが俺達にされる事から、お嬢ちゃんを助けてくれるかも知れないぜ」

男の1人がそう言つとセフィににじりよってくる。

「……祈っても無駄なものに祈るなど、労力の無駄だ」

その様子を見ていた男の1人がセフィの言葉を吐き捨てるように言う、

「そう言う事だ」

セフィににじりよってきた男はセフィを押し倒そうとするが、

「ガハッ!？」

男は血を吐き出し、糸の切れた人形のようにセフィに向かい倒れてくる。

「えっ!？」

セフィは目の前の男に何が起こったかわからずに男を見ると、その男の胸からは鈍く光るものが生えており、胸からは真紅の液体が吹き出し、セフィの顔を真っ赤に染めて行く。

story・23

「その意見には賛成だな」

クロスはそう言うとその場に舞い降り、そこにいる男達を斬り伏せて行く。

「クロスさん!？」

セフィはクロスの登場に驚きの声をあげるが、その声は自分の目の前で失われていく命を見て、怯えているようで声は震えている。

「お前、何者だ!？」

男達の中にはクロスの予想通り、実力者がいたようで、クロスの剣を防ぎクロスに向かい言うが、

「……」

クロスは名乗る必要などないと思っているようで、

「ただの人殺しだ」

表情を変える事なく言い、人を斬る事を何かの作業のように淡々とこなすよう行っていくと、

「……調子にのるなよ」

セフィに向かい『神に祈るのは労力の無駄』だと吐き捨てた男が仲

間がクロスに斬り伏せられているなか、そう呟きクロスに剣を向け素早く斬りかかる。

「……」

しかし、クロスはその剣を自分の剣で軽く弾くと、

「……化け物かよ」

クロスに剣を向けた男は、自分の剣が簡単に弾かれるとは思っていなかったようで、クロスを睨みつけながらも次の一手を探しているように見え、男がクロスを引きつけたのを見て、野盗達は逃げ出し始める。

（……少しはできるみたいだな）

クロスは男の様子に口元を少しゆるませると、剣を持ち直し、

「!？」

男に斬りかかるが、男は何とかクロスの剣を剣で弾き、クロスに蹴りを入れるが、

「……」

クロスは後方に飛び、その蹴りを交わし、距離を取り、

（……さっきの襲撃班を率いていたヤツもそうだが、なぜ、このレベルの男が野盗まがいのことをしている？）

クロスは対峙している男の実力が野盗の域を超えている事が引つかかっているようで、

「……何で、お前みたいなのが野盗の中にいる？」

男に向かい聞くが、

「答える理由はねえよ」

男はクロスの質問に答える気はない。

「……そうか」

男の言葉にクロスは頷いた刹那、

「!?!」

クロスは男との距離を一気に縮め、男が反応する間も与えずに男の剣を弾き飛ばし、

「なら、力ずくで聞かせて貰おう」

男の首もとに切っ先を向ける。

story・24

「……殺せ」

男はクロスの言葉に答える気はなく、仲間が逃げる時間も稼げたと思っているのか、そう言つと、

「そうか」

クロスは男の潔さに剣を振り下ろそうとするが、

「クロスさん、ダメです!!」

セフィはそう叫びながら、クロスの腕にしがみつき、クロスを止める。

「……何で、お前が出てくる?」

クロスは縛られているはずのセフィがここにいる意味がわからずに聞くと、

「フィルちゃんが縄を解いてくれました」

「クー」

フィルがセフィの縄を解いたようでセフィの後ろをパタパタと飛んでいる。

「そうか」

クロスは納得がいかなながらも頷くと、

「離せ。これはお前には関係ないだろ」

クロスはセフィに邪魔だと言うが、

「降参した相手に剣を向けるなんて間違ってます。神の教えに反します」

セフィはクロスから手を離す気はない。

「……お嬢ちゃん、悪いが俺は神の教えなんかで助けて貰う気はねえよ」

しかし、セフィに庇われている男がセフィの言葉に嫌悪を示し、

「どうしてですか!!」

セフィは男の言葉が信じられないのか声をあげて、男に聞き返す。

「言葉の通りだ。俺は神に祈るような事はしない。神なんてくそくらいだ!!」

男が吐き捨てるように言うのを見て、

「どうしてですか？ 神様はあなたのように道を外した……」

「お前らはどうして、俺達が道を外したと言う!!」

セフィは男に神の教えを説こうとするが、男はセフィの言葉を遮り、

「お前は何様のつもりだ？ 道を外した？ それは誰が決めた？
神つてのが決めたのか？ それとも神つて言葉を盾にして、自分達
の都合の悪い者達を排除していく教会と言っ名の権力者か？」

男は教会に恨みがあるようでセフィを怒鳴りつける。

story・25

「あなたは何を言っているんですか！！ 教会を神をおとし入れるような事を言うなんて……」

セフィは神と教会をバカにされ、頭にきたようで男を怒鳴りつけようとするが、

「お前は黙っている」

クロスがセフィを静止し、

「それで、お前は神様って『道化』に何を奪われた？ 地位か？ 名誉か？ それとも……家族か？」

神を『道化』と蔑み聞くとクロスの言葉に男は口元を緩ませ、

「何だ？ お前も同類か？」

クロスの行く末を『自分と重ねた』ようで、クロスを哀れむように見ると、

「俺達は神に弄ばれてたんだ。神の名のもとに行った事？ ふざけるな。ただの人殺しだろ。地位と名誉に取り憑かれ、自分の意にそぐわない者達の命を奪い、私腹を肥やす事のどこが正義だ。どこに神が語る愛がある？ 神の愛が本当に平等なら、なぜ、あいつらは殺された？ 誰を傷つけたわけでもない。ただ、自分達の信じるものを崇拜し、平和に生きていた者達の命を尊厳を奪ったのは俺達だろ」

男は教会に属する騎士だったのか、教会の指示で行ってきた事に疑問を持ち、教会から離れたように見える。

「そんな事、あるわけありません!!」

セフィは男の言葉を否定するように声をあげるが、

「お嬢ちゃんは何も知らないんだな」

男はセフィを哀れむような表情で見た後、

「正義を語って、愛を語ったって、あそこにはそんなものはない。それを知らずに生きているのはある意味幸せかも知れないが、世間知らずのお嬢ちゃんは哀れだな」

セフィに向かい言っていると、

「そんな事は……」

セフィは否定するように声をあげようとするが、

「……言いたい事はそれだけか？」

男の話をただ聞いていたクロスが男に向かい聞く。

story・26

「お前が教会に恨みを持っていようが知った事ではない。それでお前らが旅人を襲ったのは筋違いだ」

クロスは吐き捨てるように言うと、

「かもな。だけどな。俺達はやらなければならない事がある。偽りの愛や正義を語る奴らを追い払うために力を手にしなければならぬ。手段を選んでいる暇などない」

男は自分達の行動を正当化しようとするが、

「それはあいつらと変わらないな」

クロスは男の言葉を切り捨て、

「とりあえずは、近くの宿場町まできて貰おう」

そう言うと、

「お前も俺達と同類だろ？ お前もこいよ。あんな奴らをのさばらせて良いと思ってるのか？」

男はクロスに仲間になれと言うが、

「悪いな。俺はそんなものに興味ない。お前達がやろうとしてるのは自分達が教会に成り代わろうとしてるだけだ。そんなものに協力する気はない」

クロスは言い切る。

「……そうか」

男はその言葉で何かを理解したようで、

「お前は俺達の事を浅はかだと言っのだな」

クロスを睨みつけて言うと、

「俺には人の考えを批判する資格はない」

クロスはそう答え、

「お前の中にもずいぶん根深い恨み（もの）がありそうだな」

男はクロスを哀れむように笑う。

「……関係ないだろ」

クロスはそう言うと、

「行くぞ」

男に向かい言うが、

「悪いな。俺は生き恥をさらすつもりはねえよ」

男はそう言つと隠し持っていたナイフで自分の首をかつきる。

「……」

男の様子にセフィは顔を青くしながらも男にかけより、男の傷口を押さえ、必死に治癒魔法を唱え、男の傷を癒やそうとするが、

「ど、どうして？」

男に治癒魔法は効果がない。

「……お前らの信じる神はずいぶんと底が浅いんだな」

クロスはセフィに吐き捨てるように言うと、

「……どけ」

クロスはセフィから男を引き離し、男を斬る。

story・27

クロスは男を斬り捨てた後、

「フィル」

フィルに何かを伝えようとフィルの名を呼び、

「クー」

フィルはクロスの言いたい事がわかってるようでパタパタと飛んでいき、

(……俺も始めるか)

クロスは何かを始めようとすると、

「クロスさん、あなたは どうしてあんな事をしたんですか？ あの
人だって、まだ……」

セフィは目の前でクロスによって奪われた命に対して涙を流しながら、
クロスを睨みつけて何かを言おうとする。

「あの傷は致命傷だ。 治癒魔法も効かない状態で、 見殺しにするよ
りはマシだ」

しかし、クロスはセフィの言葉を聞くつもりはなく、 そう言い切ると、

「そんな事、ありません！！　神の愛は絶対です。あの人だって、助けられたはずです」

セフィは納得する気もないようでクロスに向かい言う。

「道化に囚われたものは惨めだな」

クロスはセフィを哀れむように言うと、

（……それは俺も変わらないな）

父親の命を奪ったものへの復讐を誓った自分の事を考え、自虐的な笑みを浮かべる。

「私は惨めなんかじゃありません！！　神の愛は絶対です。治癒魔法だって、効いたはずですよ。それなのに、それなのに……」

セフィはクロスの言葉など認めようとせず、クロスにつかみかかるうとするが、

「……」

クロスはセフィを避け、

「フィル」

ここにいる理由はないと思っているようで、フィルに頼んだ事への状況を聞くために、フィルの名を呼ぶと、

「クー」

フィルはクロスからの頼み事を途中にして、セフィを励ます事を優先させたように、セフィの周りをパタパタと飛び回っている。

「フィル」

クロスはもう1度、フィルの名を呼ぶが、フィルはクロスを何か言いたげな目で見て、

「クー」

声をあげると、

「……わかったよ。弔ってやれと言っただろ」

クロスはフィルの声の意味を理解しているようでそう言い、

「クー」

フィルはクロスの言葉に大きく頷き、

「アジトだし、スコップくらいあるか？」

クロスはアジトを物色し、自分が奪った命を弔う墓のようなものを作って行く。

「そこで何もしないなら、消えろ」

セフィはクロスが奪った命に対し、彼女の信じている神への教えなのか、手を合わせ何かを祈っているように見え、クロスに対する反抗心もあるのかクロスの言葉を聞き入れる事なく、熱心に神に祈り

をささげている。

「……勝手にしろ」

クロスはそう言うと、セフィを無視し、墓を作り続ける。

「あの」

セフィが何かを思ったのかクロスに声をかけ、

「……なんだ？」

クロスは面倒そうに聞き返すと、

「どうして、あの人は神を信じる事が出来なくなっただんでしょう？」

セフィは男の言葉が信じられないようで、クロスに向かい質問する。

「さっきの言葉の通りなんだろ。信じる価値を見いだせなくなった。自分達の行動に疑問を持った。自分達の罪を悟った」

クロスはくだらない事を聞くなと言った感じで答えると、

「だから、それがわからないんです!!」

セフィは声を荒げるが、

「すみません……」

クロスに対して声を荒げるのは筋違いとわかっているようでクロス

に向かい謝る。

「人の考える事なんて、それぞれ違うんだ。それを1つの考えで縛ろうとする事自体が間違ってるんだよ」

クロスは何かを思い出しているようでそう言うと、

「お前は、教会の正義の名のもとに殺された人間がどれだけいるか、考えた事はあるか？」

セフィに向かい聞くが、

「教会が人の命を奪う事はありません」

セフィは本当にクロスの質問の意味がわからないようでキツパリと言い切る。

「それなら、お前は教会が行っている邪教徒討伐をなんだと思っている？」

クロスは質問を変えると、

「邪教を信仰している人達にいかにか神の愛が素晴らしいか教会の教えを伝えるためのものです」

セフィは邪教徒討伐で実際に行われている事を本当に知らないようでクロスの質問の意味がわからないと言った表情で答え、

「……お前は本当に何も知らないんだな」

クロスは呆れたようなため息を吐く。

「何がですか？」

セフィはクロスの様子に少しムツとした感じで聞き返すが、

「一先ずは後にするぞ。この場所で夜を迎える気にはならないから、街道に戻るぞ」

クロスは日が傾いてきているのを気にしているのか、手にしていたスコップを地面に立て、セフィに向かい言い、

「フィル、終わったか？」

フィルに頼んでいた事を終わったか確認すると、

「クー」

フィルはクロスが斬り捨てた野盗の持ち物をしっかりと集めていたようでひとまとめにしている。

「これは使えそうだな。後は……」

クロスがフィルが集めた戦利品を物色しはじめると、

「クロスさん、あなたは何をしているのですか？」

死者の持ち物を物色しているクロスにセフィは批判するように言うが、

「これは冒険者の正当な収入だ。割り切れないなら、お前の信じる教会に帰れ」

クロスはセフィの言葉を聞き入れる事なく、作業を続けて行くと、

「……お前、武器はどうした？」

クロスはセフィが縛られていたせいか、丸腰になっていた事を思い出したようでセフィに聞く。

「縛られる時に、取られました」

セフィはそう答えると、

「……お前は本当に冒険者か？」

クロスは呆れたように言い、

「それで、武器はどうするつもりだ？ そのままで歩くつもりか？」

クロスがセフィにこれ以降、助ける義理はないと言っ意味を込めて言う。

「そこに私の剣があります」

セフィはクロスが物色している物の中にある剣を指差し、

「……これか？」

クロスはセフィが指差した剣を持ち上げると、

「ん？」

クロスはその剣の重さに首を傾げ、

「お前、これを使っていたのか？ 重くないか？」

クロスは剣の重さが気になったようで、セフィに向かい聞く。

「重いと思いますが、お父様が冒険者になると言ったら、買ってくださいましたから」

セフィが当たり前のように答えると、

「……お前、本当に冒険者になるつもりあるのか？ 自分の腕力に合わない物を使っていたら死ぬぞ」

クロスはセフィの常識の無さに呆れたようなため息を吐き、

「お前はこいつを使え」

戦利品の中から、セフィの腕力に合いそうな剣を渡す。

「これは街についてから、売れば良い金になるだろ」

クロスはセフィの剣を返すと、

「他に使えそうなものはないな。俺の剣はボロボロになっちまったし……」

クロスは戦利品の中には自分に合いそうな剣がなかったようで、多くの野盗を斬り捨て刃が欠けている剣を見た後、

「……仕方ない。あいつのところに行くか」

行き先を決めたようで、

「日が落ちる前に街道に戻るぞ」

フィルに向かい言っと、歩き始め、

「クー」

フィルは頷き、クロスの後について行き、

「ちょっと待ってください!?!」

セフィはクロスとフィルの背中を追いかける。

story・30

「まあ、わかつてはいたが……」

街道に戻るとすでに日はすっかりと落ちており、

「おい」

クロスはセフィを呼ぶと、

「お前、野宿の準備なんて……知るわけないな」

セフィの様子にクロスは頭を押さえて言う。

「どうして、決めつけるんですか？」

セフィはクロスの言葉に少し頬を膨らませるが、

「お前、ほとんど手ぶらだろ」

クロスは呆れているのか、ため息を吐く。

「こ、これは襲われたからであって、何も準備して無いわけでは無いです」

セフィは反論しようとするが、クロスの中ではすでにセフィは常識のない初心者の冒険者で固まっており、

「まあ、ここからなら、3時間くらいか」

セフィを無視して、クロスには通りなれた街道の位置を確認すると、
（ホックの事だ。一晩くらいは待っていてくれるはずだし、今から
追えば追いつくな）

ホック達に追いつけると計算したようで、

「俺とフィルは先に行くが……」

クロスはこのまま街道を進む事を伝えようとするが、

「クー？」

フィルはすでにセフィと一緒にいる事を決めているようでセフィに
抱きしめられ、楽しそうにしている。

「……フィル」

クロスはフィルの様子にため息を吐き、フィルを呼ぶが、

「クー」

フィルはセフィとともにいると言う。

「おい。お前、まだ、歩けるか？」

クロスはこのまま進めば、今日中に宿場町に着き、上手くいけばホ
ック達とも合流できると考えているせいか、セフィに向かいまだ体
力があるかを確認した時、

「クー」

フィルの言葉とは異なる音が響く。

story・31

「……」

その音にその場がしばらく固まった後、

「わ、私じゃないですから」

セフィは顔を赤くしながら口早に否定するが、

「……この場に俺以外に人がいればそれも通用したかも知れないな」

クロスは呆れたように言うと、

「でも、フィルちゃんとか」

それでも認めたくないようで、セフィはフィルの名を出すが、

「クー？」

フィルはセフィの腕の中でセフィがどうして慌てているのかわからず、首を傾げている。

「言いたいなら言ってろ」

クロスはすでにどうでも良いようでそう言っが、

「だから、私ではありません!!」

セフィには大問題のようでもう全力で否定した時、

「ぐるるるる」

何かが唸っているような音がする。

「な、何ですか？」

セフィはその音に何が起こったかわからずに戸惑っているが、

「最初の音がお前じゃないと言っなら、この音がお前の腹の音だな」

クロスは先ほどの音が腹の虫の音だと言い切り、

「クー」

フィルがセフィの腕の中で、少し恥ずかしそうにしている。

「……最初のが私の音です」

フィルの腹の虫の音を聞いて、セフィは顔を赤くして、自分の腹の虫が鳴いた事を認めると、

「先に進むのは無理か？」

クロスはセフィとフィルを見て言い、

「一先ずは飯にしたいが……」

クロスは自分の荷物を物色するが、3人分までの材料はないようで、

「……どうするかな？」

何かを考え始める。

「どうしたんですか？」

クロスの様子にセフィが声をかけると、

「俺とフィルの分はあるがお前の分はないから、どうするかな？」
と」

クロスの言葉に、

「私は食べなくても大丈夫ですよ」

セフィは根拠なく言うが、

「くだらない事を言う暇があったら、どうするか考える」

クロスは表情も変えずに言い、

「フィルと一緒に火でも点けてる。俺は何か探してくる」

クロスは日が落ちているなか、街道から離れ、食材を探しに歩き出す。

story・32

「火を点けろって言われても……」

セフィはクロスの言葉にどうして良いのかわからないような表情を
すると、

「クー」

フィルはセフィの手の中から抜け出し、

「クー」

得意げに炎を吹く。

「フィルちゃん、すごいです」

セフィは手を叩き、フィルを誉めると、

「クー」

フィルはセフィの様子に少し照れくさそうに頭をかき、

「クー」

街道に落ちている枯れ木や枯れ葉を集め始める。

「フィルちゃん、待ってください」

セフィはフィルとともに火を点ける枯れ木を集めて、フィルを炎で火を点けるとクロスを待っている。

（……クロスさんはどこまで行ったんでしょか？）

クロスが出て行ってから、だいぶ時間もたったがクロスは帰っていない。

（まさか、何かあったり……）

セフィはクロスが帰ってこない事を心配しはじめると、

「ガサガサ」

近くから何かがこちらに近づいてくる音がする。

「クロスさん？」

セフィはその音でクロスが帰ってきたと思い、音のした方に近づこうとするが、

「グー」

フィルはその音から何かを判断したようで威嚇するような唸り声をあげる。

「フィルちゃん？」

セフィはフィルの様子にクロスではないと気づいたようで、

(……何がくるんでしょうか?)

近づいてくるものを見極めようと少し腰が引けながらも剣を構える。

「ぐるるる」

近づいてくるものをは唸り声を上げながら、こちらに近づいてくる。

その唸り声は明らかに肉食獣の唸り声であり、

(どうしよう?)

セフィはその声を聞き、腰を引いたまま逃げ出したい思いにとらわれていて、

「ブン」

その肉食獣はセフィを見て、獲物を見つけたと判断したようで鋭い爪がついた手をセフィに向かい振り下ろす。

story・33

「……いや!？」

セフィは腰が引けていたせいか、その攻撃に驚き足が動かずにその攻撃を剣で受け止めようとするが、

「ぐふ」

フィルの炎が肉食獣に向けられ、

「クー」

セフィに向けられた爪は止まり、今度はフィルに向けられる。

「フィルちゃん!？」

セフィはフィルに助けられながらも腰が抜けたよううで地面にへたり込んでしまうと、

「死にたく無かったら、立て」

クロスは近くまで戻ってきてたよううで、そう言つとセフィの前に現れ、

「……クマか？ とりあえずは食料確保だな」

セフィとフィルを襲つていた肉食獣を見て言つと、

「クー」

フィルはその言葉に返事をし、

「……な、何を言ってるんですか!？」

セフィはクロスとフィルの様子にそんな事を言ってる状況じゃないと言いたいようで疑問の声をあげるが、

クロスとフィルはセフィの言葉に反応する事なく、クマに襲いかかる。

(一撃でも喰らうわけにはいかないな)

クロスは襲いかかる鋭い爪を交わしながら、

(……この剣じゃ斬れないか)

刃の欠けた剣で斬りつけて行くが、クマの硬い皮膚はなかなか斬り裂けないように細かくクマの皮膚に傷をつけて行くが致命傷をつける事はできず、

「クー」

フィルはクロスがクマの攻撃を一手に引き受けているため、炎を吹く準備を始め、

「クー」

準備ができたようでクロスに向かい合図をすると、クロスはクマの

爪を交わし、一歩後方に飛ぶと、

「ぐわあああ」

フィルの炎がクマを襲いかかり、クマはあまりの熱さに地面を転がる。

「とどめだな」

クロスはこちらに攻撃をする余裕がなくなったクマの眉間に剣を深々と差し込むとクマはその活動を止める。

story・34

「食わないのか？」

クロスは仕留めたクマを手慣れた手つきで解体するとその肉を鍋に入れ、採ってきたであろうキノコや野草と一緒に煮込んだものをセフィに渡すが、

「……………」

セフィは先ほど目の前で行われた事が衝撃的だったようで、

「どうして、そんなに落ち着いているんですか？ 私達、さっき、襲われたんですよ。その襲ってきたものをすぐに食べれるわけじゃないですか？」

セフィはクロスに向かい言うが、

「クー」

体は正直でセフィの腹は食料を求めて泣き声をあげる。

「……………いただきます」

セフィは顔を真っ赤にすると自分の体から求められたものを摂取しようとしてクロスが作った料理に口をつけると、

「……………美味しい」

見た目が極端に悪く、どこか食べたものではないかと思っていたものが予想以上に美味しかったようで、セフィは驚きの声をあげるが、

「そうか」

クロスは笑顔を見せる事なく頷く。

「……あの」

セフィはクロスの様子に何か不思議に思ったようで、クロスに声をかけると、

「どうして、私を助けてくれたんですか？ 私は足手まといだし、神の愛を信じていないクロスさんにとって、私なんかを助けても…

…」

自分を助けて、食事まで用意してくれたクロスの事を不思議に思ったようでそう聞く。

「……別に、俺が世話になった人の教えだから仕方なくだ」

クロスはあまり言いたくないようで、

「くだらない事を言ってる暇があったら、食ってさっさと寝ろ。フイルと一緒に見張りくらいして貰うからな」

不機嫌そうに話を切るが、

「あの、その前にどこかで水浴びとかってできないですかね？」

セフィが何を思ったのかそんな事を言う。

「……お前、やっぱり、バカだろ」

クロスはセフィの言葉にため息を吐きながら言うが、

「でも、さすがに……」

セフィはクロスに助けて貰った時に野盗の血を全身に浴びているせいか拭いたとはいえ気持ち悪いようでそう言つと、

「……少し奥に湧き水が湧いていた。そこで浴びてこい。フィル、お前もついて行け」

クロスは頭を押さえながら言い、

「ありがとうございます。フィルちゃん」

セフィはフィルを抱きしめ、クロスに礼を言つた後、

「覗かないでくださいね」

クロスに向かい言つと、

「覗かねえよ」

クロスは疲れたようなため息を吐く。

「あれ？」

セフィがクロスの言っていた場所に着くと先客がいたようで、月明かりにエルフの少女の姿が照らされている。

(……綺麗)

セフィはエルフの少女の姿に見とれているのか少し呆けたような感じで立ち尽くしていると、

「クー？」

フィルはセフィが立ち尽くしている意味がわからずに首を傾げる。

「ジョセフ？」

エルフの少女はフィルの声に連れが着たと思ったようで仲間の名前と思われる名前を呼ぶが、

「……誰ですか？」

セフィの姿を見た後、セフィを少し警戒しながらセフィに聞くと、

「うー、ごめんなさい!？」

セフィは声をかけられた事に驚きの声をあげるが、

「クー？」

フィルは相変わらず、セフィが驚く意味がわからずに首を傾げている。

「お、驚かせてすみません。月明かりに照らされているアナタがとても綺麗で」

セフィは口早に少女に向かい言くと、

「ありがとうございます」

少女はセフィの反応が良くわからないと言った感じで苦笑いを浮かべながら言う。

「アナタも水浴び……」

少女はセフィにここにきた理由を聞こうとするが、セフィの全身にかかり固まっている赤黒い血液を見て、何かを思い出しているのか怯えたような表情をし、

「ア、アナタのその格好は？」

セフィに恐怖を感じたように聞き返す。

「こ、これは違います……」

セフィは少女が怯えている意味に気づいたようで全力で否定すると、少女に向かいクロスに助けられた時の事を説明すると、

「そうですね。アナタも怖い思いをしたんですね」

少女はセフィに何か同じ匂いを感じたのかそう言い、

「疑って申し訳ありませんでした」

セフィに向かい頭を下げた後、

「私、もう行きますので」

そう言つと服を着て駆け出して行く。

story・36

「あの、クロスさん」

セフィは水浴びを終えると、焚き火に枯れ木をくべているクロスに声をかける。

「何だ？」

クロスが短く返事をするのを見て、

「私のせいで、野宿になってしまって、申し訳ありませんでした」

セフィはクロスに向かい、改めて頭を下げるが、

「そんな事を言ってる暇があったらさっさと寝ろ。明日は早めに出発して、ホックに追いつきたいんだ」

クロスは面倒くさそうに答えると、

「わかりました……」

セフィはクロスに何かを聞きたげな表情をする。

「……何だ？」

クロスはセフィの視線に何かを感じたのか聞き返すと、

「さっき、クロスさんに教えていただいたところで、エルフの少女

に出会ったんですけど、クロスさんは会いませんでした?」

セフィは先ほど出会った少女が街道に出てきてないか知りたいようにクロスに聞く。

「見てないな。エルフだったのなら、精霊達から声を聞くと考えれば街道を歩かなくても道に迷う事も無いだろうし、この辺に住んでるのかも知れないな」

クロスは興味なさそうに答えると、

「そうですか」

セフィは頷き、

「これで良いだろ。早く寝ろ」

クロスはセフィの相手をするのが面倒なように冷たく言う。

「もう1つだけ、クロスさんはどうして……」

セフィはクロスが教会や神を信じない事を聞きたいと思ったようにクロスに向かい言うが、

「……」

セフィの言葉にクロスは察しがついたように答える気はないと言った感じで、鋭い視線でセフィを睨みつけると、

「……ごめんなさい」

セフィはクロスの様子にこれ以上聞いてはいけなと判断したよう
でクロスに向かい謝ると毛布をかぶる。

story・37

クロス、セフィ、フィルの3人は朝早くに出発し、宿場町に到着したところで、

「クロス……」

出発の準備を始めていたホツクが3人の姿を見つけ、

「どこで、この娘を拾ってきたんだ？」

クロスの隣にいるセフィを指差して聞く。

「野盗のアジトに捕まってたんだよ」

クロスは面倒そうに答えると、

「ほう……」

ホツクは何かを考えているのかニヤニヤと笑い、

「昨晚はお楽しみでしたね」

クロスとセフィに向かい言っていると、

「そんな事はしてません！？」

セフィは顔を真っ赤にして反論し、

「……またかよ」

クロスはため息を吐き、

「ホック」

クロスはセフィから反論を受け苦笑いを浮かべているホックの名前を呼ぶ。

「何だ？」

「追いついたが、俺は一緒にいて良いのか？」

クロスは1度、パーティーから離れたため、ホックに確認をすると、

「問題ない。昨日の件は依頼主も納得してるしな」

ホックは問題ないとは答えるが、

「問題はこの娘だな」

セフィを見て何かを考えているような素振りをする。

「えーと？」

セフィはホックが考えている事がわからないようで首を傾げていると、

「町に戻るより宿場町の方が近いから連れてきたが、お前はここからどうするつもりだ？」

クロスは頭を押さえながらセフィに説明をする。

「あつ！？　そう言う事ですか」

セフィはクロスの説明で始めて気づいたようで驚きの声をあげると、

「……この娘、大丈夫か？」

ホックはため息を吐きながらクロスに聞くが、

「俺に聞くな」

クロスは興味なさげに言い、

「クー」

「フィルちゃん！？」

フィルはセフィを気に入っているようで、セフィと離れるのが嫌なようにセフィに抱きつく。

「これは決まったのか？」

ホックはフィルの様子に苦笑いを浮かべて、クロスに聞くとクロスは諦めたように首を縦に振ると、

「セフィ」

ホックはセフィの名前を呼び、

「は、はい!？」

セフィはホックに名前を呼ばれたのに驚いたようで、声を裏返して返事をする、

「一先ず、冒険者を続けるつもりなら、このままついてこい。目的地に着いたら、自分で新しい仲間を探せ」

ホックはセフィの同行を許し、

「は、はい。お願いします」

セフィはホックの言葉に返事をする、

「よろしくお願いします」

ホックのパーティーに頭をさげる。

「……」

セフィが頭をさげるのをクロスは無表情なまま眺めていると、

「お前にもあれくらいの礼儀があればなあ」

ホックはからかうようにクロスに向かい言っが、

「そんなものを持ち合わす気はない」

クロスは不機嫌そうに言うと、

「すぐに出るのか？」

ホックに向かい出発時間を確認する。

「お前も補充するものがあるだろ。それに詰め所には野盗の報告はしておいたが、お前からの報告も必要だろ。それくらいの時間は取れると思う」

「そうか」

ホックの言葉にクロスは頷くと、

「少し出てくる」

そう言い、歩き出す。

「クロスさん、待ってください!？」

セフィはクロスが歩いて行くのを見て、自分もついて行こうと思ったのか、慌ててクロスの名前を呼ぶが、

「……………ついてくるな」

クロスはセフィの相手をするのが面倒なようでそう言い、1人で歩いて行く。

「クロスさん……………」

セフィはクロスの背中を見つめていると、

「あいつは仕方ないな」

「クー」

ホックはクロスの様子に苦笑いを浮かべながら言うと、フィルもホックと同じ意見のようで頷く。

「セフィは買うものは無いのか？」

クロスの背中を見つめているセフィにホックが声をかけると、

「えーと、そうですね。買うものは無いんですけど……………」

セフィはホックの言葉に何かを考えるような素振りをした後、

「これを買収ってくれるお店つてありますか？」

クロスに売った方が良いと言われた剣を見せる。

「これをか？」

「はい。クロスさんに私には重たいだろって言われまして」

「ん、確かにこれはセフィには重そうだな……」

ホックはクロスと同じ意見のようだが、何か考えがあるのか首を傾げている。

「売れないですか？」

ホックの態度にセフィが聞き返すと、

「ここじゃ、その剣に見合った値段がつくかな？ とな」

ホックはセフィの剣を良品だと判断したようで今は売らない方が良いと考えているようだが、

「……ちよつと待てよ。あいつがいたな」

何かを思い出したようで、

「どうかしましたか？」

ホックの様子にセフィが聞くと、

「前にクロスに紹介された冒険者に行商をやってる奴がいてな。昨日、同じ宿に泊まってたんだ。そいつなら買ってくれるかな？　と思っただがあたってみるか？」

ホックは心当たりを思い出したようでセフィに向かい確認せると、

「お願いします」

セフィは頭をさげ、ホックとともにその冒険者を探しに向かう。

(さてと……)

クロスは野盗の報告を終え、野盗から奪った戦利品を処分しようと宿場町を移動していると、

「ん？ クロス？」

クロスの名前を呼ぶ少女の声が聞こえるが、

(……この声は？ 無視だな)

クロスは自分の名前を呼んだ声に心当たりがあつたようだが、関わり合いたくないと思ったようで聞こえないふりをして歩き出す。

「ちよつと、クロス、聞こえてんだろ？」

クロスの名前を呼んだ少女はクロスの行動を見て、クロスだと確信を持ったようでクロスに向かい歩いてくるなり、

「お姉さんを見無視するなんて、いい度胸じゃない？」

丸い眼鏡と艶のある黒髪が印象的な少女がクロスの腕をつかみ言う。

「……何のようだ？」

クロスは自分の腕を捕まえた少女を見ると厄介な人間に捕まったと思っているのか、不機嫌そうに少女に向かい言つと、

「……あんたは相変わらずね」

少女はクロスから手を離すとクロスの対応に疲れたようなため息を吐き、

「こんなところで何をしてるのよ？」

クロスの相変わらずの態度に頭を押さえながら言っが、

「お前に話す義理はねえよ」

クロスは冷たくそう言い、歩き出そうとするが、

「いたいた」

「あの人ですか？」

クロスに声をかけた少女を探していたようで、セフィとホックがクロスと少女に向かって歩いてくる。

「あれ？ クロスさん？」

セフィはクロスに気づきクロスの名前を呼ぶと、

「まさか、あんたにこんな可愛い娘の知り合いがいるなんてね」

少女は自分の眼鏡をクイツとあげるとセフィの事をクロスに詳しく聞こうとする。

story・40

「……断る」

クロスは少女の行動に答える気はなさそうではっきりと言った、

「……あのねえ」

少女はため息を吐き、

「えーと、リシエルⅡイエブナレスだよ。一応は冒険者だけど、どちらかと言えば、行商人に近いかな？ 主に扱っているのは爆薬と治療薬と情報」

クロスからの解答を諦めたようで、自分の名前を名乗ると、

「セフィリアⅡユノスです。神官戦士です」

セフィはリシエルに向かい頭を下げる。

「神官戦士？」

リシエルはセフィの言葉に疑問の声をあげ、

「珍しいね」

セフィとクロスを交互に見て言うと、

「何がですか？ 神官戦士なんて特に珍しくも」

セフィは疑問の声をあげる。

「セフィは珍しくないよ。珍しいのはこいつ」

リシエルはクロスを指差し言うと、

「あんたが神官戦士と一緒にいるなんて、どという風の吹き回しだい？ 神を信じる気になっただかい？」

クロスに向かい聞くが、

「……成り行きだ。なれ合うつもりはない」

クロスはくだらない事を言うなと言いたげな表情で言い、

「まあ、そうだろうね」

リシエルは納得したのかため息を吐きながら頷く。

(……)

クロスとリシエルの様子にセフィはクロスの過去に何かあったのか気になっているようだが、昨晚の事もあるために何も言わずにクロスを見つめっていると、

「ふーん」

リシエルはセフィのクロスに向けられている視線に気づいたようでニヤニヤと笑い、

「リシエル、あまりからかうなよ」

ホックは自分の事は棚に上げ、リシエルに向かい言う。

story・41

「仕方ないね」

ホックの言葉にリシエルは諦めたようでそう言つと、

「それで、セフィは私に何かようなのかい？」

リシエルはホックがセフィを連れてきた事に自分にようがあるのはセフィだと気づいたようでセフィに聞く。

「あつ！？ はい」

セフィはリシエルの言葉に少し驚いたように返事をした後、

「これを買取って貰いたいんですけど」

リシエルに剣を見せる。

「これがかい？ ……」

リシエルはセフィから剣を受け取り、剣を鑑定しはじめる。

「……………」

リシエルが黙って剣を鑑定しているのを見て、

「どうですか？」

セフィはリシエルの鑑定結果が気になっているようでリシエルに聞くが、

「……少し静かにしている」

クロスは呆れたようにセフィに向かい言い、

「そ、そうですね」

セフィはクロスの言葉に少し気まずそうに笑うとその様子にホックは苦笑いを浮かべている。

「良い剣だね」

リシエルは鑑定を終えたようでセフィに剣を返すと、

「買い取って貰えないんですか？」

セフィは剣を返されたため、買い取って貰えないと判断したようでそう言う。

「買いたいところなんだけど、手持ちが足りなくてね。その剣に見合った代金が払えない」

リシエルは剣は気に入ったようだが、持ち合わせがないと言い、

「そうですか」

セフィは残念そうに頷く。

「悪いね」

リシエルは苦笑いを浮かべると、

「話は変わるんだけど……クロス」

ニヤリと笑いクロスの名前を呼び、

「良い治療薬があるんだけど、買わないかい？ 安くしとくよ」

クロスに治療薬を売りつけようとするが、

「いらん」

クロスはキツパリと言い切る。

「つれないね」

リシエルがため息を吐くと、

「ちなみにお前が配合した薬か？」

ホックがリシエルに聞き返し、

「当然だろ。ホックは買うかい？」

リシエルはホックに狙いを変えるが、

「お前の薬は副作用が怖いから遠慮する」

ホックはため息を吐きながら断ると、

「信用ないね」

リシエルはため息を吐くが、

「妥当な答えだろ」

クロスは言い切り、

「ホック、時間は良いのか？」

ホックに出発の時間を確認すると、

「そうだな。そろそろ戻らないといけないな。それじゃあ、邪魔したな。リシエル」

リシエルに向かいそう言い、

「いや、こっちこそ。期待に添えられなくて悪かったね」

リシエルは苦笑いを浮かべながら謝り、クロス達はリシエルと別れ、目的地に向かう。

story・42

「うわぁ、大きな街ですね」

セフィは街道から見える街を見て、声をあげると、

「ここらへんじゃ、1番大きな街だからな」

ホツクはセフィの様子に苦笑いを浮かべながら答え、

「セフィはこの後、どうするつもりだ？ はぐれた仲間を探すのか？ それともこの街で新しい仲間を探すのか？」

セフィに向かい聞く。

「えーと、一先ずは冒険者のお店に行ってから考えます」

セフィはまだどうするかを決めかねているようでそう言つと、

「なら、クロス。冒険者の店くらいには案内してやれよ」

ホツクはクロスに向かい言うが、

「……どうして、俺がそんな事をしないといけない？」

クロスさ面倒そうに答える。

「俺達は報酬を受け取るまでは拘束されるしな。取り分は先に渡すから、それくらいやってやれよ」

「クー」

ホックが苦笑いを浮かべながらそう言うと、フィルもホックと同意見なのか大きく頷き、

「……」

クロスは関わり合いたくなさそうな表情をしている。

「クロスさん、お願いします」

セフィはクロスに向かい頭をさげるが、

「……自分でなじみの店を探すのも冒険者じゃないのか?」

クロスはセフィとはここで別れる事を決めているようで冷たくそう言うと、

「クー」

フィルはクロスの態度に少し頭にきているようで、クロスを叱りつけるように声をあげ、

「クロス、もう少しだけ面倒を見てやれよ」

ホックは苦笑いを浮かべ、含みのある言い方でクロスに向かい言う
と、

「……わかったよ」

クロスはホツクの言葉に何かを感じたのか面倒そうに頷き、

「よろしくお願いします」

セフィはクロスに向かい頭をさげるが、

「……」

クロスがセフィの言葉に反応する事はない。

story・43

「クロスさん、待ってくださいよお」

セフィは先を歩くクロスを呼ぶが、クロスはその足を緩める事はなく、

「……早くしろ」

セフィのお守りを早く終わらせたいようで先を急いでいる。

「ま、待ってください……」

セフィはついに限界がきたようで、その場へたり込んでしまうと、

「クー？」

フィルは心配そうにセフィの顔を覗き込み、

「クー」

クロスを非難するように声をあげる。

「……俺が悪いのかよ」

クロスはフィルの声にそう呟くと、

「お前は俺を巻き込んで何が楽しいんだ？」

セフィの元まで戻り、セフィに今までかけられた迷惑を非難するようにそう言うが、

「そんな事を言われても」

セフィはクロスの顔を見上げて泣き出しそうな声で言う。

「……はあ」

クロスはセフィの様子に頭を押さえながらため息を吐いたところで、

「道の真ん中で座り込むな」

クロスとセフィのやりとりが通行の邪魔なようで男がセフィに向かい言う。

「す、すみません!？」

セフィはその言葉に驚いたのか急いで立ち上がると、

（あれ？）

男の顔を見て、男の右目が光を失っている事に気づく。

「……なんだ？」

セフィが自分の顔を見て固まってしまったのを見て、男は不機嫌そうにセフィに向かい言うと、

「あの、もしかして右目が見えないんですか？」

セフィは男に右目の事を聞く。

「……会ったばかりの人間に言う義理は無い」

男はセフィの言葉に少しイラついているのか不機嫌な声で言った時、

「……エリトラハハルハザードか？」

クロスはその男の容姿に心当たりがあったようで男の名前を呼ぶと、

「なぜ、俺の名前を……」

クロスにエリトラと呼ばれた男はクロスの顔を見て、

「クロスハブラッドか。お前に名前を知られるなんて、俺も有名になつたものだな」

エリトラは意味ありげな表情で笑う。

story・44

「クロスさん、知り合いですか？」

セフィが2人を交互に見た後、クロスに向かい聞くと、

「いや、話しに聞いた事があるだけだ。四大元素を司る妖精を使いこなす天才妖精師。数年前まで続けられていた隣国との戦争を終結させるのに1枚噛んでいるって話しも聞いた事がある」

クロスはエリトラの事をセフィに説明する。

「凄い人なんですネ」

セフィは感心したような声をあげて、エリトラを見るが、

「凄くなんてない。ただの人殺しだ」

エリトラはセフィの言葉が目障りなのか不機嫌そうな口調で言い、

「それで、女連れの色男さんは道端で何をしてるんだ？」

エリトラはあまり自分の事を話されなくなかったのか、仕返しのつもりなのか皮肉を込めながらクロスに聞くと、

「成り行きで、こいつを冒険者の店に連れて行くところだ」

クロスはエリトラの皮肉に反応する事なく、ありのままを話す。

「そうか……」

その言葉にエリトラは少し考えるような素振りを見ると、

「俺もその店に連れて行け」

クロスに向かい言う。

「なぜだ？」

クロスはエリトラが同行したがる理由がわからずに聞き返すと、

「この街には初めてきたんでな。なじみの店がない。クロス＝ブラッドほどの男が拠点にしている店なら、優秀な冒険者もそろっているだろ」

エリトラはあっさりと答え、

「あの、でも、エリトラさんは凄い人なんですよね？　優秀な冒険者を……」

セフィは意味がわからないのかエリトラに説明を求めようとするが、

「あまりバカみたいな質問をするな」

「クー」

クロスは疲れたようなため息を吐くと、流石にフィルも呆れたような声を出し、

「俺は後列だからな。前で守ってくれる奴がいないと懷に入り込まれたら死ぬだけだ」

エリトラはセフィの様子に呆れたように言い放ち、

「それで、頼めるか？」

セフィの事を軽く無視し、クロスに確認すると、

「……好きにしろ」

クロスは1人増えるのも変わらないと判断したのかそう言つと、
1人で歩き出す。

story・45

冒険者の店『蒼き剣亭』

クロスは本当になじみの店に2人を連れてきたようで、店のドアを開けると、

「ん？ クロス、フィル、お帰り。里帰りは終わったかい？」

店主らしき年配の女性がクロスの名前を呼ぶ。

「ああ」

クロスは店主の言葉に無愛想に頷くと、

「後は好きにしろ」

セフィとエリトラに向かいそう言い、自分はカウンター席に座る。

「待つてくださいよお」

セフィは慌ててクロスを追いかけてクロスの隣に座るとエリトラは特に知り合いもないためかクロスの近くのカウンター席に座る。

「クロス、この2人は？」

店主はセフィとエリトラの事をクロスに聞くと、

「1人は初心者、もう1人は上級者」

クロスは面倒くさそうに言い、その姿に店主は苦笑いを浮かべ、

「あたしはこの店の店主のジルだよ。2人とも初顔だけど、この店には何をしにきたんだい？」

セフィとエリトラに向かい聞く。

「……俺は仕事と仲間を探しにきた」

エリトラは短く答え、

「あの、私は……」

セフィはこの街にきた経緯をジルに話す。

「うーん。とりあえずはうちにはあんたの仲間らしき人間はきてないね」

ジルはセフィから聞いた仲間の容姿に心当たりがないようでそう言う、

「そうですか」

セフィは残念そうにうなだれる。

「それじゃあ、2人ともまずは仲間探しだね」

ジルはそう言うと、セフィはエリトラに書類を渡し、

「記入したら、掲示板に貼り付けておきな」

そう言うと、

「クロス、パナシェが帰ってきたら顔を出せって言ってたよ」

クロスに向かいパナシェと呼ばれる人間から頼まれていたであろう伝言を伝えるが、

「……」

クロスはその言葉を聞こえないふりを決め込もうとする。

「クロス……」

ジルがクロスの名前を呼びながら呆れたようなため息を吐いたところで、

「クロスさん、パナシェさんって誰ですか？」

セフィはクロスに向かい言うが、

「おまえには関係ないだろ」

クロスは冷たくそう言ったところで、

「確か、剣の旅団のリーダー……なるほど、ここも剣だったな」

エリトラはパナシェの名前に心当たりがあるのかそう言い、

「凄い人なんですか？」

セフィがエリトラに質問した時、

「凄い人なんです」

セフィの後ろから男が声をかけてくる。

story・46

「ちょうど良いところにきたみたいだね」

男はクロスの顔を見て、くすりと笑いながら言うと、

「噂をすればなんとやらね」

ジルは男を見て苦笑いを浮かべている。

「噂？」

ジルの言葉にセフィが首を傾げていると、

「はじめまして、お嬢さん、エリトラくん、剣の旅団のリーダーをやらせて貰っているパナシエ＝ディエルゴです」

男は自分がパナシエだと自己紹介をする。

「そうなんですか？ はじめまして、セフィリア＝ユノスです」

セフィはパナシエの言葉に少し驚いたような表情で頭を下げるが、

「……」

エリトラは頭を下げる事なく、パナシエを見極めようとしているのかパナシエの様子を見ている。

「そんなに睨みつけないでくれるかい」

パナシエはエリトラの様子に苦笑いを浮かべると、

「2人ともうちのギルドに入る気はない？」

2人をギルドに勧誘する。

「あの、すいませんけど、ギルドって？」

セフィはギルドと言うものがわからないようでクロスをつつき聞くと、

「……冒険者をまとめる組織みたいなものだ。登録料と情報料を払えばある程度の情報をおろしてくれる。貴族はギルドを指定する事が多いからな。人脈を広げる事もできる」

クロスは相変わらずのセフィの常識の無さに頭が痛いのか頭を押さえながらもギルドの説明を簡潔にセフィに教え、

「入団した方が良いんですか？」

セフィはクロスに聞き返すと、

「……好きにしろ。メリットもあればデメリットもある」

クロスはセフィに自分に考えろと言う。

「まあ、入団してくれば一先ずは仲間の斡旋はできるよ」

パナシエは書類を覗いていたのかセフィが仲間を探しているのに気

づいているようで、クロスとセフィのやりとりを楽しそうに見ながら言つと、

「クロスさんは入団してるんですね？」

セフィはクロスが剣の旅団に入団しているか確認をする。

「俺は入ってない」

クロスは表情も変えずに言い切り、

「現在進行中で勧誘中です」

パナシエは苦笑いを浮かべる。

story・47

「まあ、考えてくれるかい」

パナシエはセフィとエリトラにそう言つと、

「クロス、仕事を依頼したいんだが」

真面目な表情になり、クロスに言う。

「俺じゃなくて、ギルドの人間に任せろよ」

しかし、クロスはパナシエの依頼を断ろうとする。

「そう言つなよ」

クロスの態度にパナシエは苦笑いを浮かべながらも、

「ギルドに調査依頼がきたんだけど、動ける人間がいなくてさあ」

クロスに引き受けると言う。

「……失敗が続いているわけか」

クロスはパナシエの様子にこの依頼にギルドに登録している冒険者を派遣したようだが、上手くいっていないと判断したようでパナシエに向かい言つと、

「まあ、そう言つ事だね」

パナシエは苦笑いを浮かべて答える。

「中堅あたりの冒険者でもできると判断していたんだけど、違ったみたいだね。上級者の冒険者を回そうとも思っただけ、今は空いてるのがなくてさ」

パナシエは苦笑いを浮かべたまま状況を素直に話すが、

「今は無理だな。俺もこう言う状況でな」

クロスは自分の剣をパナシエに渡すと、

「これはまた、ずいぶんと使い込んだみたいだね」

パナシエは刃こぼれしているクロス之剑を見て苦笑いを浮かべる。

「……ああ。不本意ながらこいつをエリスのところに持って行かないとならない」

クロスは自分の剣を持っていくところがあると言い、

「修理が終わるまで、俺は仕事をする気はない」

しばらくは依頼は受けないと言うが、

「エリスのところに持って行くな、依頼を受けといた方が良くと思うよ」

パナシエは楽しそうに笑いながら言う。

「……………何？」

クロスはパナシエの言葉の意味がわからずに怪訝そうな表情で聞き返すと、

「依頼は元々、エリスが所属している鍛冶師の組合からなんだ。今まで使っていた鉱山の奥から遺跡が発見されてね。奥から何かの唸り声が聞こえるって言うんだ。そこから出てくるモンスターは鉱山と変わらないし、3回ほど中堅を派遣したんだけど、3回とも失敗。鍛冶師の組合でも数回探索に行ったみたいだけど、唸り声の原因がつかめない」

パナシエは依頼内容をクロスに説明しはじめ、

「……………それを俺1人で行けと？」

クロスは中堅クロスの冒険者達が失敗している依頼を1人で活動している自分に回す理由が納得いかないようでパナシエに聞き返すと、

「そうだね。クロスでも1人じゃ不安だから……………」

パナシエは少し考えるような素振りをした後、

「2人について行って貰おうかな」

パナシエはセフィとエリトラを見て笑いながら言う。

story・48

「ふええええ!？」

セフィは急にパナシエから仕事を振られた事に驚きの声をあげるが、

「こいつとか？ まあ、面白そうではなるな」

エリトラはパナシエの提案に興味があるのか頷く。

「……エリトラの实力は認めるが、なぜ、こいつを連れて行かないといけない。確実に足手まといだぞ」

クロスはエリトラの同行には納得が行くが、セフィを連れて行くのは足手まといのため、パナシエに向かい聞くと、

「毎回、鍛冶師の組合から1人出して貰ってるから、3人くらい人を出したいんだ。今から人員を探すのも大変だしね」

パナシエは苦笑いを浮かべて言うが、不意に真剣な表情になり、

「クロスがいるから組合からはエリスを出して貰うとして、前衛に剣士のクロス、神官戦士のセフィ、後衛に妖精師のエリトラと精霊使いのエリス、状況しだいで鍛冶師として戦えるエリスとセフィを入れ替えれば良いし、バランスは悪く無いだろ」

パナシエはパーティーバランスを冷静に分析しているのか鋭い視線を向けて言うが、

「クー」

自分の名前が呼ばれないフィルが文句があるようで声をあげる。

「そうだね。フィルくんを忘れてたね」

パナシエはフィルの頭を撫でて言うと、

「クー」

フィルはパナシエの態度に機嫌を直したのか大きく頷く。

「それで、セフィちゃんはどうする？」

パナシエはセフィに確認をすると、

「お、お願いしましゅ……」

セフィは慌てて返事をしたせいか舌を噛み、

「くくく」

エリトラはその様子に息を殺しながら笑い、

「……何で俺がこいつのお守りをしないといけない」

クロスはセフィの様子に頭を押さえながらため息を吐く。

「それじゃあ、よろしくね。今日はこの街に着いたばかりだろうし、明日、鍛冶師の組合に顔を出して貰えるかな。ジルさん、お邪魔し

たね」

パナシエはそう言つと、店を出て行き、

「それじゃあ、明日はよろしく頼む」

エリトラはクロス、セフィ、フィルに向かい言つと、

「……ああ」

クロスは頷き、

「よ、よろしく願いします」

セフィはエリトラに向かい頭をさげる。

story・49

「……フィル」

クロスは食事を終えると、フィルの名前を呼び、

「クー」

フィルはクロスの荷物を持ち上げる。

「ん？ どこか行くのか？」

エリトラはクロスの様子を見てクロスに声をかけると、

「ああ、俺はこの街を拠点にしてるから、住む場所もあるんでな」

クロスはこの店に泊まる気はないと答え、

「そうなんですか？」

セフィはあまり知り合いのいない場所にいるのが不安なのか、声のトーンを落として言う。

「クー」

フィルはセフィの様子に何かを言いたげにクロスに声をかけるが、

「却下だ」

クロスはフィルの言いたい言葉の意味を理解しているようで、フィルの言葉を却下する。

「まあ、普通に考えるとそうだろ」

エリトラもクロスと同意見なのか苦笑いを浮かべていると、

「どういう事ですか？」

セフィは意味がわからずに首を傾げている。

「まあ、お前は気にしない方が良いな」

エリトラはセフィの様子にため息を吐き、

「フィル、今日はあいつについててやれ」

クロスはフィルから荷物を受け取り言っと、

「クー」

フィルはクロスの言葉に頷き、セフィに抱きつき、

「……明日の朝、顔を出す」

クロスは店を出て行く。

「フィルちゃん、ありがとう」

セフィはフィルが残ってくれた事に安心したのか嬉しそうにそう言

うが、

「セフィ、あんた部屋も借りるんだね……」

ジルがセフィに向かい宿泊費を伝えると、

「……あれ？ 足りない？」

セフィはまだ剣を売っていないせいか、旅銀にも底がつかけているのか財布の中身を確認し、

「これ、食事代です」

食事代をジルに渡し、

「クロスさん、待ってください！？ 私に武器のお店教えてください」

クロスを追いかけて行く。

「忙しい娘だね」

ジルが苦笑いを浮かべて言うと、

「クロスとはお似合いなんじゃないのか」

エリトラは苦笑いを浮かべながら言い、

「クー」

フィルはエリトラの言葉に頷いた後、

「クー」

エリトラとジルに頭を下げてセフィの後を追いかけて行く。

「……フィルが1番大人なのか？」

エリトラはフィルを見て言うと、

「そうかも知れないね」

ジルは苦笑いを浮かべたまま頷く。

story・50

「……………何のようだ？」

クロスは追いかけてきたセフィを見て言うと、

「私、お金がなかったんですう」

セフィは宿泊費が足りないと言い、

「……………」

クロスはセフィの様子に頭を押さえながらため息を吐く。

「それで、これ売りたいんですけど、良いお店ってないですかね？」

セフィは剣を売りたいと言い、

「……………ついてこい」

クロスはいろいろと諦めたようでセフィを連れて歩いて行く。

武器屋

「いらっしやい」

クロス、セフィ、フィルの3人がクロスの馴染みの武器屋に入ると、クロスやセフィと同年代の少年が店番をしている。

「ん？ クロス……」

セフィはクロスが連れてきたセフィをみて、ニヤニヤと笑うと、

「アルト、変な勘違いをするな」

クロスは少年の名前を呼ぶと、もう何度目になるかわからない、このやりとりに疲れたようにため息を吐き、

「こいつの剣を買い取って欲しいんだ。後は俺に使えそうな剣はないか？」

この店にきた理由をアルトに伝える。

「まあ、それが仕事だから、喜んで買わせて貰うけど、お前はいつもエリスのところに修理に出すだろ」

アルトと呼ばれた少年は首を傾げるが、

「急な仕事でな。直して貰ってる時間がない」

クロスは簡単に言っと、

「そう言う事か」

アルトは納得したようで、数本の剣をクロスに渡し、

「こいつはエリスの新作だ。あいつも良いものを打つようになってきただろ」

剣を誉める。

「ああ……」

クロスは真剣に剣を選んでいようでアルトの言葉に適当に返事をすると、

「それで、剣を見せて貰って良いかい？」

アルトは苦笑いを浮かべながらセフィに向かい言う。

「はい。お願いします」

セフィはアルトに剣を渡すと、

「……へえ」

アルトはセフィの剣を鑑定しはじめ、

「こんなものかな？」

セフィに値段を提示する。

「こ、こんなに良いんですか!？」

セフィはアルトが提示した値段に驚きの声をあげるが、

「……アルト、安く買いたたこうとするなよ」

「クー」

クロスとフィルはアルトがだいぶ安く見積もったと決めつけているのか値段を見る事なく言う。

「いや、こんなもんだ」

アルトは平然と言い切るが、

「その剣はリシエルも見てるからな」

クロスがリシエルの名前を出すと、

「……あいつが見てんのかよ」

アルトはリシエルの名前を聞いて観念したのか買値をあげ、セフィはその値段でアルトに剣を売る。

story・51

「……これにするか」

クロスは剣を決めたようでそう言い、アルトの方を見ると、

「へえ、そうなんですか。やっぱり、クロスさんって凄い人なんですね」

「そりゃ、そうだろ。あの『剣の旅団』のパナシエ自らが勧誘するほどだからな」

セフィはアルトと話し込んでいる。

「あの、剣の旅団って有名なギルドなんですよね？」

セフィは先ほど出会ったパナシエの事をアルトに聞こうとした時、

「……お前はあまりおかしな事を言っな」

クロスはアルトの前に剣の代金を置きながら、セフィの質問を止める。

「何がですか？」

セフィはクロスが自分を止めた理由がわからずに聞き返すと、

「あー、あれだ。セフィちゃんを俺に取られると思ってた。あんまり、独占欲が強いとうざがられるぞ」

アルトはクロスとセフィを見ながらニヤニヤと笑う。

「えーと……」

アルトの言葉にセフィは少し顔を赤らめながらクロスの顔を見るが、

「それはない」

クロスは表情を変える事なく否定し、

「仮にも冒険者が聞く質問じゃない」

クロスは短くそう言うつと、

「でも、わからない事を聞くのは必要な事ですよね？」

セフィはクロスが否定したのに少しムツとした様子で言うつ。

「なあ、フィル。あの2人は結局、どうなってるんだ？」

アルトはクロスとセフィの様子を見て、2人に聞こえないようにフィルに聞くと、

「クー」

フィルはまだそんなところまでは言っていないと考えているようで首を振りながら返事をする。

「そうか」

アルトはフィルの様子に苦笑いを浮かべると、

「クロス、セフィの言う通りじゃないか。わからないから聞くのは必要だろ。セフィはどのタイプの冒険者を目指しているかはわからないんだ。情報を集めるのも冒険者には必要だろ」

セフィの行動は間違っていないと言い、

「と言う事でちゃんと教えてやるんだぞ」

クロスが置いた剣の代金を受け取り、

「ほら、用が終わったなら、さっさと出て行け。俺はいつまでもお前にかまっているほど、暇じゃない」

店に他のお客がきたようで、クロスとセフィを追い出すように手を振り、

「ああ」

「ありがとうございます」

「クー」

3人は店を出て行く。

story・52

「……じゃあな」

クロスは武器屋を出ると1人で歩き出そうとすると、

「ちょっと待ってください!？」

セフィは慌ててクロスの腕をつかみ、クロスを引き止める。

「……なんだ？」

クロスはセフィの行動にこれ以上は面倒な事に巻き込まれたくないと言った表情でセフィを見ると、

「あの……」

セフィは何か言いたげな表情でクロスの顔を覗き込む。

「……フィルがいるし、店までは戻れるだろ」

クロスはセフィが蒼き剣亭まで1人では戻れないと思っているようでそう言うが、

「ち、違いますよ。私は方向音痴じゃありません」

セフィは宿には戻れると頬を膨らませながら言うつと、

「あの、もう一カ所連れて行って貰いたいところがあるんですけど

……」

セフィはクロスに案内をしるという。

「自分で探せ」

しかし、クロスはセフィの言葉を却下すると、

「離せ」

セフィに向かい言うが、セフィはクロスの腕をしっかりとつかむと、

「良いじゃないですか。私の事を初心者冒険者って言い切ったんですから、先輩の冒険者であるクロスさんは私の面倒をみないといけません。私は下のものには上の人間がしっかりと指導すると教わりました」

セフィはクロスに向かい彼女が信仰している教会の教えなのか上位者は下位者の面倒をみるものと言うが、

「……俺には関係ない」

クロスはセフィの相手などこれ以上する義理はないと言う感じで言い、

「人は1人だ。誰かの面倒をみることなどただの偽善だ。自分の事は自分でやれ」

1人で歩き出そうとした時、

「……あなたはこの間の」

エルフの少女がセフィに声をかける。

story・53

「あっ!？」

セフィは声をかけてきた少女の顔を見て驚きの声をあげると、

「この前は名前も告げずに申し訳ありませんでした」

少女はセフィに向かい頭を下げた後にセフィがクロスの腕に抱きついているのを見て、

「……あの、私、お邪魔でしたか？」

何かを勘違いしているようで苦笑いを浮かべる。

「ち、違います!？ ぜ、全然、そんなのじゃないです!！」

セフィは慌てて少女の言葉を否定するとつかんでいたクロスの手を放し、

「そうですか？」

少女はセフィの態度に何かを感じながらもそう言つと、

「ここでお会いしたのも何かの縁でしょうし、私はシェリル＝ノーマッドと言います」

微笑みながら自分の名前を名乗る。

「セフィリア」ユノスです。セフィで良いです。この人はこの前話した……」

セフィは慌てながら自分の名前を名乗ると、クロスを紹介しようとするが、

「この前、お話しされていたクロスさんですよね」

シェリルはセフィとした話を覚えていたようでクロスの名前を呼び、

「で、この子がフィルちゃん」

フィルの頭を撫でる。

「クー」

フィルはシェリルの行動に嬉しそうに声をあげると、

「……シェリル、行くぞ」

シェリルの連れなのか漆黒のロングコートを羽織り深紅の瞳をした男がシェリルの名を呼ぶ。

「わかってるわ。ジョセフ」

シェリルは男の名前を呼ぶと、

「それじゃあ、また、縁があつたら」

3人に頭を下げた男の後を追いかけて行く。

(……あの男、こいつを見てたな)

クロスは男がセフィに鋭い視線を向けていたのに気づいていたよう
で、

「お前、あの男を知っているか？」

セフィに向かい聞くが、

「知りませんよ」

セフィはクロスの質問の意味がわからずに首を傾げる。

story・54

「……そうか」

クロスは先ほどのジョセフと呼ばれた男の視線に違和感を覚えながらもセフィの言葉に頷くと、

「何かあったんですか？」

セフィはクロスの態度に聞き返すが、

「気にするな。俺の気のせいだ」

クロスはセフィが以前に自分の放った殺気にも気がつかなかったせいもあるのかセフィを完全に鈍いと判断しているためかそう言い、

「俺は行くぞ」

セフィを置いて行こうとする。

「ちょっと待ってくださいよ!？」

セフィはクロスの行動に驚きの声をあげると、

「もう一カ所連れて行ってくださいって言ってるじゃないですか」

クロスの腕をつかむ。

「……あのなあ。俺にだってやる事があるんだ。いつまでもお前に

つきあってられるか」

クロスはセフィの相手をするのが面倒なため、自分にも用事がある
と言うとセフィの手を振りほどき言つと、

「どこに行くんですか？」

セフィはクロスに向かい聞く。

「お前は……いや、良い」

クロスはセフィの様子に何かを言おうとするが、何かを言つとセフィがついてくると判断したようで話すのを止め、

「俺は俺でやる事がある。自分の事は自分でしろ。フィル、面倒だ
ろうが相手をしてやれ」

フィルにセフィを任せると、

「クー」

フィルはクロスの言葉に頷き、

「じゃあな」

クロスは1人で歩き出す。

「……むう」

セフィはクロスの態度に少しムツとした表情をしながらも、

「フィルちゃん、お願いします」

フィルに向かい言い、

「クー」

フィルは大きく頷く。

story・55

「フィルちゃん、教会に連れて行って欲しいんですけど」

セフィはクロスと別れると教会へ行こうと思っていたようでセフィに向かい言っと、

「クー」

フィルはセフィの言葉に少し嫌そうな表情をする。

「フィルちゃん？」

セフィはフィルの態度に何かを感じたのかフィルの名前を呼ぶと、

「クー」

フィルはいつものように返事をし、パタパタとセフィを先導するよ
うに飛んで行き、

「フィルちゃん、待ってください」

セフィはフィルの後を追いかけて歩き出す。

「フィルちゃん、クロスさんはどうしてあんなに無愛想なんですか
？」

セフィはフィルに追いつくとクロスの先ほどの態度が少し頭にきて
いるようでフィルに向かい言うが、

「グー」

フィルはセフィの言葉に少し不機嫌そうに唸るとその場で先に進むのを止めてしまう。

「フィルちゃん？」

セフィはフィルの態度に何かを感じたのかフィルの名前を呼んだ後、

「……ごめんなさい。フィルちゃんには大切な人なんですよね」

人懐っこいフィルがクロスとともにいるのにはきちんとした理由があり、クロスがフィルに懐かれているのにも理由があると思ったようにフィルに申し訳なさそうに謝ると、

「クー」

フィルはセフィの申し訳なさそうな表情を見て、態度を元に戻し先に進み出したところで、

「……セフィリア？」

セフィの名前を呼ぶ声が聞こえて、セフィとフィルが声のした方向へ振り向くと教会へ所属している印である首飾りを首にかけた金髪の男が立っている。

story・56

「クラウド先輩!？」

男はセフィの神官時代の先輩であるクラウド＝ハルバートであり、セフィはクラウドの名前を呼ぶと、

「どうして、この街にいるんですか？ クラウド先輩は王都にいるはずじゃ」

クラウドがこの街にいる理由がわからずに驚きを隠せないのか聞き返す。

「少しは落ち着きなさい。セフィリア」

クラウドはセフィの表情に苦笑いを浮かべてそう言っていると、

「は、はい」

セフィはクラウドの表情を見て、恥ずかしくなったのか顔を赤くしながらうつむき返事をする。

「クー？」

フィルはセフィとクラウドのやり取りを見て、クラウドが何者かわからずに首を傾げていると、

「セフィ、どうしてモンスターが街中にいるんだい？」

クラウドはフィルを見て、フィルをモンスターだと判断したようで、腰に下げている剣の柄を握りフィルを睨みつけながらセフィに聞く。

「ク、クラウド先輩！？ ちょっと待ってください。フィルちゃんはモンスターじゃありません！！」

セフィは慌ててフィルとクラウドの間に割って入るが、

「グー」

フィルはクラウドから向けられた敵意に反応するかのようにクラウドを睨みつけながら唸り声をあげる。

「フィルちゃんも落ち着いてください！？」

セフィはフィルの反応にフィルをなだめようとして、フィルの名前を呼び抱き締めるが、

「グー」

フィルはセフィの腕の中に抱かれながらもクラウドから視線を逸らす事はない。

「……セフィリア、どきなさい。あなたは教会の教えを破る気ですか？ それは邪悪な存在です」

クラウドはフィルから自分に向けられている敵意にモンスターが教会の信仰する正義への敵対と決めたようでセフィに向かいそう言うのと鞘から剣を抜く。

story・57

「クラウド先輩、フィルちゃん、ダメです。2人とも落ち着いてください!？」

セフィはフィルとクラウドの様子に声をあげるが、

「グー」

フィルはセフィの腕からすり抜け、完全にクラウドを敵と判断したように唸り声をあげたままクラウドを睨みつけ返している。

「……私に逆らいますか」

クラウドはそう言うと、

「!？」

フィルとの距離を一瞬で縮め、フィルに斬りかかる。

「グー」

フィルはクラウドの攻撃がしっかり見えているようで後方に飛ぶと、クラウドへ向かい炎を吹き付け、

「……」

クラウドは冷静に右方向に跳び、フィルの炎を交わすと、

「モンスター風情が」

フィルが逆らう事に腹を立てているようで、フィルを蔑むように言い放ち、

「死になさい」

クラウドの魔法なのか彼の持つ剣の刃が白く染まり始めると、

「クラウド先輩、それはダメです!？」

セフィはその様子に声をあげ、クラウドを止めようとするが、

「……黙りなさい。セフィリア。モンスターをかばうなど、あなたにも再教育が必要です」

クラウドはセフィの言葉を聞き入れる気はなく、フィルを片付けた後にセフィにも話があると言う。

「……」

クラウドの剣の刃が真っ白に染まり光り輝き、クラウドはその剣でなぎ払うように空を斬ると、

「クー!？」

フィルに向かい空気を切り裂く真空波がフィルに向かい一直線に飛んで行く。

「フィルちゃん、避けてください!？」

セフィはクラウドの放った真空波の威力を知っているようでフィルに向かい叫ぶと、

「クー」

フィルは上手く真空波を交わして行くが、

「それは囿です」

「!？」

フィルが真空波を交わした先にはクラウドの剣が光っており、

「クラウド先輩、止めてください!？」

セフィはクラウドを止めようと駆け出すが、

「終わりです」

無情にもクラウドの剣はフィルに向かい振り下ろされる。

story・58

「フィルちゃん!？」

セフィはフィルに向けられた刃から目を逸らしてしまうと、

「あんた、こんなところで剣を抜く何を考えているんだ？」

「……なぜ、止める？」

フィルとクラウドの間に割って入った人間がいるようで、クラウドがその男を睨みつけながら言う。

「……人の連れに剣を向けるな」

男はクラウドに向け、冷たい口調で返し、

「フィル、いつも言ってるだろ。バカには構うな」

フィルの名前を呼び、クラウドなど相手をするなど言い、

「クー」

フィルはその言葉に戦闘体制を解き、頷く。

「……クロスさん？」

男の声を聞いて、セフィが逸らしていた目をフィルに向けると、そこにはクラウドの手をしっかりとつかみ、クラウドの剣を止めてい

るクロスが立っている。

「……どうして、お前は無駄に厄介ごとに巻き込まれるんだ？」

クロスはため息を吐きながらセフィに言う。

「えーと？ ……すみません」

セフィは申し訳なさそうにクロスに謝ると、

「……それで、どうして、あんたはフィルに剣を向けているんだ？」

クロスはクラウドを睨みつける。

「モンスターを排除して何が悪い。それをかばうならあなたも邪悪と判断させていただきます」

クラウドはクロスを睨み返すが、

「……これだから、バカは嫌いなんだ」

クロスはクラウドの様子にため息を吐きながらそう言つと、

「！？」

一瞬で剣を抜き、体勢を入れ替え、剣の切っ先はクラウドの喉元に向けられる。

「……何をするんですか？」

クラウドは自分が間違った事をしていないとは思っていないため、クロスを睨みつけたまま言うが、

「悪いな。俺にはあんたの味方をする義理はない」

クロスは視線を逸らす事なく言い、

「俺としてはあんたを殺しても良いんだが、あんたはここで命を落としても良いのか？」

クロスはクラウドなど相手ではないのか殺気を込めながらも淡々とした口調でクラウドに言うと、

「モンスターをかばうなど、あなたは何を考えているんですか？」

クラウドはクロスの質問に質問で返し、後方に跳ぶとクロスに向かい剣を向ける。

「クラウド先輩、クロスさん、止めてください！！」

セフィは2人の間に割って入り、2人を止めようとするが、

「……セフィリア、どきなさい。モンスターをかばうこの男も邪悪です。この男は生きていても平和の妨げにしかありません」

クラウドはフィルとともにクロスを邪悪と判断する。

「クラウド先輩、落ち着いてください。フィルちゃんはモンスターじゃないって言ってるじゃないですか。竜精って言う精霊の一種なんです」

セフィはクロスとクラウドの無意味な戦いを止めようとフィルがモンスターではないと言うと、

「竜精？」

クラウドはフィルを見て言い、

「クー」

フィルは胸を張る。

「フィルちゃんはモンスターなんかじゃないんですよ。クラウド先輩の勘違いなんです。ですから、こんな事を止めてください」

セフィはクラウドを止めようとクラウドが勘違いをしていると言うと、

「……わかりました。私の勘違いだったようです。申し訳ありませんでした」

クラウドはセフィの様子にセフィの言葉を信じたようで素直に自分の非を認める。

「……」

クロスはクラウドの態度に何も言う事なく剣を鞘に戻すと、

「失礼しました。私はセフィリアと同じ教会に属しています。クラウド〓ハルバードです」

クラウドはクロスに向かい名乗るが、

「……あんとなれ合つつもりはない」

クロスは基本的に教会に属している人間を信用する気はないため、クラウドに向かい言い、

「知り合いがいたなら、もう良いな。フィル、行くぞ」

クロスはフィルを呼び歩き出すと、

「クー」

フィルはセフィとの一時の別れを悲しむような表情をしながらもクロスと一緒に人ごみに消えて行く。

s t o r y ・ 6 0 (前書き)

ユニーク、2000を超えました。

ありがとうございます。

これからもよろしく願います。

(……)

セフィはクラウドに教会まで案内して貰うと実体のない神と言う偶像に向かい祈りを捧げている。

「……」

セフィは祈りを終え、立ち上がると、

「セフィリア、お勤めは終わりましたか？」

クラウドはセフィに聞きたい事があったようで祈り終えたセフィに声をかける。

「クラウド先輩、どうかしましたか？」

セフィはクラウドが自分に声をかけた理由がわからずに首を傾げると、

「セフィリアに少し聞きたい事がありました」

「何ですか？」

セフィにはクラウドが自分に聞きたい事に見当がつかないようで首を傾げたまま聞き返す。

「先ほどのクロスと言う人ですが、彼は何者ですか？」

クラウドは真面目な表情になり、セフィにクロスの事を聞きたいと言つと、

「どうして、クラウド先輩がクロスさんの事を知りたいんですか？」

セフィはクラウドがクロスの事を聞きたがる理由がわからずに聞き返す。

「……彼の目を見た時に彼の心の奥には何か闇のようなものを感じました。彼には救いが必要だと私は感じました」

クラウドはクロスの奥底に眠る『復讐』と言う闇を感じとったのか険しい表情で言つと、

「そうですか？」

セフィはやはり鈍いようで良くわからないと言つた表情で聞き返す。

「……セフィリア、あなたはもう少しいろいろ考えなさい」

クラウドはセフィの様子にため息を吐き、

「それで、どう言つた方なんですか？」

セフィに向かいクロスの事をもう1度聞く。

「えーと、クロスさんは少し……」

セフィは何かを思い出しながら話し始めると、

「……いえ、かなり無愛想で口も悪いですし、私の事を『お前』や『バカ女』とか呼んで名前で1度も呼んでくれた事もないです。後は人付き合いは極端に悪い」

セフィはクロスと旅をしていた事を思い出しているのかまくし立てるように言い、

「クラウド先輩、聞いてくださいよ。クロスさんって酷いんですよ。一緒にこの街まできてるのにホツクさんのパーティーにご一緒させていただいたんですけど」

この街までくる時のクロスの態度の悪さを思い出したようでクラウドに向かいクロスの事を話し出す。

story・61

「……なんですよ。酷いとは思いませんか？」

セフィはクラウドのクロスの事が聞きたいと言つ一言に一緒に行動していた間にたまったクロスに対する不満を小一時間ほど続けていると、

「……セフィリア」

クラウドはセフィの不満を聞くのに疲れたようでため息を吐きながらセフィの名前を呼ぶ。

「どうしました？」

セフィはまだ話し足りないのか、クラウドが自分の名前を呼んだ理由がわからないようで首を傾げながらクラウドに聞き返すと、

「……もう良いです」

クラウドはよほど疲れたのか肩を落としながら、もうクロスの話しは良いと言つ。

「どうしてですか？ まだまだ話す事がありますよ」

セフィはまだ話す事はあるようでクラウドに聞き返すが、

「……いえ、もう充分です」

クラウドはため息を吐きながら、セフィの話しを切ろうとしながらも、

「セフィリア、あなたはどうして、彼と一緒に行動しているのですか？」

セフィがクロスと行動を共にしている理由がわからずに聞くと、

「それは……」

セフィはクラウドの言葉に少し考え、

「口は悪いですけど、なんだかんだ言って、私の事を助けてくれましたし……」

セフィは野盗に拉致された時に自分を助け出してくれた時やクマに襲われた時の事を思い出したようで少し顔を赤らめながら言う。

「……そうですか」

セフィの様子にクラウドは優しげな表情で頷くと、

「そ、そんなのじゃないですう。あ、あれです。クロスさんみたいな態度がなっていない人には教会の教えをしつっかかりと叩き込まないといけませんから……」

セフィはクラウドが考えたであろう事を大慌てで否定する。

「まあ、良いですが」

クラウドはセフィの様子に苦笑いを浮かべるが、

「ですが、セフィリア」

真面目な表情になり、セフィの名前を呼ぶと、

「あなたにはあなたにしか進めない道があります。それまでにはまだ時間がありますがその事を忘れてはいけませんよ」

「……はい。わかっています」

セフィはクラウドの言葉に頷き、

「わかつているなら良いです」

クラウドはセフィの様子を見て頷くと、

「セフィリア、時間は良いのですか？」

セフィが長い間話しをしていたため、セフィに時間を確認する。

「あつ！？　すみません。私、もう行きます！！」

セフィはクラウドに向かい頭を下げ、教会を出て行く。

story・62

蒼き剣亭

「悪いね。セフィちゃん」

「……いえ、予約し忘れた私が悪いんですう」

セフィは蒼き剣亭に宿を取ろうとして戻ったが、セフィが教会で無駄話をしている間に宿はすでに満室になってしまっていたようで、セフィは部屋を取れなかったようである。

「他の宿を紹介してあげたいところなんだけど、今の時期はどこもお客さんが多いからね……」

ジルはセフィとクロスのやりとりを見ていたせいか、セフィをそのまま放置する事が出来ないと思っているようで困ったように笑いながら言っと、

「大丈夫です。どうにかしますから」

セフィはジルに心配をかけないように笑顔を見せて言い、

「失礼します」

ジルに頭を下げ、店を出て行こうとした時、

「カラン」

店のドアが開き、

「クー」

フィルがセフィを見つけるなり、勢いよくセフィに抱きつく。

「フィルちゃん!？」

セフィはフィルの登場に驚きの声をあげると、

「ジル、席はあるか？」

フィルからしばらく遅れてクロスが店に入ってくる。

「クロス、あんた良いところに着たね」

ジルはクロスの姿を見て苦笑いを浮かべると、

「……何だ？」

クロスはジルの表情に意味がわからずに首を傾げる。

「あんた、ホントに良いところな着たよ」

ジルはもう1度、クロスに向かい言つと、

「今晚は、フィルをこいつに預ける約束だったからな」

クロスはフィルをセフィに預けにきたようでそう言い席に座るが、

「それなんですけど……」

セフィは申し訳なさそうにうつむき、

「……今度はこのバカ女は何をしたんだ？」

クロスはこの状況に嫌な予感がしたようで頭を押さえながらジルに向かい言うつと、

「簡単に言うつと、セフィをあなたの部屋な泊めなさい」

ジルはクロスの部屋にセフィを泊めてやれと言う。

story・63

「……簡単に言い過ぎな上に意味がわからん」

クロスはジルの言葉に頭を押さえながら言うと、

「セフィちゃんの部屋がないのよ。あんたは部屋持ちだろ。女の子の1人くらい、2、3泊めてあげれるだろ」

ジルはクロスに経緯を説明するが、

「ここに部屋が無いなら、自分で探させろ」

クロスはセフィの間抜けさに頭が痛いようで頭を押さえながら言う。

「ですよね……」

セフィは流石にジルの提案には問題があると思っているのか頷くと、

「私、部屋を探しに行きます」

フィルを抱きしめながら肩を落とし、店を出て行くこととする。

「ちょっと、待ちなよ」

ジルはセフィを呼び止めると、

「クロス、この時期に宿をとる事が難しいのはあんたもわかってるだろ。それにセフィが宿も見つけられなかったら、明日の仕事に影響

響があるよ。あんたもプロなら仕事を第一に考えな」

クロスを一喝する。

「……いてもいなくても仕事に影響ないだろ」

クロスはセフィをただの人数合わせと思っているためかそう言つと、

「立ち寄つた街で宿を探すのは冒険者に必要な能力だ。それくらいはさせるよ」

ため息を吐く。

「それが出来そうな子なら、あたしも何も言わないよ」

ジルはセフィにそこまで求めるのは危険だと判断したようであめ息を吐くと、

「……それもどうなんだよ」

クロスはセフィを見て、もう1度ため息を吐く。

「良いかい。これはあかしからの命令。クロス、あんたはこれに従う義務がある。そうだろ？」

ジルはクロスに貸しがあるのかニヤリと笑つと、

「……わかつたよ」

クロスは頷き、

「良いんですか？」

セフィはクロスに向かい聞き返す。

「仕方ないだろ」

クロスが諦めたようにそう言った時、話しに聞き耳を立てていた店の中にいた他の冒険者達から茶々を入られるが、クロスは反応する事はないが、

「そ、そんなんじゃない？」

セフィは顔を真つ赤にしながら、他の冒険者達からかわれている事を否定してまわっている。

story・64

「あの、クロスさん……」

蒼き剣亭を出てしばらくすると、セフィがクロスの名前を呼ぶ。

「……なんだ？」

クロスはめんどくさそうに返事をする、

「怒ってますよね？」

セフィは今回は完全にクロスを巻き込んでいると言つ自覚があるようにで申し訳なさそうにクロスに聞く。

「当たり前だ」

クロスは短く返事をする、

「最初に言っておくぞ。今回限りだ。明日の依頼が終わったら、二度と俺に関わるな」

クロスはセフィにこれ以上巻き込むなと言つ。

「そうならないように努力します」

セフィは自信なさげに返事をする、

「あの、ジルさんが言っていたこの時期は宿が取りづらいつて言つ

のはどういう事ですか？」

話を変えようとしたのか、クロスに向かい聞く。

「……お前は本当に大丈夫か？」

クロスはセフィの言葉に呆れたようなため息を吐くと、

「もうすぐ、この街で祭りがあるんだ。それで露店を出す行商人や護衛依頼を受けた冒険者達が街に溢れ出す」

セフィに向かい説明するが、

「へえ、そうなんですか」

セフィは本当に知らなかったようで感心したように頷く。

「……ホック達の依頼者もこの祭りに参加するためにここに着ただぞ。本当に何も聞いてなかったのか？」

クロスはセフィの反応に呆れたように言うが、

「全然、知りませんでした」

セフィは恥ずかしげもなく答える。

「……もう良い」

クロスはセフィの言葉に疲れたようで冷たくそう言つと、

「無駄話はこちらまでにして、さっさと行くぞ」

セフィに向かい言い、歩く速度を速め、

「待ってください!？」

セフィはクロスを追いかけて、

「クー」

フィルは2人の後について行く。

story・65

「キレイに片づいてますね」

セフィはクロスの部屋に入るなり、部屋の中を見回して言うと、

「クー」

なぜか、フィルが胸を張り、

「まさか、フィルちゃんに片づけをさせてるんですか!？ クロスさん、酷いです!！」

セフィはフィルが部屋の整頓をしていると勘違いしたようで、クロスを非難するように言うが、

「……そんな訳ないだろ」

クロスはため息を吐く。

「違うんですか？」

セフィはクロスの言葉に少し不満げに言うと、

「部屋を持つてるとは言え、冒険者なんだ冒険前に片づけて行かないと大変な事になる」

クロスは『何か悲惨な状況』を思い出しているようでそうつぶやき、

「へえ、クロスさんでもそんな事をした事があるんですか」

セフィは過去のクロスの失敗を聞いたと思ったようにくすりと笑いながら言うが、

「……勘違いするな。俺はそんな事はしない」

クロスはセフィを睨みつけて言い、

「こここの前の所有者がしたんだ」

クロスは以前に見た悲惨な状況が目には浮かんでいるのか、ため息を吐く。

「前の所有者？ ……すいません」

セフィはクロスの言葉にまた何かを勘違いしたのか表情を曇らせると、

「勘違いするな。引退しただけだ。生きてると言うか、あいつは簡単に死にはしない」

クロスはセフィが勘違いしたであろう言葉を否定し、

「そうなんですか」

セフィは胸を撫で下ろす。

「ああ」

クロスは頷くと、

「ベッドはお前が使える」

自分がいつも使っているであろう寝室を指差し、

「明日は足を引っ張らないようにしろよ」

自分は居間に置いてあるソファで眠るつもりのようにソファに座るが、

「まだ、眠るには時間が早くないですか？」

セフィはまだ、クロスに聞きたい事があるのかクロスの向かい側のソファに腰を下ろす。

「昨日まで野宿だったんだ。疲れも残ってるだろ。お前はなれてないんだから、目には見えない疲れが溜まってるはずだ」

クロスは無愛想ながらもセフィの体調を心配しているようでそう言う、

「クー」

フィルもクロスと同じ意見のようでセフィに今日は休めと言いたげに頷き、

「わかりました。ですけど……」

セフィはクロスの意見には納得するが、

「……その前にお風呂貸してください」

長旅の汗を流したいと思ったねか少し顔を赤らめて言い、

「……フィル、案内してやれ」

クロスはセフィの言葉にため息を吐く。

story・66

「クロスさん、ありがとうございます」

セフィは風呂からあがると濡れた髪を拭きながらクロスに風呂を貸してくれた事のお礼を言うが、

「……」

クロスから返事はない。

「クロスさん？」

セフィはクロスから返事がない事にクロスの名前をもう1度呼びクロスに近づくと、

「……」

クロスは眠っているようである。

「寝てるみたいですね」

セフィはクロスの様子にそう言つと、

「……つんつん」

クロスの無防備な寝顔に何を思ったのか頬を指でつつくがクロスが反応する事はなく、

「起きませんね」

セフィは少しつまらなそうにそう言つと、クロスから借りた寝室に移動する。

「……フィルちゃんも寝てる」

セフィは寝室に入るとフィルを見つけて近寄るが、

「……クー」

フィルもすでに眠りについていてるようで気持ちよさそうに寝息をたてている。

「……つまらないです」

セフィはクロスもフィルも相手をしてくれない事が不満なようである言つが、

「私も寝ましょう」

起きていても仕方ないと思つたようで布団を被ろうとした時、

「あれ？」

セフィの目に焦げた聖印が目に入る。

「これって、聖印ですよね？」

セフィは神を信じていないと言つていたクロスが聖印を持っている

事に首を傾げながら、

「何で、クロスさんが？」

聖印を手にとると、

「これって!？」

クロスの持っていた聖印がセフィが所属している教会が邪教として
いる神を信仰している証である事に気づく。

story・67

「何で、クロスさんがこんなものを？」

セフィはクロスがなぜ、こんな邪悪なものを持っているのかわかるわけもなく、そうつぶやくと、

「クロスさん、どう言う事ですか!!」

寝室のドアを勢いよく開けるなり、眠っているクロスにつかみかかる。

「……うるせえ。静かにしろ。バカ女」

クロスはセフィの声に目を覚ますと機嫌が悪そうにそう言うが、

「クロスさん、これは何ですか？ 私にわかるように説明してください。クロスさんが邪教を信仰してるなんて……」

セフィはクロスの言葉を聞き入れる事なく、クロスが邪教徒なのか確認したいようで騒ぎ立てる。

「……黙れ」

クロスはセフィがうるさいせいか不機嫌そうに言うが、

「クロスさん、良いですか。こんな邪悪なものを信仰しては行けません!! こんな人を堕落させ……いふあい、いふあいに」

セフィが止まらないため、クロスはセフィの頬をつねる。

「……黙れと言ってるだろ」

クロスは起こされた事に機嫌が悪いのでそう言つと、

「それは父親の形見だ。それ以上でもそれ以下でもない」

不機嫌な口調で言う。

「お父様の形見？」

セフィはクロスの言葉に何かを思つたのか黙り込むと、

「……神なんてただの偶像だ。俺はそれを身を持って体験した。だから、神聖な神も邪悪な神も信じる気はない」

クロスはセフィを睨みつけながら言い、

「これ以上、騒ぐなら追い出すぞ」

セフィはこれ以上は話す事はない言う意味を込めて言い、

「……わかりました。これ」

セフィは納得はいかなさそうに頷くとクロスに聖印を渡し、寝室に戻って行く。

「……ちっ」

クロスはセフィの様子に彼女は教会が異教徒をどう扱っているかも知らない事に気づいているようで苛立ったように舌打ちをすると、

(……)

セフィから手渡されたクオの形見である聖印を握りしめる。

(…… あいつは何なんだ？ イライラする)

クロスの過去を知っている冒険者や知人は多々いるが、彼らはあくまでもクロスの個人の問題として引いてくれた部分もあるが、セフィは神を信仰する者としてクロスの過去に土足で踏み込んでこようとする。

それは彼女にとっては当然の事なのかも知れないが、他者と交わる事を良しとせず、父親の命を奪った者に対する復讐のために生きているクロスには考えられない事であり、彼女の態度がクロスには癪に障る。

(…… 自分の信じてる存在がどれだけ無情で残酷かも知らないやつが何を言うんだ)

クロスにも『神と言う偶像を信じている時期』は存在した。クオの元で彼から自然への理、神の教えを学んだ時期が……

クオと幼い自分が信仰していた『知識と好奇心の象徴である幼神』の教えを信じ学んだものの多くは現在も彼の中に存在している。

そうでなければ、小さな頃から冒険者と言う危険な道を生き残れるはずが無いのだから、彼は冒険者として生きるなかで多くの事を学んだ。

それはすべて『父親を奪った者達や彼の父親を見捨てた神への復讐』のために……

それは彼の『存在理由』である。

（あいつを見ていると昔を思い出すんだ）

自分が捨てた過去と同じように純粹に自分の信じる神を信仰し、真っ直ぐに進んで行くセフィに父親を失った日に決別した自分が重なる。

そんな苛立ちがクロスの中に満ちて行く。

（……くそ）

クロスはそんな苛立ちを抑えつけるように頭を掻いた後、考える事を無理やり止めようとしたのかソファアーに寝転び目を閉じる。

「……クロスさん、おはようございます」

朝になりセフィは起きると昨日の事もあるのか少し気まずそうにクロスに向かい挨拶をすると、

「……ああ」

クロスはまだ機嫌が悪いようでセフィを1度、見た後、短く返事をし直ぐに視線を逸らす。

(……やっぱり、怒ってますよね)

セフィはクロスの反応にバツが悪そうな表情をするが、

「昨日はすいませんでした」

自分が悪い事をしたと言う自覚はあるようで、クロスに向かい頭を下げる。

「……」

クロスはセフィの行動を見て、鬱陶しそうな表情をする、

「……早く準備をしろ。おいて行くぞ」

セフィに向かいそう言うが、その表情からはクロスの機嫌が直っているのかは読み取る事ができない。

「……はい」

セフィはクロスの様子に今は何を言っても話しをしてくれないと思
ったのか小さく頷くと、

「顔を洗ってきます」

うつむきながら洗面所へ向かう。

「……ちっ」

クロスはセフィを見て、昨日の苛立ちが再燃してきたのか舌打ちを
すると、

「クー……」

クロスの様子を見て、フィルが心配そうな表情でクロスの顔を覗き
込む。

「心配するな」

クロスはフィルの様子に少し怒りが納まったようで苦笑いを浮かべ、
フィルの頭を優しく撫でると、

「クー」

フィルはクロスに飛びつくように抱きつき、

「……くつつくな」

クロスはフィルの行動に疲れたように言う。

story・70

蒼き剣亭

「カラン」

クロス、セフィ、フィルの3人はエリトラとの待ち合わせ場所である蒼き剣亭のドアを開ける。

「おはよう。フィル、セフィちゃん、ついでにクロス」

3人を見て、ジルが声をかける。

「……ああ」

「クー」

クロスは機嫌が完全に治っていないようで不機嫌そうに短く頷き、フィルは朝の挨拶のつもりなのか大きく右手をあげ、

「ジルさん、おはようございます」

セフィはジルに向かい挨拶をした後、

「クロスさん、挨拶はしっかりとすべきです。クロスさんを怒らせたのは私であって、ジルさんは関係ないはずです」

クロスの態度に不満があるようでクロスに言い聞かせるように言う。

「……別に良いだろ」

クロスは面倒そうに言うと、

「良くありません！！ 朝の挨拶は大切なんです」

セフィは引く気はないようでクロスにくどくどと説法を始めだす。

「あれは良いコンビなのかい？」

ジルはクロスとセフィの様子に苦笑いを浮かべながらフィルに聞くと、

「クー？」

フィルはまだわからないと言う感じで首を振り、

「ああ、エリトラがおりてくるまでゆっくりとしとくかい？」

ジルはフィルの様子に苦笑いを浮かべたまま、フィルに彼が良く食べている干し肉を渡す。

「クー」

フィルはジルが出してくれた干し肉に嬉しそうに飛びつくと、

「セフィちゃん、クロス、何も頼まないなら外でやっておくれ」

ジルは2人に向かい言い、

「す、すみません!？」

セフィはジルの言葉に慌てて頷き、メニューを覗き込み、

「任せる」

クロスはジルに任せると言い、

「私もお任せでお願いします」

セフィは優柔不断なところがあるためか、メニューを決めきれなかったようにジルに任せると言つと、

「了解」

ジルは2人の様子に苦笑いを浮かべて頷いた後、調理を始める。

「……朝から、よくそんな重たいものが食えるな」

クロスとセフィの前に頼んだ朝食が出てきたところでエリトラが店の食堂に降りてくるなり、2人の目の前に山盛りで盛られている朝食を見て言っと、

「……」

セフィは出てきたものが予想外だったようでひきつらせた笑みを浮かべているが、

「……体は資本なんでね」

クロスはジルから出された朝食を平然と食べ始めている。

「遅かったね。エリトラもこれで良いかい？」

ジルは笑顔でエリトラに聞くが、

「……俺は軽めのものが良い」

エリトラはあんなものは食えないと思っているようで、ため息を吐くと、

「サンドイッチとコーヒー」

ジルに朝食を注文する。

「了解」

ジルは返事をして、エリトラの朝食を作り始めると、

「……眠い」

エリトラはまだ寝たりていないのか眠そうに言い、

「……やっぱり、2、3日休養にすれば良かったな」

この街に着いてすぐに仕事を入れた事を少し後悔しているように言う。

「まあ、これが終わったら、しばらく休めば良いだろ」

クロスはエリトラに向かい言っと、

「まあ、そうだな。昨日はあれからゆっくり寝たし、大丈夫だろ」

エリトラはセフィが店を出て行った後、すぐに眠ったようで固まった身体をほぐすように身体を伸ばしているとジルがエリトラの朝食を運んでくる。

story・72

「それで、もう1人は現地集合か？」

エリトラはパナシエの言っていたエリスと言う人物が見えないためクロスに向かい言っと、

「ああ、鍛冶師組合で合流する事にしてきた」

クロスの答えに、

「あれ？ してきたってどういう意味ですか？」

セフィはクロスの言葉に何かを感じたのか聞き返す。

「昨日、剣の修理を頼んでくるついでに話してきた」

クロスは当たり前のように言っと、

「そうか。任せて悪かったな」

エリトラは本来は依頼を受けた時点で自分もやらないといけない事だと理解しているようでクロスに礼を言う。

「……気にするな。付き合いのある人間がすべき事だ」

クロスは当たり前前の事しかしていないと言い、

「それで、出発はそれを食ったらで良いな」

エリトラに出発時間を確認すると、

「俺は構わんがあつちは良いのか？」

エリトラは苦笑いを浮かべながらセフィを見て言い、

「……」

クロスは朝食が全然減っていないセフィの様子を見てため息を吐く。

「……」

セフィは顔をひきつらせながらも少しずつだが朝食を食べていると言った表情でクロスに目で訴えているが、

「……早くしろ」

クロスはセフィの事など心配する気ははいたためか冷たく言い、自分の食事を終わらせる。

「……朝からあれを食いきるのかよ」

エリトラはクロスの様子に苦笑いを浮かべながら言つと、

「……そう言えば、お前らには仕事の前に挨拶させておいた方が良
いかな？」

何かを思つたのかそう言つ。

story・73

「……サラ」

何かを呼ぶと何もない空間が歪み出し、

「な、何ですか？」

セフィはその様子に驚きの声を上げた時、

「ポン」

その空間は小さな破裂音をあげ、

「紹介する。俺の相棒のサラマンダーのサラだ」

エリトラが破裂音のしたところを指差すと小さな赤いトカゲのようなものがある。

「……これが妖精か？」

クロスは噂には聞いた事があるようだが、実際に見るのは初めてなのか覗き込みながら言っていると、

「ああ、他にも呼び出せるのもいるが、一応は異界の門を開けてくるわけだから、呼びかけに応じてくれるのはその時次第だな」

エリトラは頷く。

「ゲー」

フィルはサラと呼ばれた妖精に何か対抗心を持ったのかうなり声をあげると、

「ぐる？」

サラはフィルがうなり声をあげている意味がわからないように首を傾げている。

「……フィル、止める」

クロスはフィルの様子にため息を吐きながらフィルを制止し、

「クー」

フィルはクロスに止められた事が恥ずかしいのか反省しているような声を出す。

「それで、セフィはいつまで食ってるんだ？」

エリトラはサラを抱き上げて自分の肩にのせ、セフィに向かい聞くと、

「……ジルさん、すいません。残します」

セフィはこれ以上は食べられないと思ったようにそう言い、

「そうだね。無理はしなくて良いよ」

ジルは苦笑いを浮かべて言う。

「……行くぞ」

「そうだな」

クロスはセフィの様子にため息を吐きながら言つとエリトラは頷くと、

「ま、待ってください!？」

セフィは2人の後を追いかけて行き、

「クー」

フィルは最後にジルに向かい挨拶をしてから店を出て行く。

story・74

鍛冶師組合

「依頼を受けてくださった冒険者の方達ですね」

クロス達が鍛冶師組合を訪れると組合長のところに通される。

「クロスくん、フィルちゃん、遅いですよ」

4人が案内された場所には組合長らしき男性と一緒にエルフの少女が待っており、エルフの少女はクロスとフィルと顔見知りのようで、クロスを見るなりクロスを非難するように言うが、その言葉には怒気が含まれているようには感じられない。

「……ああ。悪い」

「クー」

クロスは口では悪いと謝るが、その様子からは謝罪の念は見られないが、フィルはクロスの態度に申し訳なさそうに頭を下げると、

「まったく、クロスくんはフィルちゃんを少しは見習ってください」

エルフの少女がため息を吐いた時、

「エリス、立ち話はそれくらいにしろ。話が進められない」

男性が少女を制止し、

「初めての人間もいるから、自己紹介をさせて貰おう。この街の鍛冶師達の長をやっている。デュオ^①アーキスだ。それと今日、君達に同行する組合員のエリス^②ルディフィスだ」

「エリスです。よろしくお願いします」

組合長がセフィとエリトラに向かい自分と少女を紹介すると、

「は、はじめまして、セフィリア^③ユノスです」

セフィは慌てて頭を下げ、

「エリトラ^④ハルハザードだ」

エリトラは何かを見極めようとしているのか真っ直ぐにデュオとエリスを見て挨拶をする。

story・75

「こちらは依頼人なんだから、そんなに睨まないでくれないか」

デュオがエリトラに向かい言うが、

「悪いな。俺は仕事をする上で、依頼主をしっかりと見極めないといけない質なんだな」

エリトラは表情を変える事なく言い、

「……依頼人は嘘を吐くか」

クロスはエリトラの言いたい事がわかっているようではそりつつぶやくと、

「エリトラさん、ダメですよ。他人を疑うなんて良くない事です。他人を疑うと言うのは悲しい事です」

セフィがエリトラの言葉に文句を言おうとする。

「……お前は黙っている」

クロスはエリトラにはエリトラなりの考えがあるとわかっているためかセフィを黙らせると、

「ですけど、クロスさん」

セフィは矛先をクロスに変えようとするが、

「黙っている」

クロスは聞く耳は持っておらず、

「うー」

セフィは文句がありそうな表情でクロスを見る。

「まあ、エリトラなりの冒険者としての心得と言ったところか」

デュオはエリトラの様子に気分を悪くする事なく言うと、

「そう言う事だ。依頼主の本質を見極められないばかりに全滅するのはゴメンだからな」

エリトラは頷くと昔の事を思い出しているのか少し悲しげに笑い言う。

「確かにそうだな」

デュオは頷くと、

「こちらとしては別に隠す必要は感じていないし、今までの探索で手に入れた情報は全て伝える。エリスにもすでにわかっている事は伝えているからな」

エリトラにこちらは何も隠す事はないと言い切り、

「それでは依頼内容の確認を始めよう」

依頼内容を話し始める。

story・76

「依頼としては見つかった遺跡から聞こえる唸り声の正体を調べて欲しい。状況によっては唸り声の原因を排除してくれ」

デュオが依頼内容を簡単に説明すると、

「原因の排除？」

セフィは何かあるのかデュオの言葉を聞き返す。

「何か問題があるか？」

デュオがセフィに向かい言つと、

「い、いえ」

セフィは慌てながら首を振り、

「続けてくれるか。こいつには話すだけ無駄だからな」

クロスはセフィを気にしないで続けろと言い、

「ああ。遺跡は扉が封鎖されているせいか。入る事はできないんだが……」

デュオはクロスの言葉に納得したのか話を続けると、

「封鎖？ 遺跡の中から聞こえるんじゃないのか？」

エリトラはすぐに疑問を口にするが、

「ああ。唸り声は遺跡の手前から聞こえている上に遺跡は何かの力で封鎖されている。このまま採掘を続けていて何かあったらと考えると組合としてはそれを防がないといけない」

デュオは今までの調査で遺跡の中からはないとわかっているようでそう言い切る。

「って事は、近くに何かの巣があるって事も考えられるわけだな」

「後は単純に風の通り道だろうが……」

クロスとエリトラがエリスを見ると、

「さすがに風の通り道は判断できますよ」

エリスは後者は有り得ないと言い切り、

「まあ、行ってみないとわからない事もあるだろうし、現場に行くか」

「そうだな」

クロスとエリトラは現場を見たいと言う。

「えっ！？ もう行くんですか？」

セフィは探索依頼を受けるのは初めてなようで少しく不安そう

な表情をするが、

「……大丈夫だ。お前には何も期待していない」

クロスはセフィには何も期待していないと言い切ると、

「だな」

「クー」

エリトラは苦笑いを浮かべながら頷き、フィルも同様にセフィのいつもの行動を思い出しているのか頷く。

「そんな事ないです!？」

セフィは頬を膨らませながら言うと、

「まあまあ、みなさん仲良くしましょうよ」

エリスがセフィに向かい言い、

「それでは出発です」

右手をあげ、

「クー」

フィルはエリスの真似をするように右手をあげるが、

「……なんか、このメンバーに任せるのが心配になってきた」

デュオはため息を吐き、

「その意見には賛成だ」

パーティーのメンバーであるクロスはデュオの言葉に同意する。

story・77

「……なあ、エリス」

遺跡に向かう途中で何かを思ったのかエリトラがエリスの名前を呼ぶと、

「どうかしましたか？ エリトラさん」

エリスはエリトラに呼ばれた理由がわからずに首を傾げながら振り向く。

「お前の冒険者クラスは鍛冶師と精霊使いなんだよな？」

エリトラはエリスの冒険者クラスに何か疑問を感じているようでエリスに確認すると、

「そうですけど、どうかしましたか？」

エリスはエリトラが何を疑問に持っているのかすらわからないように首を傾げている。

「……なあ、クロス。俺の勘違いなのかも知れないが、一般的に鉱石を用いて金属製の武器を作る鍛冶師に精霊は心を開かないはずだよな？」

エリトラは彼の持っている常識からはエリスの冒険者クラスの組み合わせはおかしいと感じているようで、1番、話が通じそうなクロスに確認をすると、

「……ああ」

クロスはエリトラの疑問にはあまり興味がないようでただ短く頷き、

「そうなんですか？ エリスさん、どうしてですか？」

セフィは今初めてエリスの冒険者クラスの特殊さに興味を持ったようにエリスに質問をする。

「そんなにかかしいですか？」

エリスは首を傾げるが、

「……ああ。精霊使いは精霊の声が聞こえなくなるから、金属製の武具を装備する事を避ける」

エリトラは何も知らずに冒険者をしているセフィと常識から外れた発言をしているエリスを見てため息を吐くと、

「別におかしくないですよ。鉄などと言った鉱石は元々、土の精霊さんの力を借りて生まれたものですし、鍛冶師はその鉱石を火の精霊さんと水の精霊さんの力を借りて新しい力にするための職業なんですから」

エリスは彼女なりの鍛冶師についての考えを言うが、

「……それが通ればどの冒険者も精霊使いだろ」

エリトラは納得がいかないようで自分の頭を押さえる。

story・78

「エリトラ、言うだけ無駄だ」

頭を押さえているエリトラの姿を見て、クロスは以前にこのやりと
りを見た事があるのかエリトラを制止するが、

「……しかしな」

エリトラは納得がいかないためか首を傾げると、

「エリスは天然だ。それで納得しろ」

クロスは表情を変えずに言う。

「いや、そんなんで納得できるわけがないだろ」

エリトラはため息を吐き、

「クロスくん、わたしは天然さんじゃないですよ」

エリスはクロスの言葉に頬を膨らませて反論するが、

「……良いから納得しろ。遊んでて死にたいなら別だがな」

クロスはエリスの反論などは歯牙にもかけずに何かの気配を感じた
ようでそう言い剣を抜くと、

「グー」

フィルはすでに戦闘態勢になっているようで1点を睨みつけて唸り声を上げ出す。

「モンスターですか!？」

セフィはクロスやフィルが察知している気配すら感じれてないようで2人の様子に慌てながら剣を抜き、

「やれやれ。遺跡に着く前に戦闘か？　まあ、お手並みを拝見させて貰うかな」

エリトラは落ち着いた口調で、クロスとエリスを見てくすりと笑うが、

「……」

クロスはエリトラの言葉に返事をする事はなく、

「それじゃあ、わたしは支援に回りますから、前列はお願いしますね」

エリスはニコニコと笑いながらそう言い、クロスとセフィの後ろに移動し、

「は、はい」

セフィはすでに地に足がついていないのか声を裏返ししながら返事をする。

「……来るぞ」

クロスがそう言った瞬間、鞭のようになった何かがクロスに向かい飛んでくるが、

「……」

クロスは飛んできたものを表情を変える事なく交わすと、

「……落ち着け」

クロスに向けられた攻撃に驚いているセフィに向かい、愛想もなくただ一言だけ言うが、

「は、はい!？」

セフィの緊張がとけるわけもなく声を裏返したまま返事をする。

「ガチガチだな」

「そうですね」

そんなセフィを見て、後列に下がった2人は特に助けようとするわけでもなく頷いていると、

「……ヴァイパーか」

クロスは先ほどの鞭のようにしなつて攻撃をしてきたものを見て言い、クロスが先ほどまで立っていた場所にはクロスより少し大きな蛇が舌を出しながらこちらを見つめている。

「まあ、ヴァイパー程度なら、特に援護も必要ないよな」

「そうですね。クロスちゃんとフィルちゃんの2人がいればセフィちゃん1人くらい守れますね」

「いや、セフィは自分で自分の身くらい守らないとダメだろ」

現れたモンスターを見て、エリトラとエリスは完全にクロスとフィルにヴァイパーの相手を任せようとすると、

「な、何でお2人はそんなに冷静なんですか!？」

セフィはかなり慌てているようで声をあげるが、

「セフィ、覚えておけ。魔力を使い果たした魔法使い系の冒険者は体力のないただの一般人だ」

エリトラは魔力の消費を抑えたいようではつきりと言い切り、

「ですので、ガンバってください」

エリスはニコニコと笑いながらセフィに向かい手を振っている。

「そ、そんな!？」

セフィが2人の言葉に声をあげる中、

「……」

クロスは3人の会話に混じる事なく、ヴァイパーの攻撃を避けながら、

(……うるさい)

隣で繰り広げられている意味のない会話にため息を吐いていると、

「ぐるるるる」

ヴァイパーはクロスに攻撃が当たらないためかクロスと1度距離を取る。

「バカ女、避ける」

その行動にクロスは何かを感じたようでセフィに向かい言つと、

「……えっ!？」

ヴァイパーとセフィの視線が交差し、

「くしゃあああ」

ヴァイパーの身体が鞭のようになり、セフィを打ちつけようとする。

（大丈夫。これなら防げる）

セフィは慌てながらもヴァイパーの攻撃を防ごうとするが、

「セフィちゃん、後ろに跳んでください。それを受けてはダメです」

セフィの行動に危険を感じたようのでエリスから指示が出る。

「ふえっ!?!」

セフィはエリスの指示に驚きながらもなんとか反応し、後ろに跳ぶと、セフィの立っていた場所は土煙が上がり、その土煙のなかにはヴァイパーの目が不気味に光っており、セフィを睨みつけると、

（……）

セフィは自分が今の攻撃を受けてしまった時の事を想像してしまつたようで恐怖で顔をひきつらせ地面にへたり込んでしまふ。

「くしゃあああ」

そんなセフィを見て、ヴァイパーは大きく口を開き、鋭い牙でセフィの身体を喰いちぎろうと飛びかかってくるが、

「クー」

「下がれ、バカ女」

その瞬間を狙っていたのかフィルがヴァイパーに向かい炎を吹き、クロスは腰を抜かしたセフィのクビをつかむと力づくでセフィを自分の方に引き寄せると、

「くしゃあああ」

フィルの炎の直撃を受けたヴァイパーは自分の身体を焦がしている炎を消そうと身体を地面にこすりつけている。

story・81

「……少し落ち着け。この程度の相手に何もできないならこの場に捨てて行くぞ」

クロスはいつまで経っても冷静に戦況を見ようとしないセフィに向かい言くと、

「……ゆっくりと息を吸い込め」

セフィはクロスに言うとおりにゆっくりと息を吸い込み、

「しっかりと相手を見る。その動作1つ1つから次に何がくるかを判断しろ」

クロスはセフィに向かいそう言い、

「はい」

セフィは深呼吸をして少し落ち着いたのかクロスの言葉に返事をする。

「くしゃあああ」

フィルの炎を消し終えたようで、ヴァイパーはフィルの炎に腹を立てたようで標的をフィルに替えたようでフィルに飛びかかるが、

「クー」

フィルは空中で上体を入れ替えながら上手くヴァイパーの攻撃を交わして行く。

「フィルちゃん、凄い」

セフィはフィルとヴァイパーの様子を見て、感嘆の声を上げていると、

「見えてきたみたいだな」

クロスはセフィの様子を見て、

「行くぞ。間違ってもフィルに剣を向けるなよ」

フィルの援護に行くと言い、地面を蹴りフィルとヴァイパーの元に駆け出し、

「はい」

セフィはクロスの言葉にしっかりと返事をし、クロスの後に続いて行く。

「へえ、あれで結構、面倒見が良いんだな」

クロスとセフィの様子を見てエリトラが言つと、

「クロスくんは面倒見が良いですよ。いつも不機嫌そうな顔をしていますから、誤解されやすいですけど」

エリスは優しく微笑みながら言う。

「そうか？」

エリトラはエリスの表情に苦笑いを浮かべていると、

「本人は誉められるのが苦手ですから、からかわないであげてくださいね」

エリスはエリトラを見てそう言い、

「クー」

いつの間にかフィルがエリスの隣に移動しており、エリスの言葉に同意しているのかうんうんと頷いている。

「フィル？ お前、あつちは良いのか？」

フィルの登場にエリトラは驚いたようにフィルに聞き、

「クー」

フィルはもう大丈夫だと言いたげにクロスとセフィを指差し、フィルの指差した先には、

「……」

クロスはわざと自分のスピードを抑えながらヴァイパーの攻撃がセフィに向かないように引き寄せ、

「えい!!」

クロスへの攻撃で隙が出来たところでヴァイパーに斬りかかっているセフィの姿があるが、セフィの剣ではヴァイパーの身体に傷をつける事は出来ないでいる。

「噂通り、クロスは別格だな」

エリトラは攻撃があたらないギリギリの距離を見極めているクロスの様子に感心したように頷いていると、

「くしゃあああ!!」

ヴァイパーは攻撃のあたらないクロスより、自分の身体を斬り裂けなくてももちまちまと攻撃しているセフィを鬱陶しく思ったようで、攻撃対象をセフィに変えるが、

「……」

クロスはその時を狙っていたようで、クロスは一振りでヴァイパーの頭を斬り落とす。

「……」

クロスは剣を振り、剣に付着したヴァイパーの血を飛ばすと、

「……一刀両断かよ。セフィをやる気にさせる意味ってあったのか？」

エリトラがクロスを見てため息を吐く中、

「……やりました」

クロスがヴァイパーの頭を斬り落としたのを見て、緊張の糸が切れたのかセフィはその場にへたり込んでしまう。

「……先に進むのに最低限で使えるかの確認をただけだ」

クロスはセフィを気にするわけでもなく、エリトラのため息混じりの言葉にそう答えると、

「まあ、確かにいきなり強敵ってよりは良かったみたいだけどな」

エリトラはへたり込んでいるセフィを見て苦笑いを浮かべる。

「クロスくん、キレイに革を剥いてくださいね。へんなキズが付くと売値に影響がですから」

エリトラが苦笑いを浮かべながらセフィを見てみると、エリスの口

から今までの会話からまったく想像できない言葉が発せられ、

「……………ああ」

クロスはエリスの言葉に何か言うわけでもなく頷き、ヴァイパーの身体にナイフを突き立てヴァイパーの皮膚を剥いでいく。

「……………何をしてるんですか？」

セフィは目の前で行われている作業にセフィは啞然としてクロスとエリスに聞くと、

「……………見ればわかるだろ」

クロスはくだらない事を聞くなと言った感じで言い、

「わたしは使いませんが、ヴァイパーの皮膚は防具の材料にもなりますから、良い値段で売れるんですよ」

エリスは当たり前のようにヴァイパーの皮膚を売ると言う。

「ですけど、今は依頼の方を優先させないといけないんじゃないですか？　ここでこんな事をしていると調べる時間がなくなってしまいますよ」

セフィにはエリスの考えが理解できないようで先に進もうと言うが、
「前にも言っただろ。これは冒険者の正当な収入だ。冒険者と言え
ば聞こえは良いが俺達は定職も持たない身だ。収入になるものはし
っかりと集めないといけない」

クロスは冒険者と言う職業を理解していないセフィに向かい言うと、

「ですけど……」

セフィは依頼を受けている事もあるのか、早く先に進みたいと考えて
いるようで苦笑いを浮かべながら、エリトラに助けを求めるよう
な視線を送るが、

「……やるなら、速くしろ。お前が倒したんだから、決定権はお前
にあるんだ」

エリトラはクロスとエリスの行為に理解はあるようだが、待ってい
るのが苦手なのか少しイライラとした口調で言い、

「ああ」

クロスは当然のように頷きながら、素早くヴァイパーから皮膚を剥

ぎ取り、

「クロスくんが処理をしてくれると速い上に丁寧で助かります」

エリスはクロスの様子に感心したように言い、

「このお仕事が終わったら、武具の材料集めに付き合ってくださいね」

エリスはクロスに自分の仕事を手伝って欲しいと頼むが、

「断る」

クロスは即答でエリスの仕事は手伝わないと言い、

「お願いしますね」

しかし、エリスはクロスの返事など気にせずに笑顔で言い切り、

「それじゃあ、出発です」

クロスの返事など気にせず先に進み出す。

story・85

しばらく、5人が歩いていると、

「到着です」

エリスは鉱山の入り口らしき個所を指差して言う。

「今は発掘は中止されてるんだよね？」

エリトラがエリスに向かい鉱山の状況を確認すると、

「今は調査が終わるまで発掘は中止してます。遺跡も出てきましたし、唸り声の原因がわかったら、大規模な調査隊が派遣されるみたいですよ」

エリスは現在の鉱山の状況を説明する。

「発掘が中止されてるって事は中にモンスターも住み着いているな」

クロスは確認するように言うと、

「そうですね。発掘が中止されている鉱山は身を隠すには良い環境ですから、モンスターが身を潜めている可能性は高いです」

エリスは当たり前のように言い切り、

「本当ですか!？」

セフィはエリスの言葉に驚きの声をあげるが、

「当然だろ」

クロスは驚いているセフィを見てため息を吐きながら言った後、鉱山を覗き込み、

「エリス、通路はどこもこのくらいのスペースか？」

通路は思いのほか広く2人が並んで歩いていけるくらいのスペースがあり、クロスはエリスに他の通路のスペースを確認する。

「ところどころ狭い個所もありますけど、基本はこのくらいです。鉱石を運ばないといけないですから、考えられる限り頑丈に作ってありますよ」

エリスはクロスの質問に答えると、

「なら、パナシエの言った通り、クロスとセフィが前で俺とエリスがその後ろ。フィルが最後尾だな」

エリトラは自分でも通路を確認して言い、

「そうですね。フィルちゃんが後ろを警戒してくれれば安心できます」

エリスはエリトラの意見に同意し、

「クー」

フィルは任せると言いたいのか右手で胸を叩き、

「決まりだな。行くぞ」

クロスも特に反論もないようでそう言い、5人は鉾山の中に入って行く。

「暗いですね」

鉱山に入るとセフィは暗闇に入り、目がなれていないせいかさう言う
うと、

「……黙ってる」

クロスはセフィの反応が目障りなのかそう言い、持ってきたランタ
ンに灯りを点ける。

「ランタンか？ 鉱山なんだし通路に灯りを点けた方が楽じゃない
か？」

エリトラはクロスがランタンに灯りを点けるのを見て言うと、

「エリトラさんがその費用を出してくれるなら、直ぐに点けますよ」

エリスは笑顔でエリトラに言い、

「……冗談は止めてくれ」

エリトラはエリスの言葉に苦笑いを浮かべるが、

「エリトラさんが費用を出してくれるみたいですから、盛大にいき
ましょう」

エリスはエリトラの言葉を気にせず通路に灯りを点けようとし、

「クー」

フィルは灯りを点けるなら、任せろと言いたげに小さく火を吹き、

「あの、エリトラさんは無理だって言ってるんですけど」

セフィは苦笑いを浮かべながらはフィルとエリスに言うと、

「セフィちゃん、ノリが悪いですよ。先はまだ長いんですから、楽しくいきましょうよ」

「クー」

フィルとエリスはセフィにノリが悪いと言うが、

「お前らのノリで大赤字を出したくねえよ」

エリトラは額に青筋を浮かべながら、フィルとエリスに言う。

「エリトラさん、冗談なんですから怒らないでくださいよ」

しかし、エリスはエリトラの様子を気にする事なく言うと、

「……無駄話はそれくらいにしろ」

クロスはいつまでたっても先に進もうとしないメンバーに向かい言い、

「行くぞ」

ランタンを前に出して歩き出し、その後ろを4人は追いかけて歩く。

「あの、探索はしないんですか？」

一直線に鉱山を進んで行くクロスを見て、セフィが首を傾げながら質問するが、

「……黙れ」

クロスはセフィの質問に答えるのが面倒になっているのか冷たく言い放つと、

「クロスくん、質問にはきちんと答えましょうね」

エリスは笑顔でクロスを叱りつけるように言い、

「セフィちゃん、良いですか。探索依頼は新たに発見された遺跡の時は探索して見つけたものは冒険者が持ち帰って良い事になります。これは暗黙のルールです」

セフィに説明を始め出す。

「はい」

セフィはエリスの言葉に頷くと、

「今回は鉱山の奥から響く唸り声の調査です。良いですか。ここは鉱山なんです。鍛冶師組合の人達が鉱石を発掘するための場所なんです」

エリスはここが鉱石だと言っ事を強調する。

「それはここで見つかったものは鍛冶師組合のものって事ですか？」

セフィ首を傾げると、

「それもありますけど、基本的に鉱山からは冒険者さんの収入になるようなものはあまりありません。鉱石を持って帰っても、加工しない限り、収入にはつながりません。それに加工するには……」

「鍛冶師組合を通さないといけない？」

セフィはエリスの説明の意味が理解できたようでエリスに聞き返し、

「正解です。良くできました」

「クー」

エリスは笑顔でセフィに向かい言い、フィルはセフィを誉めるように声をあげる。

「……突っ込みが不足してるな」

セフィ、フィル、エリスのやりとりにエリトラはため息を吐くが、

「……気にするな」

クロスはすでに諦めているのか3人の様子を気にする様子はない。

「……はあ」

エリトラはパーティーのまとまりのなさはこの依頼を受けた事を後悔しはじめたのかため息を吐くと、

「エリトラさんは知ってたんですか？」

セフィは何を思ったのか、エリトラにエリスが説明してくれた事を知っていたのか聞く。

「……まあ。それくらいはな」

エリトラはセフィの質問に少し間がありながらも答えると、

「やっぱり、常識なんですね」

セフィは自分だけが知らなかったと思い少し落ち込んだ様子でうなだれるが、

「エリトラさんは知らなかったみたいですね」

「クー」

「エリトラは冒険者よりは傭兵に近いからな」

エリトラの間に3人はセフィがエリスに教わっていた事をエリトラが知らなかったと判断したようでセフィに聞こえないように言い、

「……黙ってるよ」

エリトラは3人を睨みつける。

「……ああ」

エリトラの言葉にクロスは別に誰かに話す必要もないと思っているのか頷くが、

「エリトラさん、1つ貸しです」

エリスはにっこりと笑いながらエリトラに言うと、

「……わかった」

エリトラは何かを諦めたかのように頷き、

「鍛冶師ってのは職人だと思ってたんだけどな。ちゃっかりしてやる」

エリスの事を皮肉混じりに言うが、

「鍛冶師も商才がないとつとまりませんから」

エリスはにっこりと笑ったまま言う。

「……………はあ」

エリトラがエリス表情を見て、ため息を吐いた時、

「バカ女、いつまでも落ち込んでいるな。くるぞ!!」

クロスは何かの気配を察知したようでセフィに向かい声をあげ、

「ふえっ!?!」

セフィはクロスの声に驚いたような声をあげ、剣を構えた時、「バタバタ」と音をたてて何かがこちらに向かい飛んでくる。

「な、なんですか?」

セフィはその音に不安なようで声を裏返しながら言うと、

「まあ、この暗闇だしな。あいつ何だろうけど」

「……………そうだな」

クロスとエリトラは飛んでくるものに予想がついているようで、慌てる事なく戦闘の準備を始め、

「ど、どうしてそんなに冷静なんですか!?!」

その様子にセフィが声をあげるが、

「……黙っている」

クロスはセフィの言葉を切り捨て、

「くるぞ」

そう言うと、ランタンの灯りにセフィと同等の大きさのコウモリが3匹照らし出されている。

「お、大きすぎませんか？」

セフィは声を震わせながら言うが、

「これくらいだと小さい方ですよ」

エリスはこの大きさのコウモリを見慣れているのか落ち着いた様子で言い、

「まあ、それでも充分でかいけどな」

エリトラは苦笑いを浮かべながらそう言うと、

「さすがにランタン片手じゃ戦い難いよな」

クロスが持っているランタンを見て言う。

「それじゃあ、わたしが灯りを点けましょう」

エリスは灯りをつけると言い、

「光の精霊さん、力を貸してください。『ライト』」

エリスは精霊魔法を使用したようでエリスの魔法で通路内は昼間の
ように明るくなり、

「セフィちゃん、捕まると巢に運ばれてコウモリさんのご飯になっ
てしまいますから、気をつけてくださいね」

エリスはこれで今回の戦闘でのやるべき事は終わったかのようにセ
フィに言つと、

「そうなんですか!？」

セフィはエリスの言葉に声を上げた時、

「クー!？」

コウモリの1匹はセフィを捕まえようと爪をセフィに向け飛んでく
る。

「……やれやれ」

セフィに向かい飛んで行く蝙蝠とそれを見て慌て先ほどのクロスのアドバイスを忘れているセフィを見てエリトラはため息を吐くと、

「サラ、助けてやれ」

肩の上のっているサラに向かい言い、

「ぐる」

サラはエリトラの言葉を理解しているのか頷き、

「ふえっ!？」

サラから炎の渦が放たれ、炎の渦はエリトラの前方にいるセフィを避け、セフィに向かって飛んできた蝙蝠に向かい飛んで行く。

「後は自分でやれよ」

後方から飛んできた炎を見て、目を白黒させているセフィにエリトラは苦笑いを浮かべながら言つと、

「は、はい」

セフィは声を裏返ししながら返事をするなか、

「……」

クロスは残りの2匹の蝙蝠を相手にしている。

「……」

蝙蝠2匹は各自クロスを捕らえようと爪を向けながら、クロスに向かい飛んでくるが、

「……」

その攻撃は1匹ずつ単体で行われるためか単調であり、蝙蝠の爪はクロスを捕える事はできない。

「クロスくんは大丈夫そうですね」

エリスはクロスの姿を見てそう言うと、

「そうだな。クロスの体捌きはたいしたものだ。あれだけ動ける奴は戦場にもいなかったぞ」

エリトラはエリスの言葉に頷き、

「それで、あっちはどうするんだ？」

苦笑いを浮かべながら、蝙蝠1匹を相手にてんばっているセフィを見て言う。

「そうですね。相手が上から襲ってくるのもあるのでしょうか。完全に浮足立っていますからね」

エリスは苦笑いを浮かべながら言うが、

「わたしが相手をして来ても良いんですけど、この通路じゃセフィちゃんと入れ替われもしないですし」

通路の広さからはセフィと入れ替わる事も出来ないと言い、

「無理な援護はセフィちゃんに当たっても困りますしね」

先ほど、セフィに当たりそうな攻撃をしたエリトラに向かい言う。

「そりゃあ、悪かった」

エリトラはエリスの言葉に口だけで謝ると、

「仕方ない。俺がやるか」

ため息を吐き、

「……我が名、エリトラハハルハザードの名にて命ず……」

エリトラはサラを呼んだ時とは異なり、真剣な表情をして魔法の詠唱を始めるとセフィが相手をしているコウモリの後ろが徐々に歪んで行く。

「へえ、あれが妖精魔法ですか。ホントに妖精界との門を開くんですね」

エリスはエリトラの使用する妖精魔法を始めて見るようで感心して

いると、

「……来い」

エリトラの魔法の詠唱が終わったようで歪んでいた空間から30cmくらいの背中に羽をつけた人型の妖精が現れる。

「……頼むぞ」

エリトラは現れた妖精に微笑みかけると、妖精にはエリトラの言葉が伝わっているようで、風の刃が蝙蝠を襲い、蝙蝠は妖精の魔法で羽根が傷つけられ空中でバランスを崩す。

「これくらいの援護で良いだろ」

エリトラは蝙蝠がバランスを崩したのを見て言うと、

「そうですね」

エリスは頷き、

「セフィちゃん、落ち着いてください。さっき、クロスくんが教えてくれた事を思い出せば簡単に倒せる相手ですから」

蝙蝠がバランスを崩した事に何があったかわからないような表情をしているセフィに言う。

「は、はい!？」

セフィはエリスの言葉に声を裏返ししながら返事をする、

「さ、最初に深呼吸をして……」

セフィは先ほどのヴァイパーとの戦闘を思い出そうとその時の事を慌てて思いだそうとするが、やはり慌てているように深呼吸をする事はなく、

「セフィちゃん、深呼吸です。大きく息を吸って、ゆっくりはく」

エリスは苦笑いを浮かべながらセフィに言い、

「すー、はー」

セフィはエリスの言葉に深呼吸をする。

「えーと、そして、相手の動きをしっかりと見て次の動きを予想する」

セフィは一呼吸置いた事で冷静になったのか、クロスのアドバイスを思い出したように蝙蝠に向かい体勢を整えるとしっかりと剣を構え、

「えい」

エリトラの妖精魔法でバランスを崩している蝙蝠に斬りかかって行く。

「こうやって、落ち着いてると割と堂に入った剣を使うんだけどな」

エリトラはセフィが攻撃に転じたのを見て苦笑いを浮かべながら言

うと、

「たぶん、セフィちゃんはしっかりと剣の訓練を受けてると思いますよ。圧倒的に戦闘経験が少ないだけだと思います」

エリスはセフィの剣すじを見て言う。

「そうか？ まあ、人は殺し慣れてないだろうな」

エリトラに取つての戦闘は戦争を指差しているようで首を傾げると、

「セフィちゃんは神官さんですから、あまり生物の生死に関わる戦いはしてないでしょうしね」

エリスは苦笑いを浮かべながら言うが、

「神官こそ、人の生死に関わる戦いしかしてないだろ」

エリトラはエリスの言葉に納得がいかないような表情で言う。

「確かにそうですけど、セフィちゃんは本当に教会の闇の部分を知らないみたいです。知ってたら、あの子はあんな良い子に育ちませんよ」

エリスは苦笑いを浮かべたまま、柔らかくセフィを世間知らずだと言うつと、

「世間知らずね。いいとこの娘なんだろうな」

エリトラはエリスの言葉に納得したように頷き、

「あいつはなんのために冒険者になったんだ？」

セフィが冒険者を始めた意味がわからないようで首を傾げる。

「さあ、それはわかりませんし、それは聞かないお約束です。人にはそれぞれ進むべき道がありますから、エリトラさんだって冒険者になった理由があるでしょう？　今は聞くほど親しい仲ってわけでもないでしょうし」

エリスは彼女なりに考えがあるようで、にっこりと笑いながらエリトラに向かい言っていると、

「まあ、確かに」

エリトラはエリスの言葉に苦笑いを浮かべ、

「縁があれば、聞く機会もあるだろ」

エリスの言葉に納得したようで頷き、

「それを知るのは神様のみです」

エリスはうんうんと頷きながら言い、

「神様ねえ」

エリトラは『神』と言う言葉に苦笑いを浮かべ、

「エリスは神様って奴を信じてるのか？」

エリスに聞き返す。

「わたしにそれを聞きますか？」

エリスはエリトラの質問に苦笑いを浮かべると、

「エルフで精霊使いだからな」

エリトラは自分の質問に苦笑いを浮かべ、

「あまり、エルフで神様を信仰する人はいませんね。まあ、『神の奇跡の効果がある』程度には信じてますよ」

エリスはエルフと言う種族自身があまり神を信仰しないと言い、

「エリトラさんはどうなんですか？」

エリトラに聞き返す。

「俺は信じてるぞ。ただ……」

エリトラは神を信じると言った後、

「……神は何よりも無慈悲で残酷だな」

何か昔の事を思い出しているのか皮肉を込めたように言うと、

「……まあ、人生いろいろです」

エリスはエリトラの言葉にクロスに視線を送りながら言い、

「まあ、そう言う事だな」

エリトラは苦笑いを浮かべ、

「少なからず、冒険者なんて職業についていれば、神にすぎる気持ちと神って存在を認めたくない気持ちの狭間にいる事は確かだな」

自分と同じような考えの人間が冒険者の中には多いと言っ。

「そんな中で、セフィちゃんは何を思うんですかね？」

エリスは視線の先をセフィに移しながら言っ。

「さあな。それこそ、神のみぞ知るって感じだろ？」

エリトラはため息を吐きながら言い、

「そうですね」

エリスは苦笑いを浮かべながら頷く。

「……いつまでも無駄話をしているな」

エリトラとエリスが話し込んでいる間にクロスとセフィはコウモリを撃退しており、クロスは呼吸を乱す事なくエリトラとエリスに言う。

「ん。ご苦労様」

エリトラはクロスに軽く言っが、

「……別に苦労などしていない」

クロスは表情を変える事なく言い、

「行くぞ」

コウモリと戦う時に置いたランタンを持ち上げ歩き出すとする。

story・92

「ま、待ってください」

セフィはコウモリとの戦闘がきつかったようで肩で息をしながら言う、

「クー」

フィルはセフィの意見に賛成し、

「そうですね。一旦、休憩にしましょう。これで過半数です」

エリスはクロスに言い、

「……」

クロスはその様子を見て、何を言っても無駄だと判断したようでラントンを置いて通路の脇にある岩に腰かける。

「お前、無愛想な面してる癖に甘いよな」

エリトラはクロスの様子に苦笑いを浮かべながら言つと、

「……昔、世話になった人の教えなんだ」

クロスは面倒くさそうに言い、

「……」

腰にかけてある道具袋から、薬草らしきものを取り出し、腕の小さく皮膚が切れている箇所貼る。

「ケガか？ 薬草なんかで治療しないで、セフィがいるんだ。治して貰えば良いだろ」

エリトラはクロスの様子を見て言うと、

「必要ない」

クロスはセフィの治療魔法はいらないと答える。

「クロスさん、ダメですよ。何があるかわからないんですから、回復はしっかりとしておかないと」

セフィは息が整ってきたようで、クロスに向かい言うが、

「……何度も言わせるな。必要ない」

クロスはセフィの言葉が鬱陶しいようで、冷たく言う。

「ダメです。それにそのキズは私のせいですし……」

セフィはエリトラとエリスが話し込んでいる間にクロスに庇って貰っていたようで、クロスの腕のキズは自分のせいだと言い、責任を持って治療したいと言うが、

「何度も言わせるな。必要ない」

クロスはセフィの治療を受ける気はない。

「セフィちゃん、クロスくんのキズはかすりキズですし、先に何かあるかもわかりませんから、治療魔法は止めておきましょう」

エリスはクロスに治療魔法が効果がない事を知っているようで、クロスとセフィの様子を見て苦笑いを浮かべながら言うが、

「ですけど……」

セフィは納得がいかなさそうな表情で言う。

「……」

クロスはセフィの様子を気にする事なく、自分の治療を続けていると、

「なあ、治療魔法を受けたくない理由でもあるのか？」

不意にエリトラがクロスが治療魔法を拒否しているのに何か疑問を感じたのかクロスに向かい聞く。

「……」

クロスはエリトラの疑問に表情を変えことなく、自分のキズの治療を終えると、

「……俺は神を信じていない」

エリトラに向かい言い、

「そう言う事か」

「また、そんな事を言ってるんですか？ そんな事を言っていないでキズを見せてください」

エリトラはクロスの一言で、全てを理解したようで頷くが、セフィはクロスの言葉では『クロスに神の奇跡は与えられない』事に気づいていないようでクロスにキズを見せろと言うが、

「必要ない」

クロスは再度、セフィに必要なと言う。

「ですけど」

しかし、クロスが治癒魔法を受けないのに納得がいかないセフィは引かず、

「まあまあ、セフィちゃん、今回は無しの方で魔力は貴重ですしね」

「クー」

フィルとエリスがセフィをなだめ始め、

「お前もその若さですいぶんと難儀な道を歩いてきたんだな」

エリトラはクロスの肩を叩く。

「……叩くな」

クロスは鬱陶しそうにエリトラの手をはたき、

「それで、いつになったら出発できるんだ？」

立ち上がり、休憩はここまでにしろと言い、

「そうだな。あれだけ騒げるなら行くか」

エリトラはセフィをなだめているフィルとエリスを見て苦笑いを浮かべて言うと、

「そうですね」

「クー」

フィルとエリスは頷く。

story・93

5人は休憩を終えると特に何も起こる事なく、発見された遺跡までたどり着き、

「これが遺跡ですか？」

セフィは鉱山の通路の1部開けたところに見える、遺跡の入口らしきものを見て驚きの声をあげているが、

「今は特に唸り声ってものは聞こえないな」

「そうですね」

クロス、エリトラ、エリスの3人は調査依頼にあった、唸り声が聞こえないか耳を澄ませている。

「……」

セフィは誰も反応してくれないのを見て、慌てて3人と同じように耳を済ませるが、

「……」

セフィにも唸り声のようなものは聞こえず、

「……何も聞こえません」

セフィは何をして良いかわからないようではつりとつぐやくと、

「邪魔をするならそこら辺で静かに座っている」

クロスはセフィが目障りなのか、セフィに向かい言い、

「……」

セフィは先ほどの治癒魔法の件から、クロスの機嫌がさらに悪くなっている事に気づいているようで、肩を落としながら黙り込み、

「クー」

フィルがセフィを励ますようにセフィの肩を叩き、

「フィルちゃん」

セフィはフィルの優しさに感動したようでフィルの名前を呼びながらフィルを抱きしめると、

「クー」

フィルはセフィの腕の中がお気に入りのように喜び始めるが、

「黙ってる」

クロスから2人に向かい冷たい声が飛び、

「……はい」

「……クー」

2人はクロスの言葉に小さく返事をする。

「そこまで言わなくても良いんじゃないか？」

エリトラは苦笑いを浮かべながらクロスに向かい言うと、

「騒がれたり、下手に動き回って、手掛かりを潰されてたまるか」

クロスはセフィが調査の邪魔にしかならないと言い切るが、

「ですけど、今回は冒険者クラスにシーフを持つてる人もいませんし、人手は必要だと思いますよ」

エリスがセフィに助け船を出す。

「……だよな」

エリトラはエリスの言葉に苦笑いを浮かべて同意した時

「……ん？」

クロスはエリスの言葉など気にするような素振りをみせずに通路の壁を調べ始めている。

「クロスくん」

エリスはそんなクロスの様子にため息を吐きながらクロスを呼ぶが、

「エリス、ちょっと、ここを見てくれ」

クロスは壁に何かを見つけたのかエリスを呼ぶ。

「何かありましたか？」

エリスはクロスに近づくと、

「前の調査時には通路の壁はどんな風に調査した事になってる」

クロスはエリスに以前に行われている調査の事を確認し、

「以前の調査では壁に関しては特に精霊使いの人が魔力の確認をしてもおかしいところはありませんでしたし……」

エリスは持つて来ていた調査資料を広げると、

「その資料にはこれについて書いてあるか？」

クロスは自分が気づいた壁の異変を指差し、

「あれ？」

エリスは資料とクロスが指差した個所を見て首を傾げる。

「何ですか？ これ？ 特に可笑しい魔力もないのに？」

エリスは首を傾げたまま言つと、

「何があつたんです？」

セフィがエリスの後ろから、覗きこむ。

「ここ、何ですけど」

エリスはクロスに魔力を見てくれと言われた個所を指差し、

「魔力に異常は感じられないんですけど」

エリスは壁を押すと、

「えっ!？」

エリスの腕は壁の中に消えていく。

「こ、これはどういう事ですか?」

セフィは目の前でエリスの腕が壁の中に消えて行くのを見て驚きの声をあげると、

「ここの壁は何か特殊な作りになっているのだとは思ってますけど、魔法以外の力で行われているんです」

エリスは今の状況を確認するように頷きながら言う。

「これは鍛冶師組合は知らない事なんだよな?」

クロスは以前の調査でこの特殊な壁の事は調べられていないかエリスに確認をすると、

「ちょっと、待ってください。今、資料を確認し直しますから」

エリスは持つてきていた、今までの調査をまとめた資料を確認しはじめた時、

「ぐおおおお」

壁の奥から唸り声が響く。

「ひい!？」

セフィは鉱山内に響く唸り声に驚きの声をあげると、

「どうやら、原因はこの奥みたいだな」

「ああ」

唸り声が聞こえた壁を見つめてエリトラが言い、クロスはその言葉に頷き、

「行くか？」

先に進もうと言うが、

「本当ですか!？」

セフィは唸り声を聞いて不安げな表情で聞き返し、

「当たり前だ」

クロスは当たり前前の事を言うなと言った表情で言い切る。

「まあ、今の唸り声の正体をつかむのが依頼だしな」

エリトラはセフィの様子に苦笑いを浮かべながら言うと、

「確かにそうなんですけど」

セフィは不安げな表情のまま、壁を見つめた時、

「ぐおおおお」

再度、壁の奥から唸り声が響く。

「まあ、ここに居ても仕方ないですし。わたしたちは調査に来てから大分たちますけど、今まで唸り声が聞こえなかったのに、少し引つかかるところがありますけど、調べない事には始まりませんし、調べに行つて、絶対に敵わない相手だと思ったら退却すれば良い訳ですし」

エリスは原因に何かを感じながらも、セフィに向かい言うと、

「行かないと言うなら、ここに1人でいろ」

クロスは怯えているセフィは邪魔だと言い切ると1人で壁の中に消えて行き、

「おい。1人で行くなよ」

エリトラはクロスの行動にため息を吐く。

「セフィ、いつまでもここに居ても仕方ないぞ。ここから進まないって言うなら、クロスが昨日から言ってるように冒険者も止めた方が良い」

エリトラはセフィに言うと、クロスの後を追いかけて行く。

「セフィちゃん、行きましょう」

エリスはセフィの前に手を差し出すと、

「何があるかはわかりませんが、今回の依頼は1人で受けたわけじゃないんですから、何かあったら、みんなでフォローしますから」

優しく微笑みかけて言い、

「クー」

フィルは自分を守ると言いたげに胸を叩き、

「お、お願いします」

セフィはエリスの腕をつかみ、

「それでは行きましょう」

「はい」

3人は壁を通り抜ける。

「お、ちゃんとしてきたか」

エリトラは少し遅れながらも後をついて来たセフィを見てそう言う
と、

「はい。ご迷惑をかけるかも知れませんがよろしくお願いします」

セフィはクロスとエリトラに向かい頭を下げる。

「……」

クロスはセフィの様子を気にする事なく、ランタンを前に出し奥を
覗き込んでいると、

「クロスさんもよろしくお願いし……ふえっ!？」

セフィはクロスに向かい頭を下げようとしてクロスの隣まで行つて
頭を下げようとするが、足元は今までの整備された通路ではないた
め、バランスを崩して倒れ込みそうになる。

「……お前は何がしたいんだ？」

クロスは表情を変える事なく、セフィの腕をつかんで、セフィが倒
れるのを防ぐと、

「今までの通路とは違って天然の通路だ。さっきまでの感覚で歩
くとケガをするぞ」

無愛想な口調のままだが、セフィに向かい注意しろと言い、

「は、はい」

セフィはクロスの言葉に慌てながらも返事をする。

「それじゃあ、進みましょうか」

エリスはクロスとセフィの様子を見てクスクスと笑うと先に進むう
と言うが、

「待て」

奥をうかがっているクロスがエリスの言葉を静止し、

「何か気になる事でもあるのか？……そう言う事か」

エリトラはクロスが進むのを止めたのが気になったようで、奥を覗
き込むと少し歩いた先には道がなく、急斜面の下り坂になっている。

「ずいぶんと急な坂ですね。滑って転んだら、痛そうです」

エリスはクロスとエリトラの隣に並び、下り坂を覗き込み言つと、

「……………どうして、私を見るんですか？」

クロス、フィル、エリトラの視線がセフィに向けられ、セフィは苦
笑いを浮かべながら聞き返すが、

「転がらないようにするにはどうするべきだ？」

セフィを無視して、エリトラはクロスとエリスに意見を求め、

「とりあえず、転んでも転がり落ちないようにどこかに命綱を縛っておけばいいんじゃないですかね？ 帰る時はそれをつかんであがってきたら、良い訳ですし」

エリスは命綱は必須だと言い、

「先を見ってくる」

クロスはセフィが転がり落ちても大丈夫なのか確認しに行くと言う。

「ですから、どうして、私が転がる事が前提何ですか！？」

セフィは声をあげるが、

「クー」

フィルはそれ以上は何も言わない方が良いと言いたげにセフィの肩を叩き、

「フィルちゃんまで！？」

セフィは声をあげると、

「私だって、坂道くらい転がらないで降りられます」

バカにされているのが不服のようで頬を膨らませて言い、

「みなさんが行かないなら、私が先におります」

軽く意地になっっているようでそう言い歩きだしたところで、

「……あれ？」

クロスがランタンを持っているため、暗闇の中に足を出したせいで、足元の確認を怠ったため、早速、足首が変な方向に曲がり、

「ふえええええ！？」

坂を転がって行く。

「……何と言うか。お約束な事しかないよな」

セフィが転がって行ったのを見て、エリトラはため息を吐き、

「そうですね」

エリスは苦笑いを浮かべると、

「フィル、先に行け」

「クー」

クロスはフィルにセフィの様子を見て来いと言い、フィルは頷きセフィを追いかけて行く。

story・94（後書き）

どうも、作者です。

セフィ、転がる。（爆笑）

なぜか彼女をいじめたくなるのは作者がSだからでしょうか？

後書きを書くのは久しぶり？　もしくはこの作品は書いてないかも
知れません。

ここ2、3日は集中して書きたいと思いますが約束はできません。
感想などをいただけると頑張れる気がしますので心やさしい方はお
願いします。

story・95

「ううう、痛いです」

セフィは転がり落ちた後、暗闇の中で何とか止まったようであぐらまっ
まっしている、

「クー」

フィルがセフィを見つけて心配そうに声をかけるが、

「フィルちゃん？ どこですか？」

セフィの目は暗闇に慣れていないせいか、フィルを見つける事は出
来ずにいる。

「クー」

フィルはセフィを落ち着かせようと思ったようであぐらまを吐き、
明かりを灯すが、

「……………」

明かりが灯ったその時、

セフィの視線には何かが映ったようで、

「きゃあああああ」

セフィは悲鳴にも取れる声をあげる。

「……何があつたんだろうな？」

響いてきたセフィの声にエリトラはため息を吐くと、

「わかりませんが、急ぎましょう」

エリスはセフィの身を心配しているようで頷き、

「まあ、そうだな」

エリトラは何かを思い出しているのか、真剣な表情になり歩を速め、先を進み始めるが、

「……慌てるな。状況もわからないで先に進むのはただのバカだ」

クロスは歩を速める事はない。

「クロスくん、セフィちゃんが心配じゃないんですか？」

クロスの言葉にエリスは怒り気味にクロスに言うが、

「急いで、あのバカと同じく転げ落ちる気か？」

クロスは表情を変える事なく言い、

「フィルがいる」

フィルを信頼しているようで、セフィは問題ないと言い切り、

「ですけど」

エリスはクロスの言葉に不安げな表情のまま言っと、

「話してる暇なんてないだろ」

エリトラはクロスとエリスが話をしているのを見て、そんな事より先に進めと言う。

「……」

エリトラの言葉にクロスは返事をする事なく、先を進め始めると、

「エリトラさん、灯りもないのに危ないですよ」

エリスは暗闇の中を進んで行くエリトラに声をかけるが、

「……」

エリトラはセフィを助けに行く事しか考えていないようでエリスの声は耳には入らない。

「……行くぞ」

クロスはエリトラの様子に何かを感じ取ったようでエリスに向かい言っと、

「エリトラさんはどうしたんでしょうか？」

エリスはエリトラの鬼気迫るような行動に不安げな表情をする。

「……戦争を経験した人間はどこか壊れている。あいつは助けられなかった仲間とあのバカを重ねているんだろう」

クロスは表情を変える事なくそう言い切り、

「……それって、危ないですよね？」

エリスはクロスの言葉に彼女なりに思うところがあるようでクロスに聞き返し、

「……ああ」

クロスは短く頷く。

「何かに囚われれば、周りを見る事ができなくなる」

クロスは自分の事を言っているようで、自虐的な笑みを浮かべながらもエリトラの後を追いかけて行き、

「それがわかってるなら、もう少し」

エリスはクロスの後ろを歩きながらため息を吐くが、

「……そんなに簡単に割り切れれば、誰も神などくだらないものにはすぎらない。自分の過去に囚われるのも、神など偶像にすぎるのも結局は人が弱いからだ」

クロスは自分が弱いと言う事を理解しながらも復讐からは逃げられ

ないと言いたいようでそう言い、

「そうかも知れませんが……」

エリスはクロスの言葉に心配そうにクロスに中に声をかけようとするが、クロスの苦しみを理解していない彼女には言葉が見つからない。

「クー？」

フィルはセフィが声をあげた意味がわからずに首を傾げると、

「クー」

もう1度、辺りを照らすために小さく炎を吐き、セフィを確認する。

「クー」

フィルはセフィを確認して、セフィに歩み寄り、

「クル？」

セフィの顔を覗き込むと、

「フィルちゃん」

セフィはフィルをしっかりと抱きしめ、身体をふるわせている。

「セフィ、フィル、どこだ？」

地面が崩れる音に混じり、エリトラの声が暗闇の中に響き、

「クー」

フィルはセフィの腕の中からエリトラを呼ぶと、

「無事か？」

エリトラはフィルの声をたどりに着きセフィに声をかける。

「……エリトラさん？」

セフィはエリトラの声に声を振るわせながら返事をする、

「何があつたんだ？」

エリトラは周りを警戒しながら、セフィの叫び声をあげた理由を聞き、

「そ、そこに大きな蜘蛛が！？」

セフィは蜘蛛が苦手だったようで、フィルが辺りを照らした時に蜘蛛が見えたために声を上げたと言う。

「……………何？」

エリトラはセフィの言葉に一瞬、何を言われたか理解が出来なかったようで、聞き返すのに間が開き、

「……………蜘蛛くらいで、あんな声をあげるな」

呆れたようなため息を吐きながらセフィに言うが、

「だ、だって、ものすごく大きかったんですよ」

セフィにとっては一大事だったようで、フィルを抱きしめながら泣き出しそうな声で言う。

「でかいと言ってもたかが蜘蛛だろ」

エリトラがため息を吐いた時、

「グルル」

フィルが何かを感じたようで唸り声をあげ、セフィの腕からすり抜け、

「フィル」

エリトラはフィルの唸り声に何かを感じたようでフィルの名を呼ぶと、

「ゲー」

フィルは暗闇に向かい炎を吹き、炎で照らされた場所には、人と変わらない大きさの大蜘蛛がこちらをうかがっている。

「いやああああ!？」

セフィは蜘蛛を見て、再度、悲鳴を上げ、

「……確かにでかいな」

エリトラは蜘蛛のサイズを確認して引きつった笑みを浮かべ、

「ゲル」

フィルは唸り声をあげたまま、暗闇を睨みつけている。

「だ、だから、大きいって言ってたじゃないですか!？」

セフィはエリトラに向かい言っと、

「……だからと言って、あれはでかすぎだろ」

エリトラはセフィの言葉に答え、

「セフィ、立て。やるぞ」

大蜘蛛の相手をするために、セフィに立てと言っが、

「む、無理です。私、蜘蛛だけはダメなんです」

セフィは蜘蛛が苦手なようでそう叫ぶ。

「……んな事を言ってる場合か」

エリトラはセフィの言葉にそう言っと、

「ゲル」

フィルが大蜘蛛と戦闘を始めたようでフィルの炎が辺りを照らして行き、

「立て、前衛がいないと俺は魔法を使う時間が取れない。見えない

ままではフィルだけじゃ手詰まりだ」

エリトラはセフィに立てと言うが、セフィはただ首を振るだけで立ちあがらない。

「……ちっ」

エリトラはセフィの様子に舌打ちをすると、待つてはくれない大蜘蛛との戦闘に対処をしようと詠唱を始めるが、

「……ちっ」

大蜘蛛はエリトラに向かい糸を吐き、エリトラはその糸を交わすが、魔法の詠唱は途絶えてしまう。

「……不味いな。俺の魔法は詠唱に時間がかかるのに、セフィがこれじゃあな」

エリトラはロッドを構えるが、自分の使う妖精魔法に時間がかかる事を理解しているせいか、今のままでは魔法の詠唱ができないため、背中にいやな汗が伝い始め、

「グー」

フィルは上手く大蜘蛛の攻撃は交わしているようだが、フィルより、大蜘蛛の方が暗闇の中でも相手を視界に捉えられるようで、フィルに向かい繰り出される攻撃は徐々に正確になって行く。

「……おい」

エリトラは今の状況を打破しようともう1度、セフィに声をかけるが、

「……………」

セフィはただ首を振るだけで何もする事はない。

「……………どうする?」

エリトラは今の状況を覆すために考え始めるが、

「……………ちっ、今は防戦するしかないか」

セフィがこんな状況ではどうしようもないように防戦を決めて、クロスとエリスが追いつくのを待とうと考えを決めた時、

「みなさん、目を閉じてください」

エリスの声が響き、

「ライト」

エリスが先ほど使用した辺りを照らす魔法を唱えると、暗闇は昼間のように明るくなり、

「……………」

クロスの剣がフィルと対峙していた大蜘蛛の1匹を1振りで斬り捨てる。

「……フィル、行くぞ」

「クー」

クロスはフィルと背中を合わせると、剣を大蜘蛛に向け、フィルはクロスの到着に一先ず危機を脱したと感じたようで嬉しそうに返事をする。

「エリトラさん、今のうちに魔法の詠唱を始めてください」

「お、おう」

エリスはエリトラの前にいた大蜘蛛を鎚で殴りつけるとエリトラをかばうように立ち、エリトラに魔法の詠唱を始めるように言い、

「セフィちゃん、怯えてる暇なんてありませんよ。クロスくんもフィルちゃんもこの数を相手にするのは大変なんですから、そこで怯えてたって、誰も守ってくれないんですからね」

「ですけど……」

エリスはセフィに向かい言うが、彼女は半泣きでエリスに向かい何かを言おうとするが、

「自分が苦手なもので、顔をあげなさい。あなたの行動次第で、この中の誰かが死ぬかも知れないですよ。これはあなたが考えも無しに歩きだした結果です」

エリスは今までのおっとりとした口調とは異なり、セフィを怒鳴りつけながら、クロスとフィルが仕留め切れなかった大蜘蛛を殴りつけている。

「……サラ、頼む」

エリトラは魔法の詠唱を終えたようで、サラを呼び出すと、

「立て、さつきも言ったが、このままじゃ、ジリ貧だ。蜘蛛どもは奥からどんどん湧いて来てやがる」

エリスの魔法で明るくなっているため、全体を見渡し、蜘蛛達が洞窟の奥から現れている箇所を見つけて言う。

「ふええええ！？」

セフィは辺りが明るくなった事で、苦手であるはずの蜘蛛を目の当たりにしたようで情けない声をあげると錯乱しているのか立ち上がり、剣を振りまわしはじめる。

「……これはどうしたら良いでしょうか？」

「……知るか。とりあえず、立ち上がったんだから援護くらいすれば良いだろ」

「……ですよね」

エリスがセフィを見て、苦笑いを浮かべながら、隣で大蜘蛛の死体の山を積み重ねて行くクロスに聞くと、クロスはセフィを無視して

淡々と大蜘蛛を斬り捨てて行くが、

「……ちっ」

何体もの大蜘蛛を斬り捨てて来たせいか、剣の刀身が歪んできたよう
うで、大蜘蛛の牙に剣が止められてしまう。

「クロスくん、大丈夫ですか？」

「……ああ」

エリスはクロスの剣を受け止めた大蜘蛛を鎚で殴り飛ばし、クロス
と背中を合わせると、

「らちがあきませんね。……退きますか？」

「この状況じゃ、どうにもならないだろ」

退却を提案するが、クロスはすでに退路は大蜘蛛の大群により、断
たれていると判断しているようでそう言い、

「俺とフィルで時間を稼ぐ、その間に支援を頼む」

「その剣で持ちますか？」

「当然だ」

クロスはエリスに魔法を使って欲しいようでそう言うが、エリスは
今のクロスの剣では持たないと思うが、その杞憂をクロス自身が否
定し、

「行くぞ。フィル」

「クー」

フィルに向かい言った時、

「クロス、フィル、セフィ、エリス、下がれ」

エリトラの声が響き、

「燃え散れ」

エリトラは今まで、魔法の詠唱を始めていたようで大蜘蛛の群れに向かい大きな火球が飛びだし、

「ふえっ!？」

「……」

「……凄いですね」

「クー」

クロスは火球に驚きの声をあげているセフィを抱えて火球を交わし、フィルとエリスは大蜘蛛に向かい放たれた火球を見て驚きの声をあげている。

「これで、少しは借りを返したな」

エリトラは今の状況が自分が突っ込んで行つた事にも責任があると感じているようではそりと言つと、

「……気を抜くなよ」

「わかつてるよ」

クロスはその言葉に何も言うわけではなく、この大蜘蛛の群れの中にいるであろう存在を警戒したように言い、エリトラは真剣な表情で頷く。

「……」

「セフィちゃん？」

「……」

「クー？」

エリスが目の前で大蜘蛛が燃えている様子を眺めているセフィに声をかけるが、彼女はエリスの声が聞こえていないか呆然としており、その様子にフィルがセフィの顔を覗き込むが反応しない。

「……しかし、こいつらこちら辺に生息してたか？」

「いや、今まで見た事がないな」

「ええ。何度もこの辺の鉱山にはきてますが、1度も見た事はないです」

エリトラはクロスが斬り捨てた大蜘蛛の死体を見ながら言うと、この一帯を主な活動地域にしているクロスとエリスの2人はその言葉に大蜘蛛の群れがこの場所にいる事を不思議なように怪訝そうな表情をする。

「ぐおおおお」

「……考えるのは後にするか」

「そうだな。今の状況を考えて大ボス登場って事だろうし」

大蜘蛛がこの場所にいる理由を考え始めた時、唸り声が響き、その唸り声は大きくなりながらこちらに近づいてくる。

「それじゃあ、どうします。帰っちゃいますか？」

「ずいぶんと後ろ向きの提案だな」

唸り声が近づいてくるなか、エリスは撤退を提案し、エリトラはため息を吐くと、

「でも。今の状況では1番無難な策ですよ。クロスくんの剣は使えない。フィルちゃんもガス欠、セフィちゃんは言うまでもなく」

「クー……ぶすぶす」

エリスは現状を正確に判断しているようで苦笑いを浮かべ、フィルはエリスの言葉を否定しようと炎を吹こうとするが、炎は上がらず、恥ずかしそうに頭を掻く。

「……確かに、俺の魔法でしばらくは足止めできるだろうしな」

「そう言う事です。唸り声の原因はつかめてませんが、この大蜘蛛の生息地を発見できました。本来、いるはずのないものがここにいるのも先ほどの壁の件も、誰かの作為を感じますが全滅だけは避けないといけません」

エリトラはエリスの提案に納得しかけた時、

「……いつまでそうしてるつもりだ？」

「!? ……クロスさん、痛いです」

いつまでも呆然としているセフィの頭をクロスが叩き、セフィは頭を押さえながらクロスの顔を見上げると、

「くるぞ」

「おい。クロス」

クロスは一言そう言い、刀身の歪んだ剣を構え、燃え上がっている炎に向かい駆け出し、エリトラはクロスを呼び止めるが、クロスは炎の後ろから近づいてくるものに集中しはじめたように振り返る事はない。

「……どうやら、逃げられないみたいですね」

「グー」

エリスはクロスの様子にため息を吐き、フィルもクロスと同様に向かってくるものの気配を感じ取ったようで唸り声を上げ始める。

「おいおい。帰るんじゃないのかよ」

「まあ、そうしたいのはやまやまなんですけど、どうやら、後ろの方を怒らせちゃったみたいですから」

エリトラはため息を吐きながら言うと、エリスは炎に映っている巨大な影を見て苦笑いを浮かべ、

「……また、蜘蛛ですよ」

「それもさっきのは比べられないサイズだな」

「たぶん、さっきの蜘蛛さんの親御さんでしょうね」

セフィはその影を見て涙を浮かべて言うなか、エリトラとエリスは苦笑いを浮かべながらもしっかりと戦闘態勢を整えようしているように、魔力を集中させて行く。

「バカ女、さつさと用意しろ」

「は、はい!？」

クロスはセフィに向かい前に出て来いと言った時、

「!？」

「クロスさん!？」

炎の隙間からクロスに向かい糸が吐き出される。

「ちっ……」

「だ、大丈夫ですか？」

クロスは後方に跳び、糸を交わすとセフィはクロスに駆け寄るが、

「どん」

「きゃ!？」

クロスはセフィを押しのと彼女を狙っていたのかセフィが駆け寄った場所には糸が吐き出されている。

「人の事を心配できるほど、お前に余裕はあるのか？」

「ですけど、押す事はないじゃないですか？」

セフィはクロスに押された時に腰をぶつけたようで腰をさすりながら立ち上がると、

「いちゃついてないで、準備しろよ」

「そうですよ」

2人の様子を後ろから見ていたエリトラとエリスの2人から冷やかし言葉が飛ぶ。

「い、いちゃついてなんていません！？」

「……くだらない事を言う暇があったら、支援魔法の1つでも唱える」

セフィはエリトラとエリスの冷やかしに声をあげるが、クロスはセフィとは対照的に表情を変える事なく炎の奥からこちらを狙っている敵を睨みつけたまま言う。

「はいはい。わかってますよ」

「ふえっ！？」

エリスがため息交じりに頷いた時、彼女は支援魔法を唱え終えたように、クロスとセフィの剣が炎をまとい赤く輝き出し、セフィはその様子に驚きの声をあげる。

「……………」

「それじゃあ、わたしも前に出ますから、エリトラさん支援お願いしますね」

「……………ああ」

セフィが隣で驚きの声をあげているのを無視して、クロスは改めて剣を構えるとエリスはクロスの様子に苦笑いを浮かべながら炎の前に駆け出す。

「……………お前ら、タイミングを合わせろよ」

「ふえっ!?!」

エリトラは魔法の準備を終えたようでそう叫ぶと、炎の後ろにいる巨大蜘蛛の立っている地面が揺れだし、大蜘蛛を燃やしていた場所の地面が沈み土煙が上がる。

「行くぞ」

「はい」

「ま、待ってください!?!」

土煙が上がる中、地面が沈んだ事により、大蜘蛛を燃やしていた炎が弱まり、クロスとエリスは巨大蜘蛛に向かい駆け出して行き、セフィは目の前の巨大蜘蛛に怯みながらも2人の後を追いかけて行く。

「……やっぱり、怒ってますね」

「……」

炎を抜けた先にはエリトラやエリスが予想した通り、先ほどまで相手をしていた大蜘蛛の親だと思われる巨大な蜘蛛が不気味に光る赤黒い瞳に殺意を込めてこちらを見つめている。その巨大蜘蛛を見て、エリスは苦笑いを浮かべ言うが、クロスはエリスの言葉に答えるわけでもなく、巨大蜘蛛に向け剣を構える。

「……エリス、あいつのカバーを任せるぞ」

「はい。任せました」

「……」

クロスはエリスに向かい、セフィの援護を任せると言い、エリスはなんだかんだ言いながらもしっかりとセフィの事を気にかけている。クロスを見て微笑むがクロスはエリスの返事を聞く事なく、巨大蜘蛛との距離を縮めて行く。

「ク、クロスさん、速いですよ」

「セフィちゃん、わたしたちの仕事はエリトラさんが魔法を使うまでの時間を稼ぐことです。クロスくんが囷を買って出てくれましたけど、さっきも見た通り、糸による遠距離攻撃もありますからね」

セフィは先に進むクロスに向かい言うが、彼は振り返る事なく巨大蜘蛛の目の前まで移動すると真つ先に巨大蜘蛛の視界を奪うために巨大蜘蛛の右目を潰そうと勢いよく地面を蹴り斬りかかるが、

「……ちっ」

巨大蜘蛛はその大きな身体の割には素早いようで、大きな牙でクロスの剣を防ぐと、剣を弾かれ体勢を崩しかけたクロスに向かい糸を吐く。

「クロスさん!？」

「……」

その様子を見て、セフィは慌てながらクロスの名前を叫ぶが、クロスは剣を弾かれ、巨大蜘蛛の反撃を受ける事をあらかじめ予想していたのか空中で体勢を整え、ギリギリで糸を交わす。

空中で体勢を整えたクロスは地面に着地をすると、先ほどのエリトラの魔法で地面がもろくなっているようで、土煙りが上がる。

「ぐる」

その土煙により巨大蜘蛛の視界からクロスが一瞬だけ消えたのか、巨大蜘蛛は小さな唸り声をあげると、

「……」

クロスはその時を見逃さなかったようで土煙が上がる中、再び、巨大蜘蛛に向けて斬りかかり、

「……ぎゃああ」

クロスの剣の軌跡は的確に巨大蜘蛛の右目を斬りつけると、エリスから受けている支援魔法の効果なのか肉が焦げる匂いがただよう。

「あの、私達が援護する必要ってあるんですかね？」

「そうですね」

目の前で、優位に戦闘を繰り返しているクロスの様子を見て、セフィはあの中に飛び込む勇気がないのか引きつった笑みを浮かべると、エリスもクロスの足を引っ張ると思ったのか苦笑いを浮かべながら答える。

「へたにあそこまで行くと事故になりそうですね。セフィちゃんは攻撃魔法って使えます？」

「は、はい。あまり多くはないですけど、神聖魔法にも攻撃魔法はありますから」

すでにエリスの中では、巨大蜘蛛への直接攻撃はクロスに任せる気になっているようで、セフィに魔法の事を聞くと、彼女は自分も攻撃魔法を使う事ができると答え、

「それなら、クロスくんにあたらないようにここら辺から狙いましょうか？」

「で、でも、良いんですかね？」

「良いんです。良いんです」

セフィはエリスの言葉に苦笑いを浮かべるが、すでにエリスはここから魔法を撃つために詠唱を始めだす。

「……セフィとエリスは何をしてるんだ？」

「クー？」

後ろからセフィとエリスの様子を見て、エリトラは首を傾げるとエリトラの護衛に残ったフィルも首を傾げる。

「まあ、俺は俺の仕事をするだけか」

「クー」

エリトラは前の2人の様子も気になるが、自分は自分の仕事に徹しないとあの巨大蜘蛛を倒せないと感じ取っているようだとため息を吐く。

「……フィル、俺は今までより、長い時間、魔法を詠唱しないといけないから頼むぞ」

「クー」

エリトラは魔法の詠唱中に無防備になるため、フィルに向かい言うのと、フィルは炎を吹いて見せようとするが、相変わらずガス欠のようで『プスプス』と小さな煙が上がり、フィルは恥ずかしそうに頭を掻く。

「……そりゃそうだな。これを使ってくれ」

「クー」

エリトラはフィルの様子に苦笑いを浮かべるとフィルに小瓶を渡す。フィルはエリトラから渡された小瓶を見てそれを一気に飲み干すと、

「クー」

「いや、魔力の無駄使いは止めてくれ」

身体に力が戻ったのを実感したのか、大きな炎を吹き、エリトラはフィルの様子にため息を吐く。

「それじゃあ、フィル、頼むぞ」

「クー」

改めて、エリトラが言うところフィルは任せろと言いたげに自分の胸を叩き、こちらに飛んでくる糸を炎で燃やしながらエリトラの魔法詠唱の時間を稼いでいく。

（……ちつ。やっぱりこの剣じゃ無理か）

クロスは巨大蜘蛛の攻撃と後ろからの援護射撃を交わしながら、攻撃を続けて行くが、剣はクロスの手になじんでいないせいか巨大蜘蛛に致命傷を与えるような傷はつけられない。

（まあ、こいつさえ倒せば後はどうにでもなるだろうし、最後までもてよ）

クロスは剣を持つ両手に力を込めると、力強く地面を蹴り、渾身の

力を込めて巨大蜘蛛の前足を斬り裂く。

「ぎゃああ！？」

巨大蜘蛛はクロスに前足を切られ、悲鳴らしい声を上げながら、バランスを崩し前のめりに倒れ込むと辺り一面に土煙が上がる。

（……これで動きは制限されたな。後はエリトラの魔法を待ちながら、削って行くか）

巨大蜘蛛の動きを制限した事でクロスは一息吐くが、彼は緊張感を解く事はなく、剣を構え、

（……とりあえずはもう1本の前足をどうにかすれば大部楽になるな）

次の目標を決めた瞬間、

「！？」

巨大蜘蛛から糸が吐き出され、クロスは当然、それを交わすが、

「セフィちゃん！？」

「ふえっ！？」

糸の先にはセフィが立っており、セフィの身体に糸が絡みつくとも巨大蜘蛛は一気に糸を引っ張りセフィの身体は空中に跳ね上がり巨大蜘蛛まで一直線で引き寄せられて行く。

（……ちっ、あのバカ）

「クロスくん、避けてください!!」

セフィの様子にクロスは舌打ちをすると糸を斬り裂こうとするが、エリスの声が響き、エリスから巨大蜘蛛の口に向かい火球が飛ぶ。

「ぐぎゃああ!?!」

「ふえええ!?!」

クロスはエリスの声に直ぐに反応し、ギリギリまで火球を引きつけたところで火球を交わすとクロスの影に隠れていた火球は巨大蜘蛛の視角から外れていたようで、巨大蜘蛛の顔面に直撃し、セフィは巨大蜘蛛に到着する前に火球が直撃したため、糸が焼き切れ地面を勢いよく転がって行くと、

「……開け」

エリトラの魔法の詠唱が終わったようで、巨大蜘蛛の後ろに巨大蜘蛛を飲み込む位のサイズの歪みが現れその歪みから巨大な手が這い出し、巨大蜘蛛を歪みの中に引きずりこんで行く。

「クロス、今だ」

「……これで終わりだ」

エリトラは巨大蜘蛛の動きを完全に封じたため、クロスにとどめをさせと叫ぶと、クロスはすでに次の行動に動いており、渾身の力を込めた剣を巨大蜘蛛の首筋に振り下ろす。

クロスの剣が振り下ろされると巨大蜘蛛の頭が地面に落ち、巨大蜘蛛の赤い体液が切断面から吹き出し、クロスを真っ赤に染めて行く。

（……折れたか）

クロスは巨大蜘蛛の首を斬り落とすと先ほどまでもに戦っていた剣にも限界がきたようで刃の根元からぽっきりと折れてしまう。

「……」

クロスが折れた剣をフィルとエリスはクロスの元に駆け寄ってくるなか、後ろからエリトラがゆっくりと歩いてくる。

「クロスくん」

「……何だ？」

エリスはクロスの名前を呼び、クロスは鬱陶しそうに返事をする、
「いつもの事ですけど、どうして、仕事をするたびに剣をダメにするんですか？」

「……悪い」

「……言つべきところはそれなのか？」

エリスはにっこりとほほ笑みながらクロスに向かい言うが、その額

にはしっかりと青筋が浮かんでおり、クロスは若干怯んだのか素直に謝り、2人の様子にエリトラは苦笑いを浮かべる。

「当然です」

「いや、エリスは鍛冶師なんだから。剣が折れた方が儲かるだろ」

「確かに目先の事を考えればそれが良いのかも知れませんが、武器は使用者の命を守る筈、ともに歩むパートナーなんです。そんなにポンポンと折られたら、その子達が可哀想です」

エリトラの言葉にエリスは当然だと言い切るとエリトラは苦笑いを浮かべたまま言い返すが、エリスは何かのスイッチが入ったのかおかしいテンションで話し出す。

「……クロス」

「気にするな。それより」

エリトラはエリスを見て、クロスに助けを求めるが、彼はすでになれているのかエリスの暴走を気にする様子はなく、巨大蜘蛛がここにいる理由を調べようとしているのか巨大蜘蛛の死体を調べ始めている。

「……おい」

「……」

エリトラはクロスの行動にため息混じりでクロスを呼ぶが、クロスは気にする事なく、死体を調べ続けている。

「クロスさん、エリトラさん、助けてください」

「……ん？ セフィ」

「……忘れていたな」

エリトラがクロスの様子を見て、ため息を吐きクロスを手伝おうとした時、セフィの声が聞こえ、クロスとエリトラはセフィは巨大蜘蛛の糸に絡まったまま地面に転がってるのを思い出す。

「ううう、忘れるなんてひどいですよ」

「クー」

「ああ、悪い」

「……避けないお前が悪い」

クロスとエリトラがセフィを回収しに行くすでにフィルはセフィの元に来ており、セフィは涙目で2人に向かい言っているとフィルはセフィに同意を示し、エリトラはセフィに向かい謝るがクロスが謝る事はない。

「まあ、とりあえずは糸を外すか？」

「お願いします」

エリトラはセフィの様子に苦笑いを浮かべて言っているとセフィは地面に転がったまま、エリトラに向かい言つが、

「……やっぱり、クロス、お前がやれ。俺はあれを調べてくる」

「……断る。お前がやれ」

エリトラはセフィをクロスに任せると言い、クロスは当然、その言葉を拒絶する。

「どうして、2人して嫌がるんですか？」

「今、お前に騒がれると調べ物が壊されそうだからだ」

「いや、クロスの方が適任だと思ったただけだ」

セフィはいつまでも助けたくない2人を見て言うと、クロスはセフィが調べ物の邪魔になると言い、エリトラは何かあるのかクロスに任せると言う。

「エリトラが助けられないなら、放置で良いだろ。調べ物で役に立つとは思えん」

「……確かに」

「そ、そんな事を言わないでください！？ それに、私だって何かの役に立ちますよ」

しかし、クロスはセフィを助ける気などないようでセフィを見捨てるとエリトラもセフィは調べ物には役に立たないと判断したようで頷き、2人の様子にセフィは声をあげる。

「……無理だな」

「無理だな」

「……クー」

クロスはセフィを見下すような視線を向けてセフィに言い、フィルとエリトラは苦笑いを浮かべながら同意する。

「ど、どうしてですか!？」

「いや、何となく、今までの状況を見て」

「静かにしてないと調査が終わっても置いて帰るぞ」

セフィは声をあげるとエリトラは苦笑いを浮かべたまま言うが、クロスは本当にセフィが調査の邪魔だと決めつけているようでそう言い、調査を再開しようとする。

「クロスくんもエリトラさんも意地悪を言っていないで助けてあげてください」

「エリスちゃん」

「べたべたするから、抱きつかないで下さいね」

エリスが我に返ったようでセフィを捕えている糸を外して行き、セフィはエリスが助けてくれた事に感動したのかエリスに抱きつこうとするが、エリスは笑顔で拒絶する。

「た、助けてくれてありがとうございます」

「いえ、どういたしまして」

セフィはエリスの対応に少し微妙な表情でお礼を言うがエリスは気にする事なく頷き、

「……なあ、エリスは黒いのか？」

「天然なだけだ」

「クー」

2人の様子にエリトラは苦笑いを浮かべる。

「特に何もなさそうだな…… エリス」

「どうかしましたか？」

しばらく、調査をしてみるが結局何も見つからずにエリトラがエリスを見ると彼女はしつかりと巨大蜘蛛の牙を取り外している。

「……いや、良い。それで、一応、こいつのとどめを刺した後は唸り声も聞こえなかったし、奥に有った卵は燃やした。唸り声の正体は排除したけど、どうする？」

「……現状じゃ、何とも言えないな。この入口にあった仕掛けを作った奴やこの蜘蛛をここに配置した人間の意図が見えない」

「だよな」

エリトラはエリスを軽く無視しながらクロスに向かい聞くとクロスはここまで進んできた経緯を思い出しているのか何かが引っかかっているようでそう言っていると、エリトラもクロスと同意見のようで真面目な表情で頷く。

「ですけど、そろそろ、帰りましょう。このままじゃ、いつまで経っても何も答えは出ないですし、遺跡を調査する人達に状況を説明して、そちらの方も調べて貰いましょう」

「……まあ、そうなんだけどな」

クロスとエリトラの話聞いて、エリスが彼女のなりの意見を述べるとクロスとエリトラもその事はわかっているようで頷く。

「……フィルちゃん、私、置いてけぼりです」

「クー」

3人がこの後の事を話しているなか、セフィは自分がこの本当に役立たずだと理解したのか座り込んでフィルに向かい愚痴をこぼしている。フィルはセフィの肩を叩きながらセフィを励ましている。

「原因は遺跡の中にあるかも知れないが今はどうしようもないからな。依頼は達成したし、今日はこれで帰ろう」

「そうですね」

「おい。そこでいじけてるなら置いて帰るぞ」

「ま、待ってください!？」

このままここにおいても何も変わらないと判断したようすで街に帰る。

鍛冶師組合

クロス達は依頼の達成を依頼者であるデュオに報告しに鍛冶師組合に顔を出す。

「……そうか。唸り声の原因は巨大蜘蛛か」

「はい。ですけど、わたし達の見立てでは巨大蜘蛛をあの遺跡の中に配置した人がいます」

「……考えられる事は、あの遺跡を調べられては都合の悪い人間がいると言う事か？」

デュオは報告を聞くと遺跡に何かしらヒントがあると考えているのか何かを考えるように言う。

「まあ、俺の方から調査依頼を出しておこう」

「ああ、頼む」

デュオは流石に組合の長であるだけあってクロス達からの報告を受けて次にやるべき事を理解しているようで、そう言うところクロスは納得しているようで頷く。

「報酬の方は剣の旅団を通してから面倒だろうが、蒼き剣亭で受け取ってくれ」

「そうなんですか？」

「ああ、セフィは初心者だったんだな。基本的にギルドを通した依頼はギルドから情報料を天引きされている。後はクロスにでも聞いてくれ。俺はまだ仕事が残ってるんでな」

デュオが報告はこれまでだと判断し、報酬の話をするセフィは驚きの声を上げ、デュオはセフィの様子に苦笑いを浮かべる。

「はい」

「……」

「クロス、きちんと説明してやるんだぞ。やらないとあいつに報告させて貰うぞ」

セフィはデュオの言葉に返事をするクロスは面倒くさそうな表情をするが、デュオはクロスの様子を見て苦笑いを浮かべたまま言う。

「……わかった」

「それじゃあ、今日はありがとうございました」

クロスがデュオの言葉に苦虫を噛み潰したような表情を見るとエリスはその様子を見て苦笑いを浮かべながら頭を下げる。

「エリスちゃんは行かないんですか？」

「エリスは鍛冶師組合からの同行だからギルドを通して無いだろ」

「そうですね」

セフィがエリスの様子に首を傾げると後ろで話を聞いていたエリトラがため息を吐きながらセフィに言い、エリスは苦笑いを浮かべて頷く。

蒼き剣亭

「おかえり」

「おそかったな」

クロス達が蒼き剣亭に帰ると店主であるジルとともにパナシエが4人を出迎える。

「ただいま。帰りました」

「……」

「クロス、何でお前がいるんだって顔で見ないでくれるか？」

セフィは2人に向かい笑顔で答えるが、クロスはパナシエの相手をするのが面倒そうな表情をし、パナシエはクロスの顔を見て苦笑いを浮かべる。

「まあ、とりあえずはみんなが無事に帰ってきた事を喜びなよ」

「そうですよ。誰1人欠ける事なく帰ってきたんですし」

「クー」

クロスとパナシエの様子にジルが苦笑いを浮かべながら言う「セフィはジルの言葉を肯定すると、フィルは大きく頷く。」

「セフィの言う事も一理あるだろ。とりあえず、歩きっぱなしだったんだし、座ろうぜ」

「……」

「クロス、報告を済ませてくれないか？」

エリトラがため息を吐きながらカウンター席につくが、クロスは早いところ帰りたいのか席に座らず、パナシエはそんなクロスに仕事の報告をしろと言う。

「……報告なら、そっちの2人から受ける。ジル」

「悪いね。報酬はパナシエが直接渡すって言うから、あたしは持ってないよ」

「そう言う事だ。早く済ませたいなら、早く説明しろ」

クロスは報告をセフィとエリトラに押し付けて帰ろうとするが、パナシエはすでにクロスの行動を読んでいたようでクロスに向かい再度、説明を求めるとクロスは不機嫌そうに席に座り、セフィは慌てた様子でクロスの隣に座る。

「……なるほどね」

クロスからの報告を受けてパナシエは真面目な表情をして頷くと、

「この件で君達にまた仕事を依頼するかも知れないが、その時はよろしく頼む」

「はい」

「ああ……」

調査の内容次第でまた何か仕事を頼むと言うとセフィとエリトラは返事をするがクロスは返事をする事はなく、そんなクロスの様子にパナシエは苦笑いを浮かべる。

「それじゃあ、報酬とセフィ、エリトラ、昨日の返事を聞かせて貰ってもいいかな？」

「昨日の返事？」

「剣の旅団に入るかどうかだろ」

パナシエはセフィとエリトラに向かいギルドへの登録をどうするか2人に聞くがセフィは何の事を言われているかわからないようで首を傾げ、エリトラはため息を吐く。

「ああ、それでどうする？」

「えーと」

「俺は入らせて貰う。旅団にいれば使える前衛も紹介して貰えるんだろ？」

セフィはどうするか何も考えていなかったようで、悩み始めるがエリトラは自分の仕事をする上でメリットがあると判断したように入団すると言つ。

「セフィはどうする?」

「えーと、クロスさん、どうしたら良いですかね?」

「……俺に聞くなと言ってるだろ」

セフィは決めきれないのかクロスにアドバイスを求めるが当然、クロスからの解答は決まっており、

「えーと、もう少し考えさせて貰って良いですか?」

「ああ、クロスと組んで実力が上がってくれた状態で入団してくれてもこちらは構わないよ」

「……何で、俺がこいつと組まないといけない?」

セフィは問題を先送りにするとパナシエは苦笑いを浮かべて言い、クロスはその言葉に反論する。

「何でと言われると今回の依頼の件でセフィがクロスと組んだ事は知れ渡ったわけだしね。知れ渡ったわりには実力は伴ってない。ギルドに入ればこちらから仕事を回せるが個人で動くならそこそこの仕事が行われる事になると思うよ。と言うか、個人指定の仕事が来るようになる」

「おい。お前、旅団に入れ」

パナシエはイタズラな笑みを浮かべるとクロスは頭を押さえながらセフィに向かい言うが、

「フィルちゃん、これからもうよろしくお願いします」

「クー」

セフィはフィルに向かい頭を下げ、フィルは任せると言いたげに声を上げ、

「……クロス、諦めたらどうだ？」

「……」

エリトラは苦笑いを浮かべながらクロスに言う。

「まあ、話は決まったようだし、俺はまだやる事があるからこれで失礼するよ。エリトラ、登録手続きはジルに聞いてくれるかい」

「ああ」

パナシエはそう言うと報酬をカウンターに置き店を出て行く。

「フィル、俺達も帰るぞ」

「クー」

クロスは店を出て行くとするが、

「クロス、セフィちゃんも連れて行きなよ」

「なぜだ？」

「だって、セフィちゃん、宿取ってないし、うちはもう満杯だしね。1泊するのも2泊するのも変わらないだろ」

ジルがクロスを呼び止め、ここにはセフィを泊める部屋はないと言
う。

「……おい。何でお前は朝のうちに宿を取ってないんだ？」

「えーと、忘れてました」

「クー」

クロスは額に青筋を浮かべながらセフィに向かい言くと、セフィは小さくなりながら申し訳なさそうに言い、フィルはセフィを守るようにクロスとセフィの間に立つ。

「……ちつ。行くぞ」

「は、はい！？ エリトラさん、今日はありがとございました。また、一緒にお仕事をしましょう」

「いや、遠慮する」

クロスは舌打ちをしながらも諦めたよう歩き始めるとセフィは慌てて返事をした後、

エリトラに向かい言うが、エリトラはセフィの誘いを断る。

「どうしてですか!？」

「どうしてと言われるとツツコミが足りてないからだな。それより、クロスを追いかけて無くて良いのか？」

「あつ！？ クロスさん待って下さい」

セフィは慌ててクロスを追いかける。

「クロスさん、今日も泊めてください」

「……いい加減にしろ」

クロス達が受けた依頼から3日が過ぎた頃、蒼き剣亭でセフィは今日も宿は開かないようでクロスに泣きついていると、

「……お前らは相変わらずだな」

「……このバカと一くくりにするな」

エリトラは食事のためにホールに降りてきたようで、2人の様子を見て、苦笑いを浮かべるとクロスはため息を吐きながら言い返す。

「なあ、ジル、セフィの分くらいは確保できないのか？」

「今は忙しい時期だから、無理だよ」

「そう言えば、忙しい時期って何かあるのか？」

エリトラはセフィが哀れになってきたのかジルに向かい聞くが、ジルは苦笑いを浮かべながら言うと、エリトラはジルの答えに首を傾げると、

「クロス、あたしは忙しいから説明よろしくね」

「……何で俺が」

「まあ、良いじゃないか」

ジルは本当に忙しいようでクロスに説明を頼むとクロスは不満げに言うが、ジルはクロスの様子に苦笑いを浮かべて仕事に戻って行き、

「それで、何があるんだ？」

「祭りだ」

「……いや、一言じゃなくきちんと説明しろよ」

クロスはエリトラに向かい一言で片付けようとするが、当然、エリトラが納得するわけがなく、ため息をついた時、

「この街で鍛冶師や細工師達が自分の技量を競うお祭りがあるんだよ」

「リシエルさん」

「セフィ、元気そうだね、クロス、エリスからの預かりもんだ」

店のドアが開き、クロスの剣を持ったりリシエルが店の中に入ってくる。

「……ああ」

「エリスから聞いてはいたけど、本当にあのエリトラハルハザードがいるなんてね」

「リシエルさん、そんな風に言うのは失礼ですよ」

「ん？ そうかい？」

リシエルがクロスに剣を手渡すとエリトラに近づき、彼を興味深そうに見て言つとセフィは慌てながらリシエルに言つが彼女が気にする様子はなく、

「リシエルⅡイエブナレスだ。あんたの噂は聞いているずいぶんと腕が立つみたいだね。機会があつたら、あたしの仕事を手伝つて貰えないかい？」

「エリトラⅡハルハザードだ。機会があればな」

リシエルはエリトラに向かい握手を求めるが、エリトラはただ挨拶をするだけであり、

「ふむ。どうやら、警戒されているようだね」

「……そんな事より、本題はなんだ？」

「本題？」

リシエルはエリトラの様子を見て苦笑いを浮かべていると、クロスはわざわざリシエルが自分の剣を持ってきた事に何か裏があると思つたようであると言つと、セフィはクロス of 言葉に首を傾げると、

「流石はクロス、話が早いね。物分かりが良いところとしては助かるよ」

「受けるかは別だ。お前がこんな時期に持つて来るって事は厄介な仕事のはずだからな」

リシエルはクロスの隣に座るが、クロスは話だけは聞いてやると言い、

「冷たい男はもてないよ……まあ、もうセフィがいるからもう関係ないって事かい？」

「ふえっ!？」

「……くだらない事を言うな。俺もお前の相手をしているほどヒマじゃないんだ。話すならさっさとしろ」

リシエルはクロスとセフィを交互に見てニヤニヤと笑うとセフィは声を裏返して驚き、クロスはリシエルの言葉に呆れたようなため息を吐く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6205m/>

I wish ~ 背神と名の信仰 ~

2011年9月18日10時45分発行